
SUMMER WARS THE NEXT YEAR

ダイちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SUMMER WARS THE NEXT YEAR

【コード】

N0999N

【作者名】

ダイちゃん

【あらすじ】

陣内栄が逝去して早一年。長野の陣内本家では栄の一周忌法要が執り行われようとしていた。

健二もまた夏希と共に長野へ向い、アメリカからは侘助が。遅れて佐久間にも声が掛かり、舞台は長野県上田市へと続く。

OZで起こっている不可思議な現象が健二の周囲に影を落とした時、一人の男が陣内家の門をくぐった。

あの夏の日から一年……小磯健二の熱い夏が、再び訪れようとしていたのだった。

人類の敵はいつだって

人類そのものなのだろうか…

序幕（前書き）

サマーウォーズのファンフィクションになります。

過去2作、SEPT E M D E R W A R SとFEBRUARY W
A R Sの続編にあたります。

前作の後書きでサマウォの2次創作終了を書いたのですが……自身
の誘惑に負けずに続けてしまいました。なんか、もうお恥ずかしい
限りです。

まあ、こんな口だけ大将の私の続編ではありませんが、もし宜しけれ
ばお付き合い下さい。

前作同様、過去作品とサマーウォーズをご存じない場合には話が見
えないでしょう。既読の上でお読頂く事を推奨します。

タイトルなのですが、【9月】【2月】とききましたが、今作は栄の
一周忌が舞台です。【7月か8月】でも良かったのですがソレを【
夏】と記した原作に習い、【SUMMER W A R S T H E N
E X T Y E A R】としてみました。

3作並べると非常に違和感がありますが、大きな心で許してくださ
い。

過去2作、多くの方にお読み頂き感謝です。感想も頂き感涙モノで
す。

なんか調子に乗って続編なんぞ始めてしまいましたが、最後まで、お
付き合いよろしく願います。

では。

序幕

『んじゃあ、悪いけど佐久間、頼んだよ』

ケンジが申し訳無さそうに言うが

「分かったよ。っ！ ああ、地図、送つといてくれよな？ 俺は初めてなんだからさ」

とくに佐久間に気にした風は無い。見える鳥人間が申し訳なさそうにしている所を見ると健二の心情も伺えるが、今回の一件は佐久間にとつても楽しみなのだ。寧ろ言い出してくれた健二に感謝もある。

「じゃ、俺はバイトが一段落してからだから明後日になるけど、皆さんによるしく言つといてくれよな」

『うん。それはもう。ってか、去年から佐久間の事は皆知ってるから、どつちかつてと佐久間こそ驚くなよ？』

「了解。いつそ陣内家は皆、万助さんみたいなもんだと思うとくよ。それならば驚きようも無いだろう。あの気さくさがデフォルトと思っておけば気後れもしない。些か問題のある一族の出来上がりでは有るが……」

『それはちよつと極端だと』

「冗談だよ。ま、心配するな。こつ見えてもお前よりは社交的だから、俺」

『それは……ま、そうか』どこか安心した。

『それじゃ。あ、地図、送つとくから』

「ああ。じゃな」

pi と電話を切ると直にpiroro と着信。どう

やら健二が早速地図を送つて来た。

ソコには長野の陣内本家の場所が記された地図が在った。

五日後、陣内栄の一周忌法要が執り行なわれる事になっていた。

「栄大婆ちゃん、か……どんな人だったのかねえ、実際」
佐久間に栄の記憶は無い。と言うより、栄との面識が無い。

身内と近しい者達で執り行うと言っていた一周忌。そこへ『折角なんだし佐久間君もお呼びしなさいな』と万理子が言い出したのが事の始まりだった。

ラブマシンの一件では共に戦った同志である。一族が一同に会する事等は盆正月、それに栄の命日だろう。盆でも正月でも無いタイミングなら佐久間にも迷惑が掛からないだろう、との配慮だった。

佐久間としてもあの一件以来、侘助や佳主馬、理一とはOZの中で幾度と無く会っているが実際に会った事は無い。

アバターでしか出会えなかった人達に会えるのであれば、一も二も無く誘いに乗ったのも無理も無い事だ。

健二は明日、夏希と共に長野へ旅立つと言う。佐久間は明後日に追っかけ向う予定だ。バイトの休みは貰えたが、最近のOZでの問題は中々に進展が見られない。思う様には休めなかったという訳だ。

「ったく。お前の所為で一日無駄にされちまったよ」

佐久間は自分のアバターが映るモニターに苦言を洩らし、コッソリと指で弾いた。

「な〜〜にがしたいのかね〜〜……エンジェルさん？」

その指の先では可愛らしい天使がサクマの肩に留まっていたのだ。った。

何処から来て、何処へ消えるのか
た 可愛らしい天使が……………

その全てが謎に包まれ

一の陣

「あの……夏希さん？」

「え、と……ですね？ なつ「話し掛けないでっ！！」~~~~~！
………すいません」

小磯健二は人生の岐路に立っていた。密かに打った「コレを読んで居る時には僕は既に」で始まるメール電文を母に送ろうか？ 父に送ろうか？ 否、そもそも送るべきか送らざるべきか。まさに難題。

それと言うのも健二は現在、夏希と共に長野へと向かっている。のだが、その手段及び状況に些か……いや、多いに問題が有った。(雪子さんっ！ 恨みますよっ！！) な健二君。「私は旦那と行くから、二人で楽しんで来なさいな」と言う笑顔に騙された自分に呆れてしまう。

小磯健二と篠原夏希は二人で長野県上田市を目指していた。栄の一周忌法要の為に

夏希の運転する車で。

今にして思えば夏希が免許を取得したのはホンの二週間前だ。若葉マーク四個貼りは伊達じゃない！ 貼り過ぎじゃ無いか？ と疑問を呈した自分を罵倒したい。夏希の運転する車がそこ等のジェットコースターより度胸一発迫力満点なのは想像に難くなかった筈で

ある。

「最初に助手席に乗せるのは健二って決めてたんだから！」との夏希の発言に感涙した自分がひどく懐かしい。ああ、まるで走馬灯の様に懐かしい。

和雄と雪子から見れば、【免許取立て二週間「ド素人」】なのだが、健二にしてみれば、【取得「玄人」】の方程式で間違い無い。

「あの！ 次の信号を右……ちよちよちよっ！！ いいです！ 曲がらなくて良いですっ！！」無理矢理曲がろうとする夏希を必死で止める。本気で必死だ。

「どつちよ！ 健二すっかりしてよねっ！」

「えー！ って、はい。す……いません」

何とも理不尽な思いを呑み込みながら、小磯健二は固く誓うのだった。

早く僕が免許を取ろうつ！ と。

早朝も早朝。まだ陽も昇る前に出発した健二と夏希であったが、到着したのは昼も大分過ぎた頃。既に和雄や雪子も到着しており、明日に来る事になっている侘助と佐久間以外は既に揃っているらしい。

「いらっしやい。夏希、健二君」

「万理子おばさん。元気だった」

「こんにちわ。お久しぶりです」

万理子とは三月の春休み以来になる。

家が上がってみれば既に皆が思い思いの午後を過ごしていた。

女性陣はもう夕食の準備に取り掛かっていた。

理香・雪子に典子・奈々・由美達である。

「あら？ 生きて辿り着けたのかい」などと笑う雪子達に、本気で帰りは篠原家皆で車で帰って貰おうと考える健二だった。

子供達は元気一杯に走り回ってた。いつもいつも元気がいい。

真吾に真緒、祐平の三人に加奈まで加わって今では一ランク上の騒がしさだ。

「おーっ！ 婿どのだーっ！」

「っっおーっ！」「っ」

「だから健二だって。いい加減名前で呼んでよ」健二のボヤキが受け入れられる日は遠い様だ。婿だ婿だと騒がしい声が遠ざかっていく。

男性陣は居間でくつろいでいる様だ。万助に万作、頼彦・邦彦・克彦は野球中継に見入っている。了平の高校は予選で敗退、了平の最後の夏は終わったようだが、元々が野球好きなのだろう。中々に真剣に見入っている。

理一や和雄、太助はコーヒー片手に談笑と云った所だ。

「ん？ 健二君、どうだった？ 夏希の運転は」

随分と楽しい事を聞いてくる父親だ。

「ええ。是非帰りは一緒に帰りましょうね？ 和雄さん」逃がさない！ そんな意思有る瞳だったとき。

直美と聖美は家事組を免れた様だ。あの時お腹の中に居た佳子を抱きながら談笑している。

「ほら？ 夏希、抱いてみる？」

言われて渡された佳子に緊張するも「ふふふ。かゝゝわいゝゝゝ」

い」「ご満悦の様子だ。

「あんた達も近い内に……じゃないの……」

「……ななな直美さんっ!!」「」

このテのからかいにはどうにも慣れない二人だった。

佳主馬・了平、それに翔太はOMCに熱中している。

二月の一件以来、OMCには新たに合戦モードが出来た。東軍西軍に分かれての団体バトル。中々に白熱し、今では無数のチームが存在する。

「ちょよ！ 翔太兄い、そこ抜かれないでよ！」

「んだと！ 俺は抜かれてなんて「集中して。次、来るよ」ちょよちょよ!!! あ」

翔太終了のお知らせ。

「……」

「んだよ！」

「……」別「……」翔太には余りむいていない様な気がする
一同だった。

万理子は奥の座敷に居た。いつもは台所に立つ彼女も、コレだけの人数が居れば奥に引っ込んで、と言う事になるらしい。

一人、穏やかに座っている姿は、どこかアノ人の面影が重なる。

「さ、二人共。母さんにご挨拶して」

「……はい」

奥の仏間へと向う。健二と夏希がこの家に来て、先ずする事、それが

「大ばあちゃん……ただいま」

「……お久しぶりです」

その穏やかな遺影に手を合わせ、陣内栄の霊に一時の寄宅を報告

する事だった。

東京の特機本部。特に変わる事の無い日常。無論、その変わる事の無い日常が彼らにとっては慌しいソレである。

バタバタと走り回る者やアチコチから聞える様々な通信。ココはいつでも【最も戦場に近い場所】としての緊張感に包まれている。

「ふ〜。戻りました〜」

「あ！ お疲れ様です」

吉田の帰りを笑顔で迎えた桑田だったが、「で？ どうだった」割って入る本村に緊張感を取り戻す。

「事故ですね。どうやら自製でダイナマイトか爆弾でも造ろうとしたんでしょけど、その最中にドカンッ！ ってトコです。花火を大量に購入してましたよ」

横浜で起きた爆発現場。爆発元が公安のリストに名前が上がっている人物だった。テロの疑いを持って調査に赴いたが

「ま、大した怪我人が出なくて幸いだったな」

「ですね。犯人が火傷以外は人的被害は無しですから」

それは怪我人の勘定には入れる必要も無いだろう。民間人に被害が出なかったのならソレはソレで良しとするのが道理だ。

「陣内さんが長期休暇ですもんね。あんまり大事になると困っちゃいますよね」

桑田は特機のデータ管理や連絡業務が常だが、それでもココに在籍する意気は持ち合わせている。全体をして特機の動きに弊害が出る様な事態は想像したくは無いモノである。

「ん。だがまあ有事の際には出向してもらおうかな？ ココはそういう場所だ」

事件は待つてはくれないのだから。

「ああ、でも確か長野ですよ。健二君も一緒なんですよ？」

「あ、はい。陣内さんの御婆様の一周忌法要。健二君も呼んで有るつて言つてましたよ」

「まあ彼も知らない仲では無かつたそうだしな」

経緯は聞いている。聞いた限りでは有るが、それでもその件の祖母が健二に与えた影響が大きいであろう事は健二の言動から見て取れた。彼にとつても、その人は特別だつたのだらうと思いを馳せる。そんな中、吉田は違つ事を考えた。

「だつたら例のアレ、OZの一件も何か進展有るんじゃないすかね」

「ああ。でも、そんな簡単に」

「うむ。ウチの情報部でも難航してる様だしな。何か切欠でも掴めると良いんだが……」

そこまで便利に行くものなのか？ と疑問は残る。

もちろん吉田とて本気でアテにはして居ない。ただ使えるものは使おうと云うしたたかさの様なモノが有るだけだ。それとて何処まで本気かは分からない程度に。

「でもホント。何でも良いから取つ掛かりが欲しいみたいですよ？
いい加減、上もおかんむりなんですよ？」

「まあな」

ココのトップとして、本村への風当たりが強くなつて来たのも事実であり、つい一時間前にも上層部から打診が有つた程だ。

「まったく。なにがエンジェルさんだ。名付けた人間の感性が理解出来ん」

「そつすか？ 見た目ですよ、見た目。ね？ 美也子ちゃん」

「はい！ 可愛いですからっ！！」

事態を理解しているのかどうか甚だ疑問な笑顔を見せられ、本村

は今一度零すのだった

「まったく……理解出来んな。私には」

「いったただきま〜〜すっ！」

陣内家の夕食は毎度の如く大賑わいだった。

人数が人数だ。皆が思い思いに喋るのだから取り止めが無い上に纏まりも無い。

健二はこの賑やかさが好きだった。陣内家と知り合いになれて、本当に良かったと思える一時だ。

そんな至福の時間の中

「そう言えば明日でしょ？ 佐久間君来るの」

「はい」

「迎えに行った方が良いかな」

「俺行こうか？」

皆が佐久間の話に耳を傾けた。新しい客人にどこか楽しみな雰囲気だ。皆、佐久間に会いたいらしい。あの夏の戦友に。

「OZでのバイトがずれ込んでますから。でも明日には大丈夫だって言っていましたし、地図も送って有りますから平気ですよ」

「そうかい？」

「アイツ、結構万能ですから」

お〜〜。とは陣内の面々。確かに佐久間は得手不得手は無いキヤラクターだった。プログラムに抜き込んだモノは有るが、確かに

自分より社会的であり活動的だろう。見知らぬ土地に彼を独りで呼び付けたとて、健二に佐久間を心配する気は無い。ソノ必要を感じさせないのが佐久間敬と言う自分の親友だった。

「しっかし、まゝたOZの所為で迷惑掛かるなんて、ウチって呪われてんじやないの？ OZに」

由美の言葉に「幾らなんでもソコまでは」と苦笑も洩らしてしまふ。

「もしかして例のエンジェルさん？」

去年とは違い佳主馬も始めから夕食に参加しているが、口を開いたのはコレが最初。

「うん。どうにも原因が掴めなくて。僕もバイトで関わってるけど佐久間はチーフだからさ。なんか色々と面倒みたいなんだ」

「ふ〜ん」

「ねえ佳主馬」

息子と健二の会話に漸く隙を見つけ

「なあに？ そのエンジェルさんって？」 聖美は聞いた。どうやらあまりOZは詳しくは無い様だ。

「ああ。最近になってアバターに天使みたいなキャラクターがくっ付いて来る事が有るんだ。俺にも先週くっ付いたけど」

そんな佳主馬の後を健二が引き継ぎ

「でもその天使のキャラが何処から、誰の、どんな意図で付けられているかが分からないんです。しかも付いているのはホンの少しの間で、例えば寝て起きた時にはもう姿は無いんですよ」

誰が得をすると言うのか全く不明な天使。

「でも健二。私、別に害は無いって聞いたけど？」

「俺の高校じゃあ、エンジェルさんに付かれたら良い事有るって噂になってるぜ？」

そう、まったく害は無いとされているし、その可愛いキャラクターと何時の間にか消えてしまう神秘性を持って、今では半ばラッキー

アイテム的な扱いすら受けているのが現状だ。エンジェルさんもそうした由来で何時の間にか付けられた呼称に過ぎない。

「でも原因が分からないのは不安ですから、今はその原因を究明中
って訳です」

一説には何処かのゲームのプログラムが流出してしまったって説も有る。

「私には分からないけど、そんなに可愛いのかい？ そのエンジェルさんって」

万理子には無縁の様だが「あ、丁度今、僕の所に居ますから、見
ますか？」

言って取り出した健二の携帯を皆が覗けば

「あら？ 結構可愛いじゃない」

「ふん。コレがね」

エンジェルさんと呼ばれる天使が、ケンジの肩に留まっていたの
だった。

食事が終わり今は思い思いの一時、トイレへと席を立った健二が
居間へと戻る途中、ふ、と立ち止まる。

「さっきのエンジェルさんについて……ちょっと良いかな？ 健二
君」

さっき迄の理一とは目の光が違う。そんな、健二だけが知る陣内

理一がソコに居た。そして

「つまり……そう……話ですか？ 理一さん」

さっき迄の健二とは目の光が違う。そんな、理一だけが知る、小磯健二がソコに居たのだった。

二の陣

薄明かりの廊下に佇む二つの人影。内の一つが口火を切る。

「どういう事ですか？ あの一件で特機が動く……僕等は何も掴めていませんよ？」

健二には不思議だ。OZで動いている自分達がより最前線の筈だ。無論、表面上の話にはなるが。

「実はソコが我々にも不明でね」

「？」

質問に疑問が返る。どうにも話が噛み合って居ない、居心地の悪さが有る。

「実際、我々も例のエンジルの件には注目はしていた。でも実際に着手するかは時期尚早って感だったんだ。夏希じゃないが、実際にアレによって被害が報告された事例も無いしね。君達でも同じだと思うけど、何かのゲーム情報の流出とかバグとか、まあそんな感じだったんだけど」

「はい」

ソレは理解出来る。それは健二や佐久間達と同じ見解だった。実際、過去に似た様な事象が無かった訳ではないのだ。そうそう起きる事でも無いが、全く無い話でも無い。

だとするなら、やはり特機の介入は不自然だった。と言う事は状況が変わった……と言う事ですか？」

「ああ」

ソレが結論だ。

「どうやらアレは感染者から感染者へと倍々に拡大する、一種のウイルスだと言う事だ」

「え？ ソレは「健二は初耳、では無い。ソレはOZでも判明している。でも、何故ソレを理一が？ となる。まだ公表には至っていない筈だ。」

「ソコで我々に調査の依頼、いや、捜査の依頼が回って来たって訳さ」

「捜査？ でも依頼って何処から」

事態は健二の思惑を超えた所に在るらしい。大きな存在が

「OZそのものからさ」

動き始めていたのだった。

特機の下にOZから、内調経由で捜査依頼が回って来たのはつい二週間前だと言う。

「OZの調べじゃ、このウイルスは最初の一人が感染してからキツチリ二十四時間後、その間に増殖した全てのウイルスと共に消滅するようプログラムされているらしい」

「つまり、時限付きって事ですか」

決まった時間内のみ存在し増殖する。そして時と共に消え去る。

ソコに害は無く、意味もまた見出せない。

「でも、なんでアメリカでも中国でも無く特機に？」

OZとウイルスの関係は分かる。明らかにOZの意図としないウイルスが存在するなら、その対応に出る事は至極当然の事だ。だがOZ本社のあるアメリカでも、ウイルス犯罪最多発の中国でもなく、日本の特機へと続くラインが健二には見えない。

理一は少し健二に近づく。より声を潜めるため。そして 告げる為。

「ウイルスが投下されたのは計八回。その全てが東京からの投下だ

「っいたらしい」

「っ！ それで……でもソコまで分かってるなら」

「何とか成るのでは無いだろうか？」

「アクセス地域が分かっただけだよ。別に場所が特定出来てる訳じゃない。今の時代、ネットなんて何処からでも出来るし何処にだって繋がってる。しかもその八回共がバラバラのランダムで次の予測も出来ない状況だ。正直お手上げだな」

「ウチの情報部は毎晩残業だ、と苦笑を洩らす。」

「……エンジェルさんに関しては僕等の方でも分かっている事は少ないです。アレが広がりを見せるウイルスだろう、って事は実は判明してました。でも時間や、ましては東京発信だとは思っても居ませんでした。まあ僕や佐久間は末端の末端ですから、仕方の無い事ですけどね」

「その事を気にする積りは無い。それぞれに割り当てられた役割と言うモノがある。様は役割の範疇を越えた所での話しに過ぎないだけの事だ。」

「自分よりも理一達の情報の方が先を行っている。今はそれだけで理一への回答は充分だろう。」

「僕にはソチラ以上の情報は有りませんね。すいませんけど」

「うん。それは良いんだけど」

「？」

「理一には先が有る様だ。」

「なあ健二君」

「はい？」

「健二君は『はまなす』の事件の時、船の現在地を予想して見せたろう」

「はあ」

「確かに。一度は失敗したが、二度目は『はまなす』を見付ける事が出来た。」

「あの時みたいに、次に犯人がウイルスをOZへ流す場所を予想出

来ないかな？」

「へ？」

要するに九回目の犯行を予め予期出来無いか？ と云う事だ。そんな予知能力の様な事は実際には無い。無いとは思うが、自分達には理解出来ない方法で船を探し当てた健二には、やはり一度はぶつけてみたい質問だった。

「ちょ、ソレは無理ですよ！ いくらなんでも」

「む？ そうか？」

でも健二なら、と顔に出てる。

「『はなます』の時はデータが沢山ありました。天候、海域、各船の搜索状況、その中での進路予想です。しかも探すのは船に限定されてましたし。でも今回はそうじゃない。データを出すにしたらって変数が多過ぎます、そんなに便利には出来て無いですよ」

誰かが どこかに 何かを落す。

コレではどうにも手の打ち様が無いだろう。

流石に理一も話半分の積りだ、健二に話を突き返されたとして問題には思わない。

「そうか。いや、気にしないでくれ。無理なら無理でハッキリ言って貰った方が僕も気が楽だしね」

「なんか、すいません」つい、謝ってしまう。本気で、と言う侘びでは無いが……

「構わないよ。とにかく今は何でも良いから取っ掛かりが欲しいだけだから。僕こそすまなかつたね、なんか無理を言ってしまった」「いえ」

理一にも悪気が無い事は分かる。で有るならば気にする必要は無い。健二はそう思考する者であり、そんな健二を理一達は気に入っていた。事有る毎についつい健二の名前を挙げてしまう特機の仲間にも呆れるも、自分も皆の事は言えないな？ と自嘲してしまふ。

「それじゃ、引き留めて悪かったね。皆で花札、やるんだろ？」
難しい話はお終いとばかりに空気が和らぐ。

「はい。あ、理一さんもどうですか？」

健二にも思う所が有るらしいが

「遠慮しとくよ。夏希に小遣いをやる程、給料も高くないんでね
思惑を見透かされた様だ。

「は〜〜……やっぱり」

「ま、頑張れよ、健二君」

「はあ……まあ……」

健二の足取りは一層に重たくなっていったのだった。

* l o g i n *

「ふ〜。なんとか引継ぎ終了、て感じかな」

「お疲れ、チーフ」

サクマは明日からの休暇に備え、事後の引継ぎを今終わらせた所
だった。

既に夜も十時を回ったと言うのに漸くである。これから長野の準
備を始めるかと思うと気が重い。

「明日からでしょ？ 精々楽しんできて下さいね」

皆も一段落と言った所だろう。のどかな空気だ。

「ば〜か。故人の法要で楽しむってのも無いだろ？」

「ま、そーですけど」

「でもあの陣内家ですよ？ やっぱり羨ましいですよ」

去年の一件以来、陣内家はOZの世界ではチョツとした有名人一
家だ。

家族皆でラブマシーンと戦い、あの吉祥ナツキやキング・カズマ

もその家族に名を連ねていると言う。それで有名に成らない筈が無い。

そんな和気藹々とした空気の中 「ん？」とサクマが何かに気付いた。

「チーフ？」

声を掛けるもサクマは一心不乱に画面のキーボードを叩いている。何が？ と思う皆の前で

「……………っし！ 捕まえたっ！ あ、消え」言ってる間に、サクマに留まっていたエンジェルさんの姿が消えた。

「どうしたんですか？ チーフ」
「なにか？」

言って集まってくるアバター達が見たモノは何かのプログラムだった。

「何ですか？ コレ」
「さあ？」問われたサクマにも分からない。ただ

「俺のアバターのソースに動きが有ったんだよ。多分、エンジェルさんからの介入だな。良く分かんないけど何かの権限を無理矢理持つてかれたよ」

全く気が付かなかった。自分達も過去にエンジェルさんには付かれた筈なのに。

「よく気が付きましたね」
「偶々だな。つてかホントに偶然か……………こりゃ誰も気付かないな」

自分でも驚く程の偶然で見付けた。干渉して来たプログラムを捕獲出来たのは殆んど奇跡に近いと言って良い。

エンジェルさんは消えたが捕獲したモノは残った。だが
「でも、何ですかね？ コレ」

「バラそうにも感染したり消えちゃうと厄介ですしね」
「どうします？ 上に報告、上げときますか？」

少し思案する。上に報告でも対応は間違っ居ない。一見して、

自分にどうこう出来る代物では無いと判断出来る。だが、今はまさにうって付けの状況でも有った。

「いや、ちよっと時間くれ」

「へ？ 良いですけど」

「何かアテでも有るんですか？ チーフ」

そう、いつもとは違う、今のサクマにはアテが有る。

「ああ。明日、天才プログラマーに会う事になってるからさ」

「へ」

「ってかチーフが言うのってどん位ですか？」

サクマの腕は知っている。そのサクマをして天才と言わしめるとは

「実際に会うのは初めてだけだな……その人に比べたら、俺なんてエクセル覚えてたての初心者みたいなモンさ」

「ちよ！」

「嘘でしょー！」

サクマは確信する。あのラブマシーンを造った。陣内侘助であるならば、このプログラムの秘密も解けるだろうと確信していた。

* l o g o u t *

夜も更け、陣内家にも静寂が訪れた。何時来ても田舎の夜は静寂に包まれる。そこかしこからノイズが聞えて来る都会の夜とは一味も二味も違う夜。暗く、黒い、夜の闇。

空は高く星は多い。月の明るさだけが見える庭を照らす、どこか幻想的な光景。

独り客間の布団に横たわり、暫しその光景に心を奪われる。

こんな夜に、あのメールが来た。そして始まったアノ夏の戦争、あの忘れる事の出来ない 筈の出来事を、もう自分は細部に亘って思い出す事が難しくなってしまった。

誰しもが一つの時間で留まっては居られないモノだと云う事なのだろう。皆、前へ進み、先へ進み……確かに在った想いを置いて次に進む。そうして歩んだ自分の

「……………一年、か」

きつと今感じている寂しさも、いつかは風化していくのだろうと寂しく思う。

「?……………」

気配を感じそちらを見ると

「……………夏、き……………さん?」

縁側の廊下に立つ、夏希の姿がソコには在った。

「どうしたんですか?」

特に驚く必要は無い。ココは夏希の実家と言っても良い場所で、自分はソコへ来ているのだから夏希が居る事への疑問は無い。何か用か? と少しだけ身を起こすが

「え、っと。ほら……………明日には佐久間君も来るし、さ……………だから……………」

「え?」

どこか躊躇いがちに、だけどソコに意思を乗せて立つ。そんな夏希の思いは健二には把握出来る。なにも一族全員居る中で、とも思っが

「……………はい」

スッと自分の身を少しだけ端に寄せる。

「！ うんっ！」

パタパタと嬉しそうに夏希は健二の布団へ横たわり、しっかりと健二に抱き付いたのだった。

高校三年生に成った健二と大学一年生に成った夏希。恋人として付き合った二人がその一線を越えたのは何時の話だったのか。意図した訳でも決意した訳でも無く、極自然とそうになった。ただそれだけの話だ。

夏希の恋愛思考もだいたい一般的なソレに近いモノには成って来ているし、健二も草食系とは言え健康な男子である。別に楽しくて仕方が無いとばかりに頻繁に、と言う訳でも無いが、ソコソコに普通の恋人同士をなぞる程度には時間を過ごして来た。

だが、腑に落ちない。

今のこの状況で。家族や親戚が居る、襖でしか仕切りの無い（しかも廊下はすだれ）状況で、夏希がソレを望むとは思えない。ソコまでオープンな性格に成った筈は無いだろう。そんな夏希をして今の状況を望むのであれば、ソレはそういったモノとは別の理由があるのだろうと考える。

「……なにか、あったんですか？ 夏希さ」……違う……」……」

二人きりでのそういう時間、夏希は「さん」付けも敬語も嫌う。少し、反省。だから仕切り直し。違うと回す腕に力を込められた状態もそのままに、今一度、そっと自分の胸に埋まった頭に手を置きながら

「どっかしたの？ ……夏希」

「……少し、こうしてて良い？」

腕の力が、少し緩まる。

「……………良いよ」
「……………うん」

どれ位経った頃だろう。ポツリ、と夏希の言葉が 落ちる。

「……………私、ね」

「うん？」

「私ね……………私……………ちゃんと、大おばあちゃんに……………逢わせられ無かったよ」

「……………夏希……………」

震える声と身体に夏希の今が自分に伝わる。夏希の想いは、未だアノ夏に在ると云う事だと感じる。

「こんなに健二の事が好きなのに……………私の彼氏だよって。恋人だよって……………私……………大ばあちゃんに……………言っただけ」

少しづつ、声も震えも大きくなる。なっけていく。

ソレは後悔。

ただ安心させたかった。

その想いに嘘は無かった。

でもその為に嘘を付いてしまった。

どうぞひ孫をよろしく、と頭を下げた栄を忘れられない。

健二さんはウチの立派な婿さんだ、と微笑んだ栄を忘れられない。

自分の嘘を、わたしの所為だねえ、と寂しげに言った栄を忘れられない。

アレは嘘では無かったと言いたかった。嘘では無くなった。始まりはそうでも、それは形を変え繋がりを変えて、今では本当に大事な人がココに居ると伝えたかった。こうして

「私が愛して……………私を愛してくれる……………人だよって……………大ばあちゃ

んに……逢わせてないよお」

「……夏希……」

身を裂く後悔。ソレだけが夏希を占める。彼女の時間は、あの夜に留まったまま……ならば

手をひこう

「……ねえ、夏希？」

「今はまだ、返事は必要無い……」

「あの栄おばあちゃんが生きた最後の夜に、僕がおばあちゃんと花札したって言ったよね」

「（こくん）」「肯きが胸に伝わる。」

「あの時ね？ 栄おばあちゃん、なんか賭けようって言ったんだ。賭けないとつまないからって……今思うとズルイよね？ 僕なんてルールをやつと覚えたばかりだったのに達人のおばあちゃんに敵うわけ無いのにさ」「どこか子供らしさが見えた花札風景がひどく懐かしい。」

「……私も……よくやつ、たよ。お饅頭とか、みかんと、か」少し、声が出る。

「そっか……で、やっぱり僕は負けちゃった」自分の勝ちだと、彼女は笑った……嬉しそうに、笑ってくれた。

「……それが、どうかしたのだろうか。」

「栄おばあちゃんは言ったよ……もし私が勝ったら……」

「あの子を、よろしく頼むよ……って」
「っ……！」

確かに在った、陣内栄と小磯健二の最初で最後の 勝負の対価

夏希に鼓動が穏やかになっていくのを感じる。

「夏希はもう逢わせてくれたよ、逢わせてあげたよ」それが真実だと今は教えたい。

「……私」

「僕の愛した人が大切に想う、陣内栄と云う人に僕を」

「……私……」

「栄おばあちゃんが愛した夏希と、一緒に時を過ごして行く小磯健二と言う名の僕を栄おばあちゃんに」

「私」

ハッキリと、互いの顔が見える。

「夏希はキチンと、逢わせてくれたんだよ？」

「私……健二に逢えて……本当によかった」

二つの影が重なると共に、過去に置いて来た想いもまた、現在と重なり溶けていく。

ただ綺麗な月だけが、ソレを見届ける証人となったのだった……

「良い子ね？ 母さん」

一つ、部屋を挟んだ部屋で、万理子は静に微笑んだ。母が最後に選んだ者は、やはりアノ人を選ばれたと云う事なのだろう。どこか、納得出来た万理子だった。

「ふう……さて。アナタ達。もう反省しましたか？」

~~~~~つ!!!

万理子がもう一つ隣の部屋へと移動すると、その眼前では名前を挙げるのも虚しい、大人組が雁首揃えて正座させられていた。既に足が限界に来て居る者も居る様だ。

「いい歳して若い者の邪魔をしようとするもんじゃありません」

「いや、しか「私は父親としてで「あら？　じゃあ私は母親と「あ、俺叔父だか「わしゃ大叔父なんだか　」

どつやら皆で覗きに行こうとしていた所を遭えなく御用となった様だ。

「全員、あと三十分追加です」

~~~~~つ!!!

無言の悲鳴が木霊する、陣内家の最初の夜だった。

翌朝、長野県上田市に到着したのは

「さて、こっからが遠そうなんだよな、実際」

佐久間敬が上田駅に到着したのだった。

ここからバスで行くと云うのが常道だが、いつそ面倒だからタクシーで一気に、とも考える。そんな思考で埋まる佐久間の肩に手が掛かり、振り向けば

「申し訳有りません。少し、道を尋ねタイのデスが？」

見知らぬ外人がソコに居た。

「いや、俺も」ココに来たばかりの旅行者だ。と言う前に彼は言っ

た

「この町にジンノウチと言う方の家があるのらしいですが、ご存知
ありませんか？」

そして佐久間敬は出会った。コレが、彼

ウィリー・マクレガーとのファーストコンタクトだった……

三の陣（前書き）

本文内に英文が出てきます。

「英文

（和訳

と記載致しましたので、読み難いとは思いますがヨロシクお願いします。

あと、英文が間違っている事はあるかと思いますが、雰囲気上、使用したかったモノで、和訳の文を本文と思って読んでくれると助かります。

三の陣

「いつくぞー！ーっ！……それっ！！」

バシューー！ と空高く飛び上がるペットボトルロケットに
おおおおおおおお！！ と子供達は大はしゃぎだった。

ワイワイと騒がしい祐平や真吾達に目を付けられた健二が、それ
ならば！ と手製ロケットを飛ばしてあげたと言う訳だ。実験が主
の物理部ならではの遊びだろう。他にも幾つかの簡易的な楽しい実
験を与えてやり、今では子供達だけでなく頼彦達父親も一緒になっ
て遊んでいる始末だった。まあ、楽しいに越した事は無い。

「ふう」一息付こうと縁側に腰掛けると

「はい」

「あ、ありがと」夏希が麦茶を渡してくれた。暖かな陽射しの中で
ワイワイと遊ぶ子供と大人。

とてもどこかで平和な光景。夏希には、ソレは何にも代えがたい
大切なモノの様に感じる。

「……良いよね、こっこの」

「……はい」

「……ふふ」思わず、寄りかかる。

明確に伝えない想いに、違えず言葉が返ってくる。こんな時、健
二が自分と繋がっていると感じてしまう。

寄り添い眺める。そんなゆっくりとした時間を終わらせたのは奈
々の声。

「あつ、健二君」

「はい？」

振り返るとお玉を持った手もそのままに、奈々は楽しそうに笑いながら

「来たみたいよ？ 佐久間君」

「えっ！ あ、はい！」慌てて立ち上がり玄関へと向う健二の後に続きながら「……もう、せっかく」とブチブチ洩らしていた夏希だったとき。

玄関に辿り着けば既に万理子が出迎えており、ソコへ健二と夏希が辿り着けば

「よっ！ 健二」

「佐久間」

「いらっしやい。佐久間君」

佐久間敬が笑顔で立っていた。が、一つだけ疑問が残る。

「あの、佐久間……その人は？」

「佐久間君の知り合い？」

彼の背後に控えた外国人は、その被った帽子を手に取り……

「初めまして。ワタシはウィリー・マクレガーと申します。どうぞよろしく」

「……はあ、こちらこそ」「」

万理子、健二、夏希の気の抜けた返事を笑みで受け止め、ウィリーは陣内家の門をくぐったのだった。

「

」

仏壇に手を合わせ瞑目するウィリーを、一同は隣の間でこそそと眺めていた。

「なんでも前にお婆ちゃんに世話に成ったって」

「外人さんが？ 婆ちゃん外国なんて行っただけ？」

「あれじゃない？ 戦争中とか」

「幾つだよあの人」

「お父さんとかお母さんかも知れ無いでしょ」

「万理子さんも知らないんですよね？」

「もしかしたらまた隠し子じゃねえのか」

「まゝさかゝ」

どうにも騒がしい。

こほんっ。と万理子の咳払いで一斉に散る。また正座させられては敵わない。

「ウィリーさん。お茶でも如何ですか？」

頃合いを見計らい声を掛ける。折角の来訪にただ帰す事は忍びない。

「Oh! これはご丁寧に。それではお言葉に甘えマス」

「ええ。さ、どうぞこちらへ」

「Yes、Thank s」ありがい後に続く

「いいえ、構いませんよ。さ」

居間へと通されたウィリーが見たものは、今か今かと待ちわびていた陣内家の者達の熱い視線だった。

ウィリーと陣内家の人間は直に打ち解ける事が出来た。これは陣内家の人当たりでも有ったが、ウィリーの接し方に拠る部分も大きいだろう。彼は紳士であり、敬意を持って人と接する。皆の目に、彼はそう映った。

「それにしてもウイリーさんは日本語がお上手ね？」

「そよね。なんか違和感無い感じ」

万理子と理香の言も最もだ。彼は如才なく日本語を使いこなす。

「Ohh。ワタシは仕事で日本に来る事も多いデスからね。商談相手の言葉で取引を進めるのは礼儀デスよ」

「実際、話し掛けられた時は驚きましたけどね」

ははは。と笑い声が起こる。

駅でウイリーに話し掛けられ、行き先が自分と同じ陣内家だと聞いた時は驚いたが、ソレを伝えるとそのままタクシーに連れ込まれたのはもつと驚いた。どうやら詳しい住所が分からずに来たらしい。佐久間の持つ地図はまさに宝の地図だった様だ。

「ま、俺もタクシーに便乗させて貰いましたから助かりましたけど」
全額ウイリー持ちだったのはホントに幸いだった。

皆が佐久間やウイリーと歓談し、そろそろ子供達も珍客に飽きが見えて遊びに行ってしまう。今更、客が一人増えようがその対応に変化など生じる事が無いのが陣内家である。いつもの慌しさを取り戻そうかとした時

「それにしても……やはりジンノウチ家の皆様は善い方ばかりデスね。想像していた通りデス。ズット興味が有りましたので……逢いに来て正解でしたヨ」

居住まいを正した風のウイリーに少しだけ緊張感が戻る。

「へ。俺達の事は母ちゃんから聞いてたのかい？」

「No」

自分達とウイリーの共通点など栄しか無い筈なのに、ウイリーは万助の言葉を否定する。では？ そんな一同の耳に、懐かしい言葉が飛び込んで来た。

「ラブ・マシンの一件デスよ」

ソレがウィリー・マクレガーが陣内家に興味を抱いた瞬間だった。
「あの事件。あの中デ、貴方達は……貴方達のあのKOI・KOI
は、とてもvery 刺激的Excitingだった」

どこか笑みを浮かべて語るウィリーに、少しばかりの気恥ずかしさを覚える。あの時はただ必死で、他人の目を気にする事は無かった。ただ、見ていた人々の助けが、声が、鳥肌が立つ程に自分達を高揚させたのを覚えていた。

「ナツキの姿は、とてもvery 綺麗beautifulでした」

「そんな、私は別に……ね？ 健二」

「へ？ いや、まあ」

アバターが褒められたのに、何故か自分の顔が赤くなる。そんな夏希が、少し可笑しかった。

「キング・カズマについては言うに及ばずですネ。そしてMr・サクマ」

会話が振られた。陣内家では無い佐久間へ

「貴方の仕事はいつも完璧Perfectデス」

何かが引つ掛かる。そんな漠然とした思いを巡らせていると

「そして……」ウィリーの視線が健二を捕らえた。どこか……

「Mr・コイン」

その視線が熱を下げた。

「You are very attractive

(君はとても魅力的だ」

「え？」

言っている事は分かる。だが意味が分からない。

「In August and September of th

e last year, it is February of
this year... Is there it elsewhere?

「(去年の八月と九月、今年の二月...他にも有るね?)
「な、んで?」

彼は知っていた。

ラブマシーンだけじゃない。健二が特機に協力して、彼らと共に戦った日々を、ウィリー・マクレガーは正しく認識していた。他にも、と言う事は佐久間や佳主馬も知らない特機の仕事も把握している事になる。

「あの、ウィリーさん?」

「あ、健二?」

「??? ねえ、なんて言ったの? アタシ英語弱くて」
「つてか俺だつて」

特に難解な言葉では無い。が、授業と会話ではやはり違いが有るのだろう。夏希にしても唐突に始められたのでは頭が出遅れてしまった。中で、解した三人は視線を強める。

健二に佐久間、そして理一。

特に健二と理一にとって、これは由々しき事態だ。公にはされて居ない筈の健二の関与を、この男は何処で、そして何処まで掴んでいるのか? 情報の流出は捜査機関にとって致命的な欠点と成るのだから。

「どうして貴方がそ「なんでお前がココに居るっ!! ウィリー・マクレガー!」
「っ! 侘助さん?」

健二の言葉を遮り怒気を放ったのは、突然背後に立った侘助だった。

その視線は鋭く今にも襲い掛かりそうな程だ。返すウィリーは涼

しい視線を取り戻した。彼にとっては侘助の言動は予想の範疇と言
う事だろう。

「侘助！ なんですかイキナリ！」

「何ちよつと！ アンタってばウィリーさんの事知ってるの？」

「おじさんっ！ 何時コツチに」

「侘助さん」

少しの混乱。だが侘助もウィリーもまるで意に介さずに睨み合っ
ている。次第に周囲のざわめきも収まってしまふ。自分達には入れ
ない、何かの空気を感じる。

沈黙を破ったのはウィリーの方だった。

「……ふう。久しぶりだと言うのに、もう少し感動的な再
会と云うモノは無いのかい？ ワビスケ」

「答える！ 何故ココに居る！」 一歩、踏み出す。強い意志を感じ
させた。

流石に雰囲気剣呑なモノに感じたのだろう。

「ウィリーさんは以前母さんにお世話になったんですって。態々お
参りにお越し頂いたのに、侘助。アンタ、ウィリーさんとはどう言
う知り合いか知らないけど、その態度はあんまりでは無いか。そ
う繋げ様とする万理子を遮り

「世話に？ シシシ……確かにババアには世話になったよなあ？」

「侘助？」

「何しろお前等の計画、一度はババアに邪魔されたしな？」

計画？ 栄が一体何をしたのだろう？ 皆、話から置いていかれ
ていく。

「で？ 恨み言の一つでも言いに来たのか？ ウィリー」

その視線に敵意を満たすも、それでもウィリーは動じず、否、寧
ろ表情を緩めていく。

「ふう……考え違いをしないで欲しいデスね、ワビスケ」

「あん？」

侘助の怒気がいなされる。

「アレはワタシのプランじゃない。彼らのプランだ。ワタシはサカエ・ジンノウチの英霊に祈りを捧げに来ただけだよ」

「貴様が祈る？ へっ！ 冗談はコレ位にしてとっとと出て行けっ！ ココは貴様の様な奴の来る場所じゃねえんだよっ！」

あと一步で掴みかかる。そんな位置まで詰め寄る。が、動ずる事無くウイリーは一口茶をすすり

「ソレが嘗てのPartnerパートナーに対する言葉かい？ ワビスケ」
「てめえ」

確かにそう言った。

「侘助さん。嘗てのパートナーって……それって一体何の？ が健二の疑問、いや皆の疑問。」

そして返る。

「……コイツなんだよ」

「？ 侘助さん？」「おじさん？」

「コイツが……俺のラブマシーンを米軍に売ったのは、このウイリー・マクレガーなのさ」

「え？」

一同がざわつく。

あの夜、確かに侘助はラブマシーンは自分が作ったと言い、開発したハッキングAIを政府が買いに来たと言った。

ではこの男がその政府の人間なのだろうか？

不審なモノへと変わったその視線に、それでもウイリーは全く動じない。彼は、強い信念の下、迷いの無い行動を取る。いつでも、いつまでも。

「よしてくれよワビスケ。ワタシは想い逢う者同士を巡り会わせたダケだヨ？」

「あ？」

「君は開発した新しい技術Technologyを売れたかった。国防ベン総省は新しい技術Technologyを欲していた。ソレをワタシが取り持ったに過ぎナイ。そうダロ？」

「ウイリー、てめえ」

「言わば我々は共犯者ダ、違うカイ？ それとも君は、自分はは作っただけで、使った者が悪いンダ、とでも言うのかナ？」

「っ！」

そう言った。確かに去年、自分は克彦達にそう言ったのを覚えている。はつきりと。それが今、返って来た。

「だとするならワタシも同じだろ？ ワビスケ。ワタシは紹介しただけだ。作ってもいなければ使ってもいない。最も、そんな子供ジミた事を言う積りはナイけどネ」

彼はいつでも認める。確たる意思を持って、共犯者たる自覚を持つている。ただソコに需要と供給が有る。その事だけが真理であり現実だ。

「お前達はいつもそうだよな？」

「なにが？Anything？」

侘助の目に嫌悪が宿る。

「買い手と金さえあればお構いなし。誰にだろつと何処にだろつと、ナンでもカンでも売っちまう。この」

ウイリーの胸倉を掴み立ち上がらせる。その眼光を突き合わせ

「死の商人がつ」

耳にした事は有る。そんなフレーズに皆が固まる。

世界に騒乱と死を降り注ぐ。 武器商人 そんな者達を総じて死の商人と呼ぶ。

知ってはいはいる。だが平和な国に生きる自分達には無縁で有る筈の人物が今ソコに居る事に、一同は思わず身を竦める。

「全く、何度も言わせないでくれワビスケ。ワタシのリストには『Death（死）』なんて商品は無いんだヨ」

「そうかい。それで？ 今度はウチの畑を中央情報局にでも売り捌くのか？」

二人は暫し睨み合ったが

「Ok。今日はコレで失礼するよ。サカエ・ジンノウチに祈りも捧げタ。ワタシの目的も、まあ「ちらり。と確かに、健二を視線が合った。」

「果たしたしネ」

侘助の腕を解き、静に居間を後にする。「皆さん、お騒がせ致しました。お会い出来テ光栄でしたヨ。それデハ」言つて去ろうとしたウイリーは、ふ、と足を止め「Oh、ワビスケ」振り返る。

「？」

「君も一度は祈りを捧げにイクと良い」

「あん？」

言っている意味が分からない。そんな感じの侘助にウイリーは綺麗な笑顔を見せて

「It is a grave of Kenny」

（ケニーの墓だよ）」

「！！ それはどついう」

ケニー・ホーネットは責任者だった。ラブマシンの……国防総省の……

「我々は感謝スル必要が有るからネ。誰かが責任を取らなければ成

らないだろ？
制服組は面子が大事だからネ」

グリーンドレス

「まさか」

「I and you and he……Who dies？」

（私と君と彼……誰が死ぬ？」

「……Did you murder a guy？」

（奴を殺したのか？」

「It is suicide」

（自殺だよ」

「It is the joke that it cannot
laugh at」

（笑えない冗談だな」

「I am true」

（本当さ」

ウィリーには何の気負いも無い。それはただの

「It was worn handcuffs, and it
was fired through the back of
the head」

（手錠を掛けられて後頭部を撃ち抜かれた ……」

よくある出来事に過ぎないのだから。

「It is normal suicide」

（普通の自殺だよ」

そうしてウィリー・マクレガーは陣内家を後にした。最後に一言、
別れの言葉を

「I will see again《また会おう》」

健二に残して。

四の陣

陣内家はひととき、静かな時を過ごしていた。

子供達は親達と共に街へ上田わっしょいの見物へと赴いて行った。まさに台風一過。慌しさの後のウイリーの一件もあり、なんとも落ち着かない時間を過ごしたが、ここで一息付けると言うモノだ。

健二と夏希も街へと出掛け、理一と翔太は仕事で抜けた。

家には万理子・理香・侘助・太助、それに佐久間の五人が残っていた。彼には、残る理由が在ったから

「侘助さん」

「ん？ なに？」

ひとりぼんやり座る侘助に声を掛ける。侘助と面識を持ってからまだそんなに時間が経ってはいない。少しばかり図々しいか？ とも思うが、今はそういう場合じゃ無いと自分を押し。

「ちよつと侘助さんに見て貰いたいモノが有るんです」

言って取り出したのは、一枚のディスクだった。

侘助の部屋へと移りPCで開いてみると

「これは？」そこにはプログラムが有った。

理解出来ない者が見れば意味不明の英数の羅列でしかない。

「これ、例のエンジェルさんなんです」

「これが？」

もう一度見るが、どうにも分からない。

エンジェルさんであれば侘助も知っている。だがアレを作る程度で有ればこのプログラムは必要無い様にも思える。侘助の疑問は佐

久間も十分に予想していたのだろう。

「あ、でもその一部なんですよ」

「……と、言うこと？」

「俺に付いていた奴のなんですけど……何かの権限を無理矢理奪って行ったんですよ。で、ソレを捕まえたのがそいつなんですけど」

「へえ」

侘助も予想はしていたが、やはり佐久間は優秀だと改めて感心する。

「どうにも俺じゃあコイツの正体が掴めなくて。侘助さんなら何とかなるんじゃないかと思って」

「ふ〜ん。ま、やってみるか」面白そうだ。それだけで、ヤル価値は有るだろう。

侘助はプログラムの解析に取り掛かっていた。それは佐久間をして「すげえ」と言わしめる程のモノ。そんな侘助の横顔を見て、やはり先程のやり取りが気に掛かる。

何処まで聞いて良いのだろうか？ そんな思いも有るが……

「あの……侘助さん」

「ん？」キーボードの操作もそのままに問い返すが、次の瞬間……

「さっきのケニーって人の話。あの……」
止まる。

ソレはアチラ側の話で、コチラ側では無い話。

「……多分、本当だな」

「そんな！馬鹿な！馬鹿な話はない。手錠を掛けられて後頭部を撃ち抜かれて自殺した。ソレが本当で有る筈が無いのだから。でも佐久間君。そういう世界も有るって事だ。俺は少し立ち入り過ぎたのさ。今、俺が生きてるのは運が良かっただけだ」

「侘助さん……」

「……………」

そう。偶々上手く行っただけ。

生き残る為の思索と殺されない為の手段は講じた。だがソレが上手く効果を発揮するかは賭けでしかなく。自分の身が危ない事は侘助自身も理解していた。その自分が生きているのだ。ケニー・ホーネットの死は、ある意味では予想の範疇だったのは否定出来ない。ウィリーの言う通りだろうとは思う。

侘助・ウィリー・ケニー。誰かはケジメを取らなければ成らないでなければもつと上でケジメを取る者が必要になる。

その結果がケニー・ホーネットの自殺であり、自分とウィリーの今なのだ。

共犯者。

ウィリーの言葉が胸に刺さる。

「お前はいつも正しいよ……………ウィリー」

「侘助さん？」

「いや……………なんでもない」

再び、侘助の指はキーに向うのであった。

上田市は賑やかだった。上田わっしょいは市としても大きな祭りの一つだ。皆、どこか浮き足立ってしまう。

「こっちこっちっ！」

「っわーっわーっ！ 父ちゃんコッチい！」

「早くはやくーっ！」

子供達は大はしゃぎだ。付き合わされる大人も、まあ楽しそうだ。なんだかんだで陣内家。お祭り騒ぎは大好きだ。

買い出しも主とした目的の一つである。どうやら二手に分かれての行動には成ったが、夏希は子供達に手を引かれて祭り方面へ。健二もまた共に祭りへと赴いたが、如何せん人混みと彼らの元気に圧倒されてしまった。朝からあれだけ遊んでいたのに何処までも元気である。父親達は流石に鍛え方が違う。全くもって体力に問題無し。何処までも続く行進に

「あ、すみません。僕ソコのカフェで少し休んでますから、皆さんで行って来て下さい」

流石にギブアップだ。手近なオープンカフェの椅子に腰掛けてしまった。

「え〜。じゃあ私も」

「いや、夏希さんは皆と一緒に。ほら？ 真緒ちゃんも待ってますし」

「う〜ん」

「ね？ 僕は大丈夫ですから。何か有ったら携帯で」

「……わかった。元気になったら追いついて来てよね」
「はい」

夏希としても健二と祭りを楽しみたいのだが、健二の疲れ具合はパツと目で分かるし、子供達のキラキラした目も裏切れない。最終的には滅多に会えない子供達を優先とする選択をしたとて責められまい。実際、ソレを健二も望んでいる以上、夏希一人で異を唱える必要も無いと言うモノだ。

皆がワイワイと自分に手を振りながら歩いていく様を、健二も手を振り返しながら笑顔で見送った。

視界から皆が消えた頃には頼んだアイスコーヒーが。正直、体的には厳しいは熱いはで健二は限界に近かった。冷たいコーヒーが身体の熱を冷やしていくかの様だ。

「ふう……ああ、アチ」

これから如何しようか？ と考える。このままもう二・三杯コーヒーを飲んで居れば夏希達も戻って来るだろう。だが夏希と過ごす祭りと言うのも捨て難い。ココはシャーベットでも頼んで一気に涼を増してから合流すべきか？

そんな他愛も無い二択に、ソコソコ真剣に悩んでいると

「失礼。ココ、宜しいデスカ？」と声が掛かる。別に全ての席が埋まっている訳でも無いのに。

「え？ 構いませんけど他の席も！」ソコには

「貴方と少しお話がしたいもので……ココ、宜しいデスカ？ Mr・コイソ？」

ウィリー・マクレガーが佇んでいた。

「アイス・コーヒーで御座います」

「Ya、Thankありがとうs」

笑顔でウェイトレスを見送り、コーヒーを口にし「うん。中々良いコーヒーだね……そう思わないかい？ Mr・コイソ」と普通に話しかけるが

「って、僕まだソコ良いですって言ってませんけど」無断で向かいに座られた健二には一言有りそうだ。

「Oh」。そう冷たくしないデくないカイ？ こつ見えても結構キンチョウしてるんだよ？ ワタシも」

「……はあ」

健二には彼の意図が図れない。何をもってココに現れたのか。

「そう警戒しないでくれたまエ。私は君に聞いて貰いたい事が有るだけナンダ」

「聞いて……貰いたい事？」

ふ、とウィリーが名刺を差し出す。

「まだ正式に名乗っては居なかつたデスね」と。

「あ……レッドフォード・カンパニー……何処かで聞いた様な……」
そんな記憶。でも思い出せないで居ると

「アメリカに本拠を置く兵器メーカーだヨ、Mr・コイツ」

「え？」

兵器メーカー。さっきの侘助との会話が蘇る。

死の商人、そして自殺。そんな世界の暗部に、健二の視線に嫌悪の色が混ざってゆくのをウィリーは見逃さない。

くすり。と笑みが漏れた。

「なるほど。どうやらMr・コイツは我々にアレルギーアレルギーがお有りの様だネ」

「……好きで無い事は、認めます」

「H a h a h a h a h a。Yes、正直でイイね、君は」

ウィリーは特に気にした素振りも無い。寧ろ言い切る健二に好意的な感想を持つ程だ。

「ではワタシもハッキリ言おう、Mr・コイツ」

「？」

ウィリーの真剣な視線に引きずられ、そして聞く。

「私と一緒にアメリカへ来ないかい？」

「え？ それってどう言う」

「つまり、ワタシは君をスカウトしに来たんダヨ、Mr・コイツ。
我が社の研究員として、ね？」

「はい？」

思わず呆けてしまう。思考が突然の申し出に追いついた頃には、

健二はその視線を強く放つ。

「お断りします」

「ん？ Why？」^{なぜ}

ウィリーはどこか楽しそうだ。

「僕は兵器を造る仕事に関わる積りはありませんから」

それは健二の変わる事無い、考える必要の無い思い。自分の目指す道と、ソレは全くの正反対としか思えない。

「Oh。これは誤解させてしまったね。ワタシが君を誘っているのはレッドフォードでは無いんだヨ」

「え？」自分が何か誤解したのだろうか？

一口、コーヒーを口にした後、ウィリーは穏やかに話し出した。

「グラバース・コンツェルン。知ってイマスか？」

「え？ と、もちろんです。知らない訳無いですよ」

確かに知らない訳が無い。世界最大とも言われている大財閥。世界中にその根を伸ばす超巨大多国籍企業だ。

「ソレは何よりデス。Mr・コイツ、ワタシが君を誘っているのは、そのグラバース傘下の研究所なんですヨ。ファーベライト研究所と言いまして、まあグラバースの頭脳とも呼べる場所デス」

「え、でも……どうして」ウィリーがその話を持つてくるのだろうか？ 健二にはその接点が見えず、だがその接点とは実に明解だった。それは

「レッドフォードもグラバース傘下の一企業に過ぎナイからですヨ。ま、部署が違うと言っタところデスか……レッドフォードもファーベライトも、共に同じグラバース・コンツェルンと云う巨大コングレロマリットの傘の下と言う事デス」

「それじゃあ……」

何処まで行っても、ソコに繋がるのであれば

「無論、今スグに研究所へ入れと言っテイルのでは無いヨ」

健二の思惑を故意か他意無くか、ウィリーは一人、話を進めていく。

「MITでもハーバードでも何処でもいい。君の行きたいUniversityへのpassportは用意しよう、入学も含めてね。資金面・生活面は我々が全てカバーするヨ？ 君は君の知識とスキルとを伸ばす事だけを考えてくれればソレでOKだ」

ウィリーの申し出は破格だ。否、それ以上に……都合が良過ぎる。健二の不審を買う程に

「どうして」

確かにウィリーの言う様に、OZ内の事件に関して自分がしてきた事への評価は有るのだろう。ソレは理解出来るが、余りに過大な評価は不気味でしかない。だがウィリーには迷いは無い。いつも、彼は迷わない。

「コレは投資だよ、Mr・コイツ。我々は君の未来に投資しようと言うのさ、簡単な話ダロ？ 君はまだまだ原石ダ。確かに現時点での君二対して、コレは過大な評価かも知れないネ。But、だからこそ投資が成り立つのサ。君には素質がアル。ソレは磨き様ではワビスケやMr・ムトーを凌ぐ事も可能な程だとワタシは見てイル。コレはbusinessmanとしてのワタシの勘だヨ。そして…… 実はワタシのこの勘はハズレた事が無いのでネ」

ニツコリと微笑み、またアイスコーヒーに口を付ける。そんなウィリーの言い分は分かった。理解した。だが、

「でも僕はお断りします」

健二の結論は変る事は無い。

例え違う研究所とは言え同じ企業の下で繋がっている。仮に自分が何かを生み出したとして、ソレが軍事利用されない保障は何処にも無い。寧ろ利用される確立の方が高い事は容易に想像が付く。

話はココ迄だ。とばかりに席を立った健二が、その一步を踏み出すより先に……

「八千六百三十二」

その笑みのままウィリーは数字を口にした。

「え？」と聞き入ってしまう。言葉より数字に惹かれる健二の性分を、充分に把握している証だった。

「何の数字だと思いきマスか？ Mr・コイソ」

「え？ ……と」分からない。只の四桁の数字。その意味を考えていると

「グラバースが世界中に展開し運営している、Hospita^{病院}lの数ですヨ」

「え？」

世界中に八千を超える病院を持つ。これは顕然たる事実だ。

「年間六千万ドル」

「え、ウィリーさん何を」言っているのだろうか？ だが簡単。

「飢餓救済・紛争地帯の医師団・平和維持活動に環境保護……世界中のNGO団体に我々グラバースが資金援助している金額ダヨ」

「……六千万ドル」

無償で提供するには巨大過ぎる金額。

「School・Finance・Store・Law office^{学校 金融 販売店 法律事務}」

「ce……挙げればまだまだ出て来るサ。何処までもね？」

「……ウィリーさん」彼の言いたい事が、分かってくる。

「Mr・コイソ……君がレッドフォードを嫌う事は理解出来るヨ。

ワタシは立場上言う訳にもイカナイけど、ソレは人間としては正しい判断ダ。But^{だが}……だからと言って、グラバース・コンツェルンを否定するのは良く無いネ」その視線に強い光を感じる。

「……」

「君が忌み嫌う部分などグラバースの僅かな一部分に過ぎナイ。自分の狭い視野で正義を振るうのは構わナイが、ソレは自己満足でしかナイ事を知るとイイですよ」

「……でも」納得は出来ない。

「だったら兵器産業になんか参入しなければいいじゃないですか！ それだけのコングロマリットなら軍需利益なんて必要無いでしょ

う

グラバースはその自身に大きな矛盾を抱えている。それが納得出来ない。

「我々は企業体だヨ？ 全てが黒字と言う訳にはイカナイ。何処かで黒、何処かでは赤。その中で大きな需要があり、また利益が出る市場がWar^{重需} industry^{産業}である事は事実だヨ。ソコで出た利益は、より多くの人々の生活に密着した市場へと還元されてイク」
「でもグラバース程の影響力が有れば、その現実になんて立ち向かえる筈です。貴方達はソコに利潤が有るから放置しているだけだ。そんな貴方達が「Hahaha!」っ！ 何が可笑しいんです！」

ダンッ！ と思わず健二はテーブルに手を叩き付ける。周囲の人が一瞬何か？ と注目するが、それに構う余裕は無い。今は笑える話をしていた訳じゃ無い。

「Excuse me。A~~~~Mr・コイツ。申し訳無いがソレは我々を買いカブリ過ぎだヨ」

「どういう事です」

「我々に影響力など無い。君がどう思っただけか……まあ想像は付くがネ？ だが残念な事に、世界の、このWar^{戦争} business^{ビジネス}において、我々のシェアなど全体の十%にも満たないモノなんだよ」

「え？」

ソレは健二にとっては意外だった。世界一とも言われる企業体の、その中の軍産複合体である彼らが、である。

「アメリカ・イギリス・フランス・ロシア・中国。君も知ってる国連の常任理事国だ。そしてこの五カ国の兵器の輸出量は、実に世界の兵器総量の八割に及ぶ……分かるかい？ Mr・コイツ」

「……」

「利潤がアルから放置している……もしかしたら君の言葉は正しいのかも知れナイ。でもソレをしているのは我々グラバースじゃない。

彼ら……世界の指導者達なんだヨ」

「すとん。と椅子に座る。どこか、遠い話を聞いている気がする。

「彼等は悪かい？ Mr・コイソ。違うだろう？ だが現実としてソレはアル……君流に言えばコレが『今の世界を成り立たせている方程式』なんだ」

「……これ、が」

ウィリーは健二の目を真っ直ぐに見据え、尊大に言い切ったのだ。

「All of them hold a book of the Gospel in the right hand……I hold a gun in the left hand

（彼等は皆、ソノ右手に福音の書を持ち……その左手に銃を持つ）

「……そんな……方程式……」

在っては成らない。筈である。その確かな反論が言い出せない自分に、健二は驚きを隠せなかった。

ふ、とウィリーは健二の伝票を持って立ち上がると

「少し話しがソレたネ。Mr・コイソ、君と話をするのは楽しいヨ、とてもネ。今日の所はコレで退散するとしましょう。アメリカ行き の件、もう一度ユツクリと考えてミテ欲しいデスネ。それでは……」
そうしてウィリーは去っていった。

「I will see again《また会おう》」と言葉を残して。

五の陣

「でね？ 真悟ったらどうしてももう一回って聞かなくて」

「……」

「全く。結局は頼彦さんが折れちゃうモンだから典子さんがカンカ
ンで って健二？」

「……っ！ あ、はい」

「もう！ どうしたの？ 何か変よ？ さっきから」

「あ、すいません。ちょっと疲れたただけだから」

ウィリーが去って直ぐに健二の下に夏希達は戻って来ていた。皆
一様に楽しい時間を過ごして来た様で、そのセッションは別れる前
とは雲泥の差だ。だがウィリーとの会話を経た今の健二には、些か
そのセッションには付いて行けないで居た。

自分達のこの現実。コレは確かにココに存在する。だがウィリー
の言う現実も確かに存在するのだとは理解出来た。

ココでは無い何処かで、戦場と言う名の市場は絶えず開き、そこ
には大きな需要と供給が確立されている。そしてこの自分達の国も
その恩恵を授かっているのだと感じた。

日本から輸出されるチップがミサイルには必要不可欠だと聞いた
事があった。それだけでも無いだろう。技術大国日本は、その技術
力で様々な分野の世界に手を広げ足跡を残しているだろう。その足
跡が、戦場に付いていないと何故言い切れるのだろうか。

「……結局……僕は自分の手を汚すのが、嫌なだけなのかなあ
……」

何処かで起こるのは構わない。が、自分の手は綺麗でいたい。確
固たる自信と確信を持って言い切るウィリー・マクレガーの方が、

人としてはより誠実なのでは無いだろうか？ そんな風にも思えてしまう。考えてしまう。

そんな自分の前に

「ん」

「え？」

コーラが差し出された。

「ほら！ 婿どの」

「アツインなら飲めよ」

「飲めー」

ソコには子供達の笑顔が在った。

「……………あ……………」

この笑顔に悪は無い筈だ。何も知らないこの子達は悪い者では無い。自分もまた、知らなかったと云う事は悪い事では無い筈だ。無知で在る事は確かに罪で在るかも知れないが悪では無い。

今日、自分は少しだけ世界を深く知った。知らなかった世界を知った。

嘗てはウィリーも知らなかった筈だ。彼もまた知り、そして現在に至るのだろう。で、あれば、自分もまたこれから進めば良い話だ。彼に手を牽かれるのではなく、自分で選び至れば良い。自分の望む道へと、確固たる自信と確信を持って。

彼が正しい訳じゃない、彼が先に居るだけだ……………自分は彼の後の人間であるのだから、後を歩んでいけば良い。結果、同じ道を辿るか道を違えるか、それはまだ先の話で構わない……………今は今の自分の判断と解釈で、歩んでいこうと……………無垢な笑顔は、何故か健二にそう思わせたのだった。

「ありがとう」

感慨深く礼を言つてコーラを受け取る健二に、皆は思わず「？」と成るが、次の瞬間

ぶしゅー……！ 「つてうわっ！！」コーラが
噴き出した。

きゃはは！ と大笑いする所を見ると子供達にしてみれば大成功と言つた所なのだろう。それにしても随分と振つた様だ。

「ちょ！ なななに？」

「け、健二！ 大丈夫？」

「こらー！ アンタ達ー！！」

「……あははははは」「」「」

由美の怒声もなんのその。まあ楽しそうである。

結局、健二のコーラは半分も残つてはいなかつたのは残念な話だ。そんな時

「っああ！ もう、コツチまで飛んで来たじゃない」とは直美の声。随分と遠くまで

「もう、あの子達つたら……？ 健二？」

夏希が見ると、健二は呆然と立っていた。それほどコーラがショックだったのだろうか？ と思つてしまう。が、

健二の脳裏には先の出来事と直美の言葉が渦巻いていた。

飛沫しぶきが飛んだ。

直美の所迄飛ぶとは思わなかつた。

飛沫の飛ぶ場所など分からない……… 「そうか」

不意に立ち上がると「あ、と、すみません。僕ちヨット電話して来ます」

「え？ ちょ、健二？」

夏希が何やら言っているが、半ばソレを無視する形で健二は電話を取り出し皆と少し距離を取る。その電話の先には

『はい。陣内』

「！ 理一さん、僕です」理一が居た。

『どうかしたのかい？ 健二君』理一は近くの駐屯所へと赴いていた。

「すみません、お仕事中に」

『構わないよ。それで？』

一向に構わない。何故なら健二が電話を掛けて来る以上

「例のOZの、エンジェルさんの件で、もしかしたら協力出切るかも知れません」

ソレは何かに気が付いたと言う事なのだから。

特機では情報分析官の桑田が慌しく動いていた。

そんなに火急の件など有っただろうか？ と「なんか慌てるけど、どつたの？」と吉田が聞けば

「あ、吉田さん、手伝って下さいよ。例のエンジェルさん関係のデータ、全部揃えて長野県警に送ってくれて陣内さんから。最優先でって」

「陣内さんが？」

話しながらも吉田も直ぐに動く辺り、彼も切り替えが早い。

「でも陣内さん今、陸自じゃなかったっけ？」彼が自衛隊からの出向であるのは、自衛隊との連携を充にする為だ。特機はそうした者

達で成り立っているのだから重要な任務とも言える。

「あ、はい。陣内さんは遅れて県警に行くそうです」

「？　じゃ誰に送るんだよ」

「健二君ですよ……彼、また何かする積りらしいですよ？」

桑田の笑みに思わず「おやおや」と吉田の顔にも笑みが漏れる。

だが、一層、自分の手足が機敏に動くのを感じた。

「さて、今度は何を見せてくれるってんだ？　あの天才君は」

「あ〜。それ、健二君また怒りますよ？」

「ば〜か。良いんだよ、俺から見りゃアイツは天才さ。まっ！　〇

MCじゃ俺が上だな」

「ふふふ。はいはい」

特機と健二の信頼関係。ソレは良好な関係を築くに至っている。

そんな健二がエンジェル事件のデータを欲している。吉田と桑田だけじゃない。他の特機の面々も皆一様に、事態の新たな進展を、確かに予感していたのだった。

「ただ〜いま〜」

夏希達一行が帰宅した。が

「おや？　健二君はどうしたの？」

万理子の問い通り、健二の姿はソコには無かった。

「なんか長野に親戚の家があるみたいで、少し電話した後で健二、

「ちよつとでも家に顔出せって五月蠅いもんで」って行っちゃった。

夜ご飯には戻るからって」

「あら？　それならその親戚の方達もお呼びすれば良いのにね」

陣内万理子。家長になってから一層、懐の深さが増したようだが

「いや、流石にソレは無いつて、母さん」理香の気苦労は増えた様

だ。

そんな中で

「あれ？ ねえおばさん。佐久間君は？」姿が見えない。

「ああ。佐久間君なら侘助の部屋よ。なんか二人でずっとパソコンやってるわ。なんか真剣だったから、夏希も邪魔するんじゃないわよ？」

「あはは。しないって」

機先を制されては致し方ない。まあ佐久間もコンピューターには凄く詳しいし、おじさんと話が合うのだろう。と自分の中で結論付けた。まずは目下の問題。このぐずり出した小悪魔共を昼寝に付かせなければ成らない。中々に骨が折れる作業にゲンナリな夏希だった。

「すみません。捜査一課の国木田さんを」お願いしますと理一が言い切る前に「ああ！ 陣内さんですね。私、捜一の国木田です。ヨロシク」本人が前に現れた。

「陣内です。突然無理言っつて申し訳ありません」先ず、謝意。実際に理一の申し出は突然に過ぎたろう。特機の権限を使って押し通したに過ぎない。若干の心苦しさは有る。

「いいえ。我々は一向に構いませんよ」

「すみません。それで、彼は？」ソレが理一がココ、長野県警を訪れた用件。

「コチラです」

理一を先導して歩く国木田だが、どうしても聞きたい事がある。いや、コレは国木田だけでは無い。今や県警内の多くの者が知りた

がっている事だろう。

曰く、彼は何をしているのか？ と。

「ご要望の通り、東京から送られて来たデータをそっくり彼に渡しました。そして、すいません。手頃な場所が開いてませんで、休憩所の一部を彼に」

「今もまだ？」

「はい。ソコに居ます。けど」

「？ なにか」

彼らの疑問は理一にも疑問。

「彼は何をしてるんでしょうか？」

「私も、ソレを知りに来たんですよ」

「はあ？」

そして

「つと！ コレはまた」

理一が見たのは一心不乱にホワイトボードに英数字を書き殴っている健二の姿だった。何時見ても、こういう時の健二は圧巻である。既に三枚のボードにはビッシリと文字が埋まり、四枚目に突入した様だ。

テーブルに置かれたノートPCでデータを見ながら、また一気に書き出す。そんな繰り返しの中、ふ、と理一の姿に気付く。

「あ！ 理一さん」

「やってるね、健二君」

既に周囲には少なくは無い県警の警官が、健二の所業を眺めていた。去年の出来事もこの県警の者にとっては記憶に新しい。あの時の高校生が何かをしている。それは充分に興味の対象だろう。

健二の背後に立った理一は、頃合いを見計らい話し掛ける事にする。このままだと、健二は何処までも計算に没頭しそうだ。表情を見る限り、今の健二はそれほど切羽詰った様子にも見えない。

「それで？ 九回目の投下予測をする方法でも分かったのかい？」

データを受け取り渡した際に、ソレがエンジェルさんの八回分のデータで有る事は知れている。周囲には、おおお。と、どよめきも起きるが

「いえ。それは昨日も言った様に無理ですよ。変数が多過ぎますから不可能なんです。でも、他にも方法があつたんです」

「？ どういう事だい？」

全く意味が分からない。そんな理一に

「飛沫です。コーラが噴出したり、噴水や火山とか。ああ云った、噴出する放射物ですよ」

もっと分からない説明を健二はした。やはり理一としては

「？ だから、どういう事だい？」一層、意味が分からない。

「え、つと、ですね」

一段落なのだろう。健二は振り返り（一瞬、何時の間にか居たギヤラリーに驚いたが）説明を始めた。

「例えば、今日、コーラの缶を開けたら飛沫が噴出したんです。ほら？ 缶を振つたら出る」

ああ、分かる分かる。と何処かから声がかかる。

「ソレです。で、例えば飛んだ飛沫の八滴から、他の飛沫の飛ぶ場所を推測出来ません。残りの飛沫が飛ぶ場にはそれぞれに様々な影響を受けますから、予想のしようが無いんです」

「ソレが変数が多いって表現か」

「はい。でも、飛んだ八滴。これ等の角度や当たった時の威力。弾いた方向性などから逆算を掛けると、何処の位置の缶から噴出したかを割り出す事は可能なんです。所謂、飛沫の基点です」

皆に、健二の言わんとしてい事が伝わってくる。

「おいおい。それじゃあ君は、次の犯行じゃなくて」

「犯人の、居場所を見つけて言うのか？」

犯行を阻止。では無く、犯行を行った者を追う。

再び数式に向う健二の背に「出来るのかい？ そんな事が」と声を掛けるが

「理論上は」と簡潔な答えが。

彼はあくまで理論の上に立つ者だ。理一は慣れたが、流石に泉警の者にしてみればソレは机上の空論に思えてならない。

「そんな簡単に割り出せたら苦労しないだろう？」

「過去の八回だってランダムなんでしょ？ 犯人だって馬鹿じゃ無いんだし、痕跡は残さないと思うけど」

「ホシの足取りは掴めなかつたって有るぜ？」

そんな声も上がる。理一は健二の邪魔になる様なら一同を下がらせようか？ とも考えたが

「そうです。犯人はランダムに犯行を重ねています」健二は事も無く先んじた。

「でも、それは有り得ないんですよ」

「と言うと？」

健二は手を止め、えくと。と辺りを見渡し

「コレ、ちよつと持つて貰つて良いですか？」と一人に小銭を十枚程度す。そこになんの意味があるのか分からない。

「じゃあコレを、この、テーブルの上に置いて下さい。出来るだけランダムに。あと……貴方もお願いします。っと、理一さん、小銭貸して貰えます？」

「ああ じゃあ、コレを」

そうして指名された二人は健二と理一の小銭を、それぞれの場所にランダムに置く。

「置いたけど」

「コレが何か？」

二人だけでは無い。他も者にも意味は分からない。だが、
「はい、結構です。二人共、テーブルの上にランダムに置きました
……でも、見て下さい。コレは決してランダムなんかじゃないんで
す」

「「え？」」

それは置いた二人だけでは無い。他の者にとっても意外な言葉だ。
確かに二人はランダムに置いた。今見ても、ソコに規則性は無い。
だが

「全てがバラバラに、離れて置かれていますよね？」ソコが健二の
言い分だった。

「どうして離れて、しかもバラバラに置かれたんですか？」

「は？ だって」健二がランダムに置けと言った筈だ。そう言い掛
けたが

「僕はランダムに置いて下さいと言っただけですよ。ランダムとは
何ら法則性と持たない事です。つまり」

こういう事です。と言いながら、テーブルに置かれた自分の小銭
を集めてテーブルの上で放した。

「じゃらん。と音を立てて小銭は散らばり、或いは転がりやがては
収まる。」

「こうして、遠く離れたり、重なったりする場合も有る」数枚の小
銭は重なり合って倒れていた。だが、理一の小銭は重なり合ってい
るモノは無い。只の一枚も……

「極論で言えば、十枚全部が積み上がる可能性だってゼロじゃない
んです。でも貴方達は僕がランダムに置いてくれと言った事に対し
て、全ての小銭を離して置きました。つまり……重ねて置かないと
云う法則性が生まれたんです」

「「あ」「」

確かに、自分達は離して置こうと考えた。見ている者達は離して
置くモノだと思って眺めていた。

まるで違和感無く、そう考えてしまった。

「つまり、ランダムを意識すれば、それは既に完全なランダムにはならないって事か」

「そうですね。ソコに人の意思が介在するなら、完全なランダムは有り得ない。そしてこの犯人は、犯行をランダムに見せる時、ある場所を強く意識している筈です」

ソレは確信に近い。でなければ犯行場所をランダムにする必要性が無い。そしてその場所は

「つまりは犯人の家って事か」その結論に、辿り着いた。

「もしくは職場、或いは行き付けの喫茶店かも知れません。でもどちらにせよ、自分の痕跡が最も強く残る場所を悟らせない様に意識して犯行現場を散らしています」

「なるほどな。ソレを追う訳か」

健二は再びボードに向う。もう答えはソコ迄来ている。

「全てに共通するモノは有るんです……時間……場所……曜日に、移動手段。例えばOZから渡されたデータによればウイルス放出の時間は曖昧です。でも犯人が犯行後にその場に長居するとも思えません。だったらソコから退去の時間を割り出せます。時間は昼前や夕方前、土日や祝日には動いて居ない所をみると仕事中の犯行。犯行は時間に縛られません。仕事は時間に縛られますから、ある程度の時間は予測の範疇です。おそらく意識する場所は自分の職場の可能性が高い」

「ほとんど、計算は進んでいく。」

「八件中二箇所には駐車場は無いし三件目は車両の進入は禁止されています。車での移動は考慮しないから犯人の移動範囲は限られてくる。全ての移動時間と犯行現場の距離も考慮に入れれば……よし！」

「言って健二はテーブルに広げた地図に向い、一箇所にマジックで印をつける。そこが

「この周辺に犯人の職場が有る筈です」

彼の見つけたホットスポットだった。

六の陣

健二が出した予想ポイントは直ぐに直通回線で特機にもたらされた。まさか【次の】では無く【居場所】の予測が来るとは思いもしなかったが、ソレも含めてやはり小磯健二なのだ実感する。捜査のプロである自分達と、計算のプロと言える彼とでは、全てに置いて物事へのアプローチが違うと言っただけの話だ。

「しかしこのポイントでは少しばかり……大雑把だな」
「もつと絞らないと」

確かに、健二の示したポイントにある会社などは無数にある。だが「でもコンピューターウイルスなんて誰でも扱える代物じゃないだろう？ 少なくとも俺には無理だ」

「じゃあ、この中でコンピューター関連の企業に絞ってみて……」
少し、会社の数を示す光点が減る。

「使えるって事だけじゃ無理だろう。OZを抜けてウイルスを流すんだ。結構本格的な奴だぜ」

「エンジニアやプログラマーに限定しても良いんじゃない？ 事務や経理には無理でしょう」

特機の面々が少しずつ絞り込んでいく。それでもまだ三件の会社が残った。

「システムソフト開発が一つに、ゲームソフト会社が二つ、か」
本村の声にも緊張感が満ちる。ここらで総当りを掛けて見ようか

「誰が向ってる？」既に、人員は向わせている。

「吉井と菊間が。どうしますか？」

絞込みが済む前に行動には動いている。時間は有効に使わなければ
「時間が惜しい。渋谷署に応援要請。三箇所のデータを送れ。吉井
と菊間は合流次第報告」

「了解」

所轄に対し捜査協力を要請する権限は本村にある。ソレは強制と
言っても過言では無い強権だ。無論、異を唱える所轄は少ない。そ
れだけ特機の捜査の重要性は浸透していると云うことだった。

「さて…… 上手く行ってくれよ」

本村が見詰める特機のモニターには、渋谷の外れに光点が三つ、
明るく灯っているのだった。

長野県警では理一が本部へ連絡に行き、健二は所在無さ気に佇ん
でいたが

「もう帰ろっかな？」

今後の自分の身の振りに戸惑う。

計算が誤算であつたなら計算をやり直す必要が有る。結果は見届
ける必要が有ると思つが、何時までこの状態が続くのかは健二に
は、否、他の誰にも分からない。普段で有れば問題無いのだが、如
何せん今日は長野だ。夏希には夕飯には戻ると言つて有るし、この
ままココに居た所だと云う気持ちもある。

「っん！ 取り合えず戻ろっ」と廊下へ出た時

「ああ！ やっぱり小磯君でしたか」と聞き覚えのある声が

「？ つ！ 磯貝さん……どうしてココに？」
「いや、まあ……多分、君と同じ理由？」

磯貝隆。OZ・JAPANのセキュリティ部門責任者だった。

一年前に彼と会った時は健二は本当に嫌な顔をされたものだ。絶対の自信を持っていたセキュリティを健二に破られてしまったのだから無理も無い。挙句にはあの騒ぎである。友好的な対応を取ってくれと言う方が無理だろう。

だが特機との関係やその後の過程を経て、彼とはそう悪くない関係を持つに至っていた。新しい二千三百八十七桁を健二に試してくれと言ったのも彼だった。

その磯貝が同じ理由と言う。エンジェルさんがウイルスである以上、やはりセキュリティの問題となると言う事だ。

「そういえば……確かOZから捜査依頼が、って聞いてましたけど……磯貝さんだったんですか」

思わず苦笑を洩らす二人だ。磯貝も健二も、どちらも好きでココに居る訳では無いと言う事だろう。

「まあね。コツチには別件で来てただけど、何やら長野県警でアしに対して何かやっていると聞いてね。場所も場所だし、もしかしたら？ って思って来て見たら、バッチリ君が居たって訳」

「僕は大した事はしてませんよ。それに、もうこれ以上は出来る事も無さそうなので、そろそろ帰ろうかと思ってた所で」

軽く挨拶でもして別れよう。そう思っていた健二に、磯貝が不意に接近する。

「で？ 君は彼等に何を教えたいんだい？」

「は？」

ひっそりとした小声で、何を問う？ そんな事せずに

「いや、理一さんとかに直接」聞けばいい。OZと警察。二つの組織はどちらが上と言う事も無く、互いに着かず離れずの関係の筈だ。

「いや」。捜査を押しす為に上層部に掛け合ったから、今は少しばかり風当たりが強くてね。どうにも警察には良い顔されないんだよ」

「ソレって、圧力、ですか」

「ま、まあ……僕もやりたくてやった訳じゃ無いんだけどね。で？君は何を彼等に？」

「はあ」何処までが話して良い事なのか。それが問題でも有るがOZは今の所は被害者の立場と言ってもいい。隠す必要もそれほど感じられない。

「別に大した事は伝えていません。過去のデータから予想出来る犯人の居場所を……居る可能性の有る場所を伝えただけです」あくまでも可能性の話ですけど。と磯貝の疑問に答える。詳しい場所までの話はあえて避ける。コチラの意は磯貝には伝わるだろう。

「そうか……いや、ありがとう。で結果は？」

「ソレはまだですね」

「なるほど。では僕は暫くココで待たせて貰うとするか」

健二とは違い、磯貝には結果を知る義務が有る。捜査が動いたならソレを見届けなければ。だが健二にも疑問は残る。

「あの、磯貝さん」

「ん？」

「どうして警察に圧力掛けてまで？」

コレが犯罪でOZが被害者なのは分かる。だがこんな事はソレこそ日常茶判事だろうし、それなりの地位に居る磯貝が直々に出張る程の事件とは思えない。夏希の話では無いが実質の被害が出ているとは聞いて居ない。OZのバイトでエンジェルさんを追っている自分の耳に入ってこない以上、ソレの認識に間違いがあるとも思えない。OZがソコまで必死にこの事件を追う必要性が健二には見付けられなかった。だが

「ソレは僕にも分からないよ」

「え？でも」圧力を掛けたのは磯貝の筈だ。警察との関係がギクシャクしているとは彼の言葉から伺えたのだから。

「これは僕の上から出てる話だよ」一層小声になる。健二が自分に答えてくれた事への、コレは返礼だろう。

「上って……OZ・JAPANのトップとかですか？」磯貝の上となるとソレ位しか居ないだろう。だが現実には

「いいや。もっと上だよ………どういう訳かは僕には分からないけどね」

「もっと……ですか」

自分の知らない所で何かが動いている。そんな見えない影に、一抹の不安を感じる健二だった。

特機に通信が入ったのは捜査が始まって三十分程経過した時だった。

『コチラ渋谷署捜一の木下です』

「特機、柴田です。なにか分かりましたか？」

現地の捜査員から。既に本件は管轄を跨いだ事件として特機がその本部となっていた。

『容疑者と思しき人物、一人ヒットしました』

容疑者の言葉に特機内も注目する事となる。

『香坂ヒカル三十才。ゲーム会社ファイナスの営業です』

「営業、ですか？」

通信担当の柴田の声にも疑問が含まれる。自分達の予想では専門的な知識が必要では？ となっていたのだから。

『あ、香坂は営業兼プログラマーです。と言うか、この会社は小規模の会社で、社員全員が自分の仕事の他に営業を兼ねているそうです』

だから理解出来る。だが一番の問題はその確保だ。

『過去八回とも、犯行時に営業に出かけています。あ、ちょっと待って下さい……』

「木下さん？」

通信の向こうでは誰かが木下に話し掛けている様だ。少し、待つてみれば

『あたりですね。今、香坂の机の中から以前ボツにされたキャラクターの原案が見付りましたが、例のアレにソックリですよ』

天使の姿をしたウイルスと同じ絵だった。

「それで香坂は？」

『現在も営業に出掛けています。行き先は新宿のゲーム雑誌出版社。今、データ送ります』

言うや特機のモニターに出版社の場所と何かの写真が送られてくる。マルで囲まれた人物が件の香坂と云う事だろう。

「吉井と菊間に向わせる」

桑田は言われるや

「はい……吉井さん。桑田です」

『こちら吉井』

「容疑者が一人浮かびました。現在、新宿に居る模様。データ送りますので至急急行願います」

『了解！』

事態は収束へと加速していく事になる。

「新宿ねっ！」

菊間が車をターンさせ一気にスピードを加速する。そんな彼の横で「それにしても」とは吉井だ。

「健二君。ドンピシャだったな」

本当に犯人に突き当たるとは本気で思っではいなかった。おそら

くソレは自分以外も同じだろう。だが現実は今、事態は動き出した。今更ながらに小磯健二の計算に驚きを覚える。

「未恐ろしいね。アレでまだ高校生だぜ？」

「往くは博士か研究者ってか」

その才能は未来への選択肢を広げる事だろう。そしてその中には「犯罪者」って線だけのご遠慮願いたいね。正直……アイツに勝てる気がしない」

「彼の師匠の様に、か」

「そんな思いが有る。」

武藤が起こした事件に、自分達は健二抜きで対応出来たとは思えない。小磯健二には出来る事が多過ぎる。利と成っている現状はソレを歓迎するが、そのベクトルが負とした方向へと変わったなら、ソレは大きな脅威となるだろう。

「だが全ては先の話。今は只」

「健二君に限って、ソレは無いだろうけどな」

「ま、ああ見えて熱血漢だからな。もう少し気楽に行けばイイものを」 その人間性を信じるより他は無いのだった。

陣内家では子供達が昼寝をし、女性陣は暫しの休憩をくつろいでいた。そんな中、ふ、と直美が口を開く。

「それにしても、まさか一年前の嘘が現実味を帯びてくるとはね」

「せんべいをカジリながらの発言に、？ な一同なのだが」

「健二君よ、健二君」

「健二？」

「彼がどうかしたのだろうか？ そんな空気。」

「彼、東大志望なんでしょ？ しかも結構可能性高そうって話だったし」

確かに昨夜は進路の話なども出た。健二が東大志望なのも驚いたが、夏希の話では可也の確立で受かりそうである。元々が数学では日本代表に成り損ねる程の上位者なのだ。他の大学からの誘いも多かったが、健二はアノ一件で、どこか侘助に引かれる部分も有ったのだろう。彼と同じ東大を目指す事にしていた。

そんな話題に奈々と由美も華を咲かせる。

「それに小磯君って学校でも人気有るんだよね？」

「そうそう。ウチの了平なんか、小磯君紹介してくれて頼まれてくされてさあ」

「どうしてですか？」

「了平が好きな娘だったんだって」

あはははは！ と笑いも起きるが、一人、笑ってる場合じゃ無い者も居る。

「って！ 笑ってる場合じゃ無いでしょ！」

夏希である。まあ自分の彼氏の話でソレは笑い事では無い。無いのだが

「でも学校にはファンクラブもあるんでしょ？」

「アンタ！ 東大生って言ったら女にモテまくるに決まってるじゃない！」典子と理香も、まあ容赦無い。

「だ！ 大丈夫だもん！ 健二は浮気なんかしないもん！」

ここはもちろん必死の抵抗だ。援護など……

「あ、学生結婚もあるんじゃない？」

「あらあら。私もこんなに早く孫の顔が見れるなんて思わなかったけど、良いわね。それも」……有る筈も無かった。聖美はともかく、母の雪子にまで言われては孤立無援もいいトコだ。

「もう！ 勝手な事ばかり言わないでよー！」

結局、万理子が「もうその辺でおやめなさいな」と皆を止める迄、夏希の嬉し恥ずかしい尋問タイムは続いたのだった。

そんな騒がしい陣内家の二階では、佐久間と侘助が解析の終了まで漕ぎ着けていた。

「出来た……けど、なんだ？ コレ」

「一体、なんで」

エンジェルさんの解析は終わった。やはりコレは只のウイルスでは無い……様な気がする。

解析が終わって尚こんな曖昧な感想を持つ。その理由はプログラムが行う所業だ。一体、こんな事をするプログラムを打ち込んで、コレを始めた犯人に何の得が有るのが分からない。

「どうにもよく分かんねえな」

「……」侘助に言葉を返すでもなく、佐久間は携帯を取り出すと

「？ 佐久間君？」

何をする気なのだろう。佐久間はそんな侘助に目で答え……

「……っ！ あ、健二か？ 俺だ。お前今……大丈夫か？」

彼の親戚が長野に居るとは聞いた事が無い。だとすればアッチ側の件で動いている筈だ。

深くを聞く事は出来ないだろうし、そんな事は佐久間も望まない。侘助と同様、健二は少し深く立ち入り過ぎている気がするし、自分はソコまで立ち入る積りは無い。今の所は。

「だったらココは何も聞かない方が良い。お互いの為に。」

「うん。もうすぐ戻ると思うけど……何かあったの？」健二も佐久間の声色に不審なモノを感じたのだろう。少し、声が堅くなる。

「ああ。実はエンジェルさんの一部を昨日捕まえたんだ。それで今、侘助さんに解析して貰って……それが少し」

長野県警の中では事態が大きく動いていた。

「ああ！ ココに居ましたか磯貝さん」

警官が彼を捜していたのだろう。健二と談笑する磯貝に慌てて駆け寄る。

「なにか？」

「はい。実は例のウイルス。犯人を先程検挙しましたよ。新宿で」

「おお！ それは」

特機の吉井と菊間が新宿へと到着し出版者へと赴いた時、ソコには既に香坂が居た。打ち合わせ中だと押し留める社員を押し退けて会議室へと乗り込んだ彼等を見るなり、逃げ出そうとした香坂は直ぐに取り押さえられてしまう。結果、自身に後ろめたい事が有ると自分で言っている様なモノだ。自供もすんなり取れているとの事。どうやらボツにされた案に未練があり、その否定されたキャラクターが世間の注目的になる事で欲求を満たしていたらしい。なんとも迷惑な話だ。

「向こうと通信も繋がってます。コチラへ」

「はい！ つと、健二君。君はどうする？」

「あ、僕も行きます」と言い切る前にpipipipipipipipipipipと電話が鳴る。「あ、すみません。先に行つて下さい」言う健二に「わかった」と、皆が集まる場所へと磯貝達は行ってしまう。

「！ 佐久間？ …… piはい」

『あ、健二か？』

佐久間からの電話だった。

健二を残し磯貝が到着すると、「ソレは確かなのか？」理一の声には緊張感があった。吉井と直接電話している様だ。

周囲の者にはその緊迫の理由は分からない。

「あの、陣内さん？」

磯貝の言葉も耳に入らない。それは、事態の収束を意味してはいなかったから。

『香坂の怯え様から見て嘘を付く余裕は無さそうです。多分間違いないでしょう。コイツは酒場で知り合ったその銀行員にウイルスのプログラムを貰ったそうです。ソレに自分が考えてボツにされた天使のキャラクターデータを上乘せした』

「そうか。その銀行員の身元は？」

『どうやら新東京銀行の営業でっ！ ああ、今本部で確認取れました。菊田正行三十二才。新東京銀行の歌舞伎町支店預金課勤務。これから向かいます』

ウイルスをばら撒いた者。そしてこの事件には、ソレを造った者がいるらしい。

事件はまだ解決などして居ない。

「分かった。進展あったら連絡くれ」

『了解』

通信が切れた時、直ぐ傍の通路では

『んに解析して貰って……それが少し 妙なんだ』

「妙？」

佐久間敬の電話が新たな事件の影を、小磯健二の下へと送り届けていたのだった。

七の陣

「ソレってどういう」

佐久間から電話を受けた健二には、その意味が未だ掴めない。そんな時

「ソレなんだけど」と佐久間が言うと「俺から話すよ」と会話に割り込みが

「っ、侘助さん」会話に加わって来た。

「佐久間君が捕まえたコイツなんだがな？ 付いたアバターの権限を使って金を動かしてるんだ」

「お金を？」

だとするなら何も妙な事は無い。これは只の犯罪だ。

「ああ。でもソイツが妙なんだ」

「え？」

「コイツで誰が得をするのか……」

「侘助さん？」

侘助と佐久間が辿り着いた答えはエンジェルが勝手に金を動かすと云うモノだった。その金額は僅かに四円。

この四円を引き出すだけなら犯罪としては不思議も無いが、問題はどうでもな？ 健二。コイツは四円を出した後に、直ぐに四円を戻すのさ。ココに差額は発生しない」どこに利益があるのか？ と言う事だ。

「ちよつと俺のアバターも調べてみたけど、確かに四円引かれてたよ。でも四円入金もされてる。俺は損なんかして無いんだよ健二」

佐久間にしても自分の記録を見ても不自然を感じる。ただエンジェルさんにかかわられているだけなのだろうか？ とも思う。

「取り合えずOZには報告上げとくけど、お前にも言っておこうと思っただ」

健二が何に絡んでそっち側で動いているのかは佐久間には知る由も無いが、OZで起こっているトラブルがエンジェルさんである以上、彼の耳には入れておいた方が良いだろうとの判断。逆に言えばココ達が自分とアチラ側との一線だと佐久間は理解する。

「分かったよ。ありがとな佐久間。侘助さんも、どうもでした」
「ああ」「そんじゃ」

piと切る。が、頭の中ではまだ話が途切れない。思考は未だに繋がっている状態だ。

まさにエンジェルさんの件でココに居る。犯人は割れた。捕まえたとも聞いた。でも確かに今の話は……不審を覚える。そんなぼんやりと考える健二に「健二君」

「……………」

「？ おい！ 健二君！」

「っ！ と、はい？ 何ですか？ 理一さん」

「いや、何ですかじゃなくて。どうかしたのかい？ 考え込んで」「ふらふらと現れた健二にこそ何か有ったのか？ と聞きたいものだ。」

「ああ、すいません。ちょっと考え事を……例のエンジェルさんなんですけど」

「ん？ どうかしたのかい？」

流石にその言葉には皆聞き入る。まさにその事件で皆ココに居るのだから。

「佐久間と侘助さんが一部を解析したらしくて」

「侘助と佐久間君が？」

「はい。でも、なんかチョットおかしいんですね……アレは四円を出し入れするプログラムらしいんですけど……どうしてそんな事

をするのか……」

そして再び思考に埋没しかける。そんな健二に

「ま、よくは分からんが、それも犯人を捕まえればハッキリするさ」

理一はそんな事を言う。健二にとっては不思議だ。さつき確かに

「あれ？ 犯人は捕まえたって」そう聞いたからココへ来たのだ。

「いや、捕まえたのは実行犯だ。健二君の計算したスポット内の会社に勤めてたよ。そいつの話では基本プログラムは菊田と言う銀行員に貰ったらしい。その菊田を捕まえれば、その四円の謎も直ぐに分かるさ」

既に時間の問題だ。という感じで理一達の空気も幾分リラックスしたモノに成っている。

健二は「そうなんですか」とぼんやり聞く……そして考える。

何かが繋がりそうな気配。

いつも難解な設問を解ける時に感じる、もう少しで繋がりそうな

方程式……ウイルス……四円……そして銀行員……「っ！！！！」

そうかつ！！！」

「健二君？」

突然の大声に思わず健二に目を向けてしまいが、ソコには厳しい表情を見せる健二が居た。さつき迄の彼が見せた事の無い厳しい顔。健二が辿り着いた答えは

「理一さん、コレは詐欺、いや、強盗事件です！ それも未だ嘗て

無い程の巨額な……」

「は？」

エンジェルさんの真相だった。

健二の言葉に一瞬辺りは静まり返るが「ちょっと待ってくれ」理一は幾分の慣れがある。

「一体どう言う事だい？ 実行犯はボツにされたエンジェルのキラクターを世間にばら撒きたくて犯行に及んだんだよ？ 見た限りじゃあ自白の信憑性は高いと言う事だが」

そこに他意は見受けられない。

「その人はその積りかも知れませんが。でもこのプログラムを組んだ人の目的は違うんです。その実行犯はただ利用されただけですよ。

「コレを造った、菊田？ と言う人の目的は金です。それ以外に無い」
「しかし何の根拠があっ」二十四時間で全て消失する様に組んだのは凄いですよ。この菊田って人は頭が良い。こんな事、無制限に続けていたら直ぐに目立って見付ってしま」健二君っ！

「思わず自分の世界に入ってしまった健二を理一は引き戻す。今重要なのは「だからどう云う事なんだい」だから。

「あ、すいません」

健二も自分が周りを見ていなかった事を実感するが、今は皆に知らせる事が先だと切り替える。

「え、っと。すいません、ココ借ります」言うや手近のホワイトボードを消す。「ああ！」と言う声と「構わん」と言う声が入り乱れるが意に介さない。こういう時の健二は周りの反応に鈍く成りがちだ。

「この犯行はこうです。まず実行犯がエンジェルさんと云うウイルスをOZに放ち、【A】が感染します。第一号です」

ボードに【A】と書かれる。

「エンジェルさんのキャラを【A】に見せる事で実行犯の目的は成立です。で、ココからがプログラムを組んだ菊田の目的。ウイルスは【A】の権限に干渉して菊田に四円を送金します。ココが起点になります」

ボードの【菊田】へ【A】から【四】が動いた。だが

「でも直ぐに返すんだろ？ だったら」儲けは無い。

「はい、そうです。でも返すのは菊田じゃないんです」

「え？」

ココで、その場に居る全員が健二の話に本気で耳を傾け出す。

「ウイルスは倍々で増殖していきます。だから【A】から【B】と【C】に感染が広がって行く事になります。そこで、【B】と【C】から二円づつ【A】に送金され、ココで【A】は四円の入金を得て損金はゼロになります。そして【B】と【C】の残りの二円づつ、【菊田】へ計四円の入金になります」

ボードの【A】に【二】と【二】が動き、【菊田】に【二】と【二】が動いた。

ココ迄くれば、皆にも健二の言わんとしている事は分かった。

「後はこの繰り返しです。BとCは更にD・E・F・Gへ感染させ、其々から二円づつの入金を得てプライムゼロに。今度は八円が菊田の下へ。そして更に」

「OKだ。つまりねずみ算式に増えていく訳だ」

「はい、そうです」

健二の説明を止めた者と同様に、皆も同じ結論に辿り着く。

「それで？ 君の計算だと幾ら位の金額になるんだい？」

「幾ら？ ですか？」

県警の刑事と思しき男の問いに少し面を喰らった感もあったが

「正確には予想不可能ですね。何処かで枝が止まる事もありますし、広がる速度も一定じゃない。でもコレを二十四時間で、しかも八回も繰り返し返したとなると……」

「なると？」

そして聞く

「……六十とか七十とか……少なくとも五十億を切る事は無いと思います」

「ばー!」「ぐ、五十お」「そんな!」

ソレは驚愕の数字だった。

ざわめきを隠せない中にあっても疑問は飛ばざるをえない。

「でもたった二円よ？ そんな金額に」成るのだろうか？ 彼女の疑問も最もなのだが

「ソレが成るんですよ」健二の確信もまた最もだった。

「え、と。そうですね……っ！ この紙、貰いますね」

健二が手にしたのはFAXに刺さっていた無地の用紙。

「この紙はこのままだと薄いですよね？ でもこうして……」こうすれば

紙を折って、更に折る。

「厚さは四倍になって、さっきよりも少しだけ厚みが増します」

ソレは見て分かる。と言うより当たり前だ。

「物理的に紙を折る回数には制限がありますが、仮に理論上の話でこの紙を五十回折り曲げたら、一体どれ位の高さになると思えますか？」

まるで授業の様に、居並ぶ警官に健二は問い掛ける。

「えっと、数メートル？」

「もっとだろ？ 家とか」

「ビルの高さ位じゃないかしら」

そんな回答が飛び交う中、

「太陽に届く位ですよ」

健二の言葉は周囲を黙らせた。その高さは地球を飛び越え宇宙を進んだ。

「コレが等比数列。全てが倍々に増えていくんです。仮に菊田が百万を手にしようとしたなら必要な感染は 僅か十九回です」

健二は数式を殴り書きながらも皆に話した。そして理一を見つめ「菊田と言う人の周囲の金の流を追って見てくれませんか？ 多分、凄い額のお金が動いている筈です」

「分かった！」

受話器を取り特機への直通回線を開く理一を眺めながら、ソレでも健二は思う。思ってしまう。

これ程のウィルス。自分なら……もっと上手く使えるのではないか？ と。無意識に、知ったモノのより効率的な方法を模索してしまつ自分自身に、健二はまだ気付いては居ないのだった。

新東京銀行歌舞伎町支店には吉井の姿が在った。

「すいません。コチラに菊田正行さん、いらつしゃいますか？」

警察手帳を見せながら問う吉井の言葉に「ああ、菊田さんでしたら」と窓口の女子行員は後ろの菊田を指すが菊田はすぐさま裏口へと駆け出していた。

「っ！ 菊田ああ！！」

受付のカウンターを乗り越え怒声を上げる吉井に行内は悲鳴が飛び交う修羅場と化した。が吉井にソレを気にする気配は無い。今はただ、菊田を確保する事だけが優先事項だった。

「菊間っ！ 裏口だ！」

『了解！』

電話で連絡を取りながら自分も裏口へと走り込んでいった。

その頃特機でも動きが有った。理一の連絡で菊田とその周辺の金の動きを調べた。が、事態はそれほど劣せずに発覚に至る。ソレ程

迄に、巨額だった。

「部長！」

「出たか？」

本村の下へ柴田が駆け込んで来た。調べが付いたと云う事だろう。一同もソレに注目するが

「確かに菊田が担当した口座や他の銀行の菊田名義の口座は確認出来ました」

「それで？ どうだ」

問題はその中身のだが「それが……」何故か言い澀む柴田を不審に思う。

「柴田？」

「はい。その金額なんです……」それは柴田の想像も、健二の想像も、超えていた。

「およそ百二十億円です」

「な！」

多少の端数はある。細かい所まで行けば二円で終わる。だが凡その額で言えば、百二十億円の金を菊田は手にしていた。だが柴田が言い澀んだ理由は別の所にある。ソレは

「でも使われてるんです」その一点だった。

「使われてるって？」

「どういう事ですか？」

吉井と桑田には意味が分からない。

「だから百二十億円。綺麗さっぱり無くなってるんですよ。海外の銀行へ振り分けて送金されてます」

そして口座には何も残っては居ない。

「只移ただけじゃ無いのか？」

「その送金された先からも送金されてます。そしてその先で全額下るされてます。世界中で……この百二十億は現金になったんですよ」「馬鹿な。ヒルズのトップフロアでも買い占めたってのか？」

百二十億の買い物などそうそう有る筈も無く、目立たない筈も無い。

「でも先輩。銀行から割り出せないんですか？」

それだけの金額だ。送金しても下ろしても、嫌がおうにも目立つだろう。だが

「無理ね。全て海外の話だし、まだ犯罪の金と決まった訳じゃ無いのよ？ 日本に彼らに対する情報開示の権限は無いわ。ソレに応じない銀行を選んでる面もある。余程の条件が揃わない限り、彼等は日本政府より自行の顧客を優先するでしょうね」「そんな」

桑田にとっては事件解決が何より優先されると云う認識が強いのだろう。だが現実には柴田に分があった。海外の銀行にとって、ソレは対岸の火事では無いのだから。

「いいさ」

本村の声で一同は彼を見る。彼には迷いは無い。全ては承知といった所。所詮は

「菊田を抑えれば全てはつきりする」

この一点に尽きる話だった。

銀行の裏口を飛び出し、駆け出した菊田が車に乗る寸前

「はい、じくろつさんっ！」と

「ぐあー！」

待ち構えた菊田にあっさり取り押さえられた。予め待ち構えてい

たと云うところだ。

菊田を車に押し付け右手の間接を極め身動きを封じていれば

「よ、お疲れさん」

「遅いぞ吉井」

吉井もまた到着した。事ココに至り、菊田も観念したのだろう。

彼は抵抗するのを諦めていた。そんな菊田を見ながら特機に連絡を入れる。

「コチラ吉井。本部」

『桑田です。首尾はどうですか？』

「上々。菊田を確保した。これより本部へ」連行する。と言い切る前に

「っ！ おい！ どうした！！」

「連こ？ 菊間？」

菊間の声に振り返れば……

「この！ お前！！」

激しく痙攣する菊田と、菊田の口に指を突っ込んでいる菊間が居た。

「どうした！」

「分かんつ！ 多分コイツ毒を！！ おいつ！ おいつ！！！」

『吉井さん？ どうしました！』

「菊田あ！！！」

「菊っ……駄目だ」

「くく。嘘だろ！」

『何が有ったんです！ 吉井さん！ 菊間さん！！』

呆然と立ち尽くす吉井と菊間の前で、口内に仕込んだ毒で自らの命を絶った菊田の死体が、苦しみの表情を浮かべながら横たわっていたのだった。事件は……

「一体何だっただよ」「吉井の言葉を肯定するかの様に、

始まったばかりだった……

八の陣

「お帰り、健二」

「ただいま戻りました、夏希さん」

健二は陣内家へと戻った。

コチラから出来る事はした。菊田が自ら命を絶つと云うショックな事態には成ったが、これ以上健二に出来る事は無い。無い方がいい。

命を絶つ理由。おそらく菊田には仲間なり知られたくない事なりが有ると言う事なのだろう。だが一番不安な事は……

躊躇わず命を捨てる事が出来る。と云う事だった。

自分の命よりも大事な何かがある。それも犯罪の果てにだ。これは誰にとっても脅威な話でしかない。

「何か有ったら連絡するから、一先ず健二君は家に戻った方が良いだろう」との理一の言葉に従う形になり帰宅の途に付いた、と言う訳だ。

居間へと行って見れば皆思い思いの一時を過ごしている、確かに在る平和な光景。いつもの自分の空間が、酷く懐かしく感じてしまふのは少しばかり暗い世界を覗いてしまったからなのだろうか……そんな健二に

「なぐに遠い目してんだよ、健二」

「つと、佐久間……ううん。なんでもないよ」

「そか」

「ああ」

無言の労いと礼。そんなやり取りを眺める皆もまた思う。やはり彼等は親友なのだろうと

そんな光景も長続きはしない。

「さて！ 面子も揃ったし、飯まで、やりますか」

「だな」「いいね」

イキナリ威勢良く立ち上がった面々に「え？ 何何？」と健二が戸惑うのも無理は無い。無いが、また止むを得ない事でも有る。何故なら「皆、健二が戻るの待ってたからな。面子が半端でさ」と言う理由によつてだ。

「面子つて？」

そんな健二も既に聞く必要は無いことに気が付いた。

頼彦・邦彦・克彦・和雄・万助・万作・太助・侘助・直美・了平。立ち尽くす健二とその横に立つ佐久間の目の前には、麻雀卓が三つ置かれていた。既に十人はヤル気満々の勝つ気満々。ソコに佐久間を加えた十一人はまさに健二待ちの状態だったという事らしい。

「さて、噂によれば健二君も可也のモノだつて話だけど」

「アタシに勝とうなんて十年早いんだけど？」

意外に万作は大好きらしい。別に直美に勝つ！ とは言つて居ない健二は苦笑しか無い。だが、まあ

「いいでしょう。皆纏めて叩き伏せますよ」

意外に健二も嫌いではないのだった。

第一回陣内家主催麻雀大会の火蓋はこうして切つて落とされた。

優勝したのが太助だったのが意外と言えば意外なのだろうか。ちなみに、小額とは言え金銭を賭けていた事を悪ガキ四人衆に万理子に密告された為、雁首揃えて二十分のお説教を喰らつたのはあくまでも余談である。

「どうだ？ ソレらしいのは居たか？」

特機では菊田の身边調査が進められて居た。

菊田が誰か、もしくは何かを隠す為に自害した事は明白だ。で有るならば、彼の意思を引き継ぐ者が必ず存在する筈である。特機はその人物の洗い出しに全力を挙げる事と成る。

既に百二十億もの大金は動いているのだ。しかも自害してまで秘密を通すとなると余程の事態を考えなければ成らない。

テロ。

その可能性が、今確かにソコに在った。

だが調べれば調べるほど、菊田正行と云う人物は他者との関係が希薄だった。

「依然進展ありません。恋人や親しい友人など、菊田の友好関係を洗っていますが特にコレと言った人物は見当たりません。彼はあまり人付き合いが上手い方では無かった様ですね」

「世間的に、と言う事ではな」

だが居る筈なのだ。でなければ死ぬ意味が無い。

「はい」

桑田が返事をしているなか、横で通信を受けた柴田の動きが止まった。

「え、ちょ、ソレってどう言う事ですか？」

一体何を動揺しているのだろうか？ そんな彼女へ「どうした！」と本村が聞けば

「え、と……菊田の出身地の……道警からなんです……」

菊田正行は北海道は芽室と言う町の出身だった。が、

「道警がどうした？」意味が分からない。と云う感じの本村へ

「あの……菊田って人間は居ないと」

「なに？」

「ですから、居ないんです……そんな人間」

静まり返る特機本部に、事件の深い影が舞い降りていた。

菊田の出身地を追っていた道警捜査員も驚きを隠せなかったのは
変わらない。こんな事は有る筈が無いのである。

記録は確かに有るのだ。

彼が入学し卒業した小学校も中学校も、高校も大学も。全ての記
録はソコにあり、彼は部活をし、委員に名を連ね、大学ではサーク
ル名簿にも名前が載る。

だが存在しないのだ。

担任の教師も同級生とされる者達も。サークル仲間も部活仲間も
誰一人……菊田正行などと言う人物は見た事も聞いた事も無い。

調べてみればどのクラス写真にも卒業アルバムにも菊田の姿は見
られない。彼の足跡など、北海道の何処にも有りはしなかった。だが

「しかし奴は居たんだぞ！ 北海道の大学を出て新東京銀行へ就職
もう十年も勤務している！ ソレが存在しないなどと」馬鹿な話は
無い。現実に彼は居たのだ。

『分かります。でもコチラにはどうしても菊田の足跡が見付けられ
ないんです。記録に有る彼の本籍地は一面の畑ですよ？ もう蝦夷
開拓時代からずっと畑です』

「しかし……それでは……」

思わず意気を呑む。

「コイツは一体誰なんだ？」

菊田と呼ばれていた人物の写真を、ぼんやりと眺めてしまつたのだ。

そんな一同に、本部へ新たな報が入る。

「部長。菊田の家のパソコンを調べてみましたが、こんなモノが出て来ました」

吉田が言つてモニターに映すと、ソコには二十一桁の数列が在つた。

「暗号、でしょうか？」

「おそらくな」

「ネットのセキュリティとは違うみたいですね」

柴田と吉田。それに桑田はその暗号を見詰めるが自分達には理解が出来ない事は明白だ。ただ以前に健二に聞かされた様に、数字を掛け合わせる類のモノでは無いと云う事は推測できる。

本村も我ながら随分と都合の良い奴だとは思つ。が、使える者が居る以上、ソレを戸惑う必要は無い。ココは最前線なのだから……ソレが有効で有るのなら

「データを長野の陣内へ送れ。健二君にも見て貰う様に」 打てる手は打つべきだ。

「了解」

直ぐに連絡を取る桑田を眺めながら「いつから健二の奴は暗号解読の専門家になつたんだかな」ボヤキも漏れてしまふ。本来なら関わらせて良い話では無い。コレはもう酷く血生臭い話に成つてしまつているのだから。

「だが有効だ。今は止むを得まい」

「分かつちやいますかね……なんか、情けないですね、俺達」

「……言つな。お前も他の手掛かりを捜せ。向こうは陣内に任せて有る」

「了解」

本村にも吉田の言い分は分かる。が、ソレもまた、止むを得ない話なのだった。

いったただきまゝす！

と合唱が聞えたかと思えば、後はもう賑やかな宴の始まりだ。なんと言つても本日の主役は佐久間の様で、一通りの紹介を夏希が例によつて繰り広げるが、佐久間にとってはそれほど知らない訳じゃない。実際、もう今更な感も有る。

「どう？ 覚えた？」の夏希の言葉に「もちろんです」の即答も頷ける。

「でも、こうしてみると、なんか初めて会った気がしなかつたよな」「はは。まあな」

同学年である了平は、やはり直ぐに打ち解けた。それに侘助とは話が合う。なにより佐久間は健二にも言った様に彼よりも社交的に優れていた。

他者に入り込み過ぎずに、離れ過ぎずに……他人との距離感を掴む事を佐久間敬は心得ていた。

確かに結構万能の様だ。

アチコチでワイワイと賑やかな食事。佐久間にとつてもこれ程の大人数での食事は中々に珍しい。自然と笑みも零れてしまう。話題と言えばもつぱら「で？ 学校ではどうなの？ 夏希と健二君は」や「佐久間君もやつぱり東大狙いな訳？」など。中には「彼女居ないの？ なんてー？」と真悟のつつ込みに汗を流す場面も。だ

が、そんな食事もまた楽しく、陣内家の夕食は、賑やかに、されど温かく時を刻んでいくのだった。

食事も終わり男性人は陣内家自慢の天然温泉風呂へと入っていた。あの事件の際に吹き出た温泉はその後もその湯量を維持していた。とくに商売へと繋げる積りも無かった万理子は、その温泉を町へと無償で供給し、長いパイプを通して常に送られている。町では湯を持ち帰る事も、そこかしこに設置された足湯に浸かる事も自由だ。陣内家ではその湯を引き、風呂場を設けたのだった。

「コレが噂の温泉かぁ。しかし、自分ん家に温泉なんて、ガチで豪華だよな」

「うん。ほんと、良いよな」

佐久間と健二もたつぷりと堪能していたが、「ま、健二君は夏希の婿になるらしいからな」「やがてはココも自分ん家って訳だ」「いやいや。豪勢だな」

頼彦達兄弟にからかわれては温泉気分も吹き飛んだものだ。

「で？ どのなの？ 昨日は盛りあがったの？」とは万助だ。もう酒が入っているらしい、中々に気不味い事を聞く。男同士だ！ キリキリ吐けー！ と一同に詰め寄せられた健二が風呂場から逃げ出すまで、その時間は掛からなかった。そんな後には皆の笑い声が木霊していた。

「まったく。ゆっくり風呂にも入れないなんて」

健二としては陣内家の温泉を可也気に入っているので少し肩を落としてしまっが、あのまま風呂に入っていたところで状況は悪化の一途を辿ろうと言うモノだ。ここは引くのが上策だろう。

「ま、良いか」と気分を変えればpipipipi「ん？」携帯が

着信を知らせる。

「あ、理一さん」

その表示は健二の意識を切り替えるのに充分だ。事件はまだ、終わってはいなかったのだから。

「はい」

『あ、健二君、すまないな何度モ』

その声には幾分の申し訳無さを感じる。だが健二も自ら選んで進んでいるのだ。

「いえ、構いません。それで？」今は話を先へ進めなければ成らない。

「実は菊田の家のパソコンから暗号の様なモノが出て来てね。ちょっとソレを見て欲しいんだ」

「暗号、ですか」

健二としても力には成りたいのだが「僕に分かるかは分かりませんが」別に暗号解読のジャンルを得意としている訳ではない。ただ暗号の解読には数学が用いられるし、その思考の閃きが他人よりも少しだけ秀でていただけだ。何処までの事が出来るのか、本当の所は健二自身にも分かつては居ないのだった。

「構わないよ。君に成功する義務は無いから」せめて重荷は軽くしたい。そんな理一の気遣いを感じる事が出来る。そしてそう感じる事が出来るなら

「分かりました。出来るだけやってみますから送っておいて下さい」健二も全力を尽くそうと思うのだった。

そして電話を切れば直ぐにpirrorrorrorroとメールが入る。既に準備は有ったと言う事か。

思わず苦笑しながらもメールを開いた健二は、そのメールを脳裏に刻む。

「コレが」

4 1 6 1 5 1 7 2 0 1 8 1 2 1 3 1 7 3 7 1 9

その数字は健二に新たな戦いを予感させるのだった。

「暗号、か」

本村の下へ更なる報が届いたのは夜も更けた頃だ。

「部長。コレ、見てください」

吉田が持つて来たモノは「写真か？」数枚の写真だった。

「菊田のデジカメに有りました。画像を消していましたが復元出来た写真が何枚か……コレ、どう思います？」

そこには一台の車を色々な場所と角度で撮影したモノだ。おそらく同じ場所で二・三枚は撮っているだろう。

「何処かの山、か？」

「はい。でもきつと撮りたいのは車じゃなくて」

「ああ……下見、だな」

「はい」

その写真の全てには車が写っている。だがそれだけじゃない。

何処かの防犯カメラ・何処かの扉・何処かの窓。

必ず写り込んでいるソレ等こそが写真の本命なのだろう。他にも写り込んでいる通行人を見れば、観光客や車の撮影を装ったのだろうと推測された。おそらくはこの場所が菊田の狙いだと確信する。

「この写真を分析、場所を付きとめろ」

「了解」

「柴田。陣内にも送ってやれ」

「はい」

暗号の他にもう一つ手掛かりを得た。後は追うだけだ。なんとしても。

そんな空気に支配された本部に「っあ！ すいません、チョットと声上がる。ん？ と見れば桑田が写真を見ながら考え事をしてる。

「どうした？ 桑田」

「この場所知ってるの？ 美也子」

本村と柴田の声に「いえ、そうじゃなくて……あの、吉田さん」「ん？」

「菊田の車って確かマジエスタって書いてあったと思うんですけど記憶を辿りながらデータを探す。

「ああ、確か白のマジェっ！」ソコで皆が気が付く。

その写真は白のプリウスだ。つまり……

「つまり、もう一人居た」

本村の言葉を肯定するかの様に、その写真のプリウスはその姿を鮮明に現していたのだった。

九の陣

夜も更け日付も変わる頃、各々の部屋で一日の疲れを噛み締め眠りに落ちる陣内家に在って、健二は独りメールとレポート用紙を前に部屋に置かれた小さなテーブルの前で座る。

「う〜ん……どうにも……読めないな」

暗号には可也手こずっていた。

元々暗号解読が専門な訳ではない。数学の範囲内で出来る範囲で協力していたに過ぎない健二だったが、最近はどうにも暗号解読専門家の様な扱いを受けてしまう。数学や物理、コンピューターの知識が他人よりは若干有ると自分でも思う。だが、だからと言って都合良く何でも出来る訳じゃない。だが

「ま、泣き言も言えないか」現状、出来る可能性が有る以上、自分はソレに向うだろう。

確かにソコに、何かが有るのだから。

「……………！ん……………健二？」

「あ、ゴメン、起こした？」

同じ部屋に寝ている佐久間が不意に声を掛けるが「ぐうが

……………ああ「直ぐに寝た様だ。万助達に可也の酒を飲まされたらしい。風呂上りの一杯など飲むモノでは無いと言う良い例だ。飲むならトコトン飲め！と言う事らしい。酒が得意じゃ無い健二の分も佐久間が多いに飲まされた様子だ。

「ったく、いい気なモンだよなあ」

思わず笑みが漏れる。彼がこうして呑気に寝ている。それだけで世界は一先ず平和と言う事だろう。

「さて」気合を入れ直す。

「疑似乱数でも無いしRSAでも無い……そんなに面倒臭いモンじゃ無いと思うんだけどなあ……機械式って事は無いし……41615……違うな。4 1? 16……っ！」

思わず身を乗り出す。

「多表式っ！ コレってヴィジュネルだ」

その数列から健二は暗号の種類を予測した。鍵と方陣を使用して用いられる多表式換字暗号のヴィジュネル暗号と推測する。暗号事態は難しい問題じゃない。様は鍵を見つければ良い。鍵の文字数は反復した文字の間隔がヒントになるがソレを見れば「 六……暗号は文字だから」健二の頭の中でバラバラのパズルが組みあがっていく。

数式でも解く方法は有るがコレだけのヒントが有れば難く無い。程なく

「 つ！ 解けた！」

【THE WAR BEGINS】

「戦争は始まっている？」健二は解答に辿り着いた。

「でも」先はまだ見えない。何故なら「何の暗号だろ？ コレ」

その暗号を打ち込む先が、未だ見えては居なかったのだった。

特機では新たな動きが有った。

「退いた退いた！」とけたたましい吉井と菊間に「ちょ！ どうし、何ですかコレ」柴田も思わず声を上げる。

二人が持ち込んだのは大量のビデオテープだった。

「菊田のマンション、来客用の駐車場無いんだよ」

「は？」菊間の言葉は簡潔に過ぎる。

「奴の車は自分の駐車場に有りました。他の住人もそうなんですけど、客が来ると大抵は近所のパチンコ屋に無断で止めてるらしいですね。おそらく」

吉井の補足でソレは伝わる。

「このプリウスも同じって事か」

「ま、菊田の家に来てればって事ですが」その場合、やはりこの駐車場に駐車していたら。このテープはパチンコ店の防犯カメラの映像だった。

「それにしても今時ビデオって」可也のアナログと言って良い。コレでは一つ一つ見ていくしか無い。

「止むを得まい。全員で手分けして当たれ」

本村の言葉に半分ゲンナリしながらも、ソコに手掛かりが有る可能性が有れば是非も無い。

了解！ と皆一斉にビデオを手に取り自分のデスクへと駆け込むが

「どうぞ」

「ん？」

桑田の差し出したテープを不思議に見詰める本村は、まさかとは思った。が

「部長の分ですから」

可愛い笑顔の桑田に「う、うむ」返事に困る本村だった。

健二は菊田のハードディスクのコピーから彼がアクセスしていたサイトを一つずつ調べていた。

動画・ニュース・ブログ・公共機関や趣味サイト。おそらく別に見た訳では無いだろう。ただクリックしてしまっただけだと思う。そのサイトやバナーも多く存在する。頻繁にアクセスしていたサイトは最初に調べたが問題は無い。或いは完全に履歴を消去したのだろうか？ とも思うが、何処まで完全に消せるのかは疑問の残る所だろうか？ どうしたって足跡位は残ると思うんだけどなあ……これも違う」

また、外れた。何かのアニメのサイトだろう。本当に「何の脈絡も無いな」雲を掴む話だった。

そんな時、「ん？」と、あるサイトが目止まる。だがそれは「オークション？ でもコレ、女性向けの」レディース向けのオークションサイトだった。

偶々入っただけだろうと思いき消そうとするが「……まさか、ね」
どうしても気に成る。

「ログイン……あ、パスか」パスワードを入れる様に表示され

【THE WAR BEGINS】

打ち込んでみれば

*****認証中*****

「え？ 嘘」

思わず目を剥くが

*****ようこそ。M/Kさん*****

健二は解答に辿り着いたのだった。

やがて健二はそのサイトを巡り

「……………い……………なんでっ！」

現実を見たのだった……………

「有りましたっ！！！」

声が上がった。すかさずモニターに映し出されたのは一台の車に乗る誰かと菊田の姿だった。

白いプリウスに乗る菊田の姿は、まさに望んだ映像そのものだった。

「拡大出来るか？」

「待って下さい……………出ます」

言葉を追って拡大された画面には「ナンバー照合！ 急げ」くつきりと車のナンバープレートが映し出されていた。

「っ！ 出ました！ 深沢忠彦四十才。住所は渋谷ですっ」

車の所有者が割れた。その深沢は犯行現場の下見に同行した人物に間違いは無いだろうと確信する。それが菊田が自害してまで守ろうとした男ならば、ソイツが実行犯と言う事に成る。

「吉田！ 相沢を連れてけ」

「了解っ！ 行くぞ良則！」

「はい！」

吉田と相沢が本部を出ようとした時、ソレは訪れる事になる。

「っ！ はい、コチラ特機ほ、陣内さん？」

ソレは長野の理一からの通信だった。思わず皆足を止める。彼が連絡を寄越したと言う事は「……健二君から連絡だ……暗号を、解いたそうだよ」

また一つ、捜査は前に進んだと言う事だ。

『全員、居るか？』

「？ はい、もちろんです。あ、コチラでも進展が。菊田の仲間を思われる人物をヒットしました。これから吉田さ『全員、居るんだな』？ 陣内さん？」

静まる。どこか、理一の様子は変だ。

「如何したんですか？ 陣内さん。なんか」変だ。そう吉井が言う前に

『暗号はパスワードだそうだ。菊田の使ってた……アドレスとパスワードを送る』

「？ はい」

怪訝に思う間も無く、ソレは理一から送られた。

「取り合えずアクセスしてみる」

疑問は後回しだ。本村は桑田に命じ「はい」とキーを叩く。

「コレが、パスワード？」

「どうした桑田？」

何かの意味が有るのか不審な桑田だったが「いえ。ログインします……繋がります」

サイトに入った。

特機の巨大モニターに、ソレは映し出されたのだった。

その、悪夢が

「な に？」

「おい」
「ちよ、待てよ」

鮮明に姿を見せたのだった。

ソコにはあらゆるモノが有った。

「ガバメント……手榴弾パイナップル……M60」
吉井の言葉が震える。

「おい、戦車つてマジか？」
菊間は目を疑う。

「傭兵？ 殺し一人三千ドルつて……そんな」
柴田は常識を疑う。

ソコにはあらゆるモノが有った。

銃・ライフル・戦車・爆弾・兵士。

兵隊訓練や犯罪プラン。コンピューターウイルスにハッキングサービス。中には毒ガス兵器までもがソコに名を連ね……

「闇の市場ブラックマーケットか」

売り買いされていた。

「兵器のネット販売なんて聞いた事無いですよ」

吉田の言葉も最もだが「だが不可能じゃない。キチンとした組織が在って、世界中にブツを供給出来るなら、ソレは不可能な話じゃない。むしろ」

多くのユーザーを持つと言う意味では理想的だった。

アフガニスタンやアンゴラじゃない。仮に日本で武器を手にしたのなら？ 何処で買えば良い？ スーパーマーケットでは手に入ら

ない欲しい物を、ネットで注文する事が出来る。
ソレは需要に対する供給の一つの解答だろう。

そして

「ちょ……これって」

「待てよおい」

【HUMAN（人間）】

入れば【MAN^男】【WOMAN^女】そして【BOY^{男の子}】【GIRL^{女の子}】

「……………どうして……………」

桑田の中で（駄目っ！）と叫ぶ自分が居る。だが自分の指が【B^男 OY】をクリックすれば、ソコには子供達の写真が並び

「……………止めてよ……………もう……………やめ」

内の一人をクリックすれば、そのあどけない笑顔の下に有る

【SOLD OUT^{売り切れ}】

ソレはたったの四千ドルだった。

「つぎけんなあっ！！」

誰が叫んだのか分からない。誰かが机のモノを床にばら撒いたのが分かる。キーボードを叩き割ったのは誰だろう？ 吐き気を感じたのは自分？ 彼女？

静かな混沌はただソコに満ちる。

【PART^{部品}】……………だが入れば

【HEART^{心臓}】……………【LIVER^{肝臓}】

……………【KIDNEY^{腎臓}】

いつから、人はソレを部品と呼ぶ様になったのだろうか……

【CORNEA^{角膜}】と有る。ソコに映る少女の左目は包帯で隠れて見えない。だからこそ【RIGHT^右】なのだろう。

左が売られていない理由も、その娘が笑顔の理由も、誰も考えたことは無かった……

特機の全てが思い知る悪夢。ソレを先んじて受けた長野県警もまた暗き混沌の中へ引き込まれ……

「すまないっ……………健二君っ」

心に重りを抱えたまま、理一はただ届かぬ言葉を吐くだけだった。

「た　なた」

何処かで声がする。意外と近くで。例えば自分のすぐ

「あなた」

「ん？　なんだあ？」

典子に起こされた頼彦が時計を見れば時刻は二時半を少し回った所。まだ辺りは暗く「なんだよ、こんな時間に」と寝ぼけてしまう。真緒と真悟は気持ち良さそうに寝息を立てており、自分も再び眠りに付こうと思うが「ちょ、あなた」典子がさせてはくれない。

「んああ、ああもう、何？」取り合えず話だけは聞こうかと顔を

見れば、彼女の表情は真剣だった。元々救急救命士の頼彦だ。覚醒しようと思えばソレは別に難しい事じゃない。

「どうした？」

妻の表情に深刻なモノを感じて身を起こした頼彦に告げられた言葉は

「それが……ちょっと様子が……」

「あん？」

意味の分からない言葉だった。

ソコは陣内家の庭。皆が寝ている部屋とは反対側の縁側から望める朝顔の列の前に

「うぶはっ！」

ビンビールをラッパ飲みしている健二が、ソコに居た。

既に三本、健二の足元に空のビンが転がっている。

健二は酒に強くないし、ビールは得意ではない。勢い良く飲んでほこみ上げる酒が口から飛び出す。周囲も自分も酒に汚れるが

「んっ！ぶ」とまたビンを煽る。

「ぶはっ！」と飲み干し、五本目を取りに向う健二の足取りはふら付いている。が、ビールを

「随分と景気が良いね？ 健二君」

頼彦に先に取りられた。

「ああ、頼彦さん……すいません。僕、起こしちゃいましたか？」

にへら、と笑う健二の、

「……いや。俺も寝付けなくてな」
目は笑ってはいなかった。

頼彦は栓を開けたビールを健二に渡し、自分も一本口を開け飲み出す。

健二は、ぼろっとソレを見るが、やはり乱暴にビンを口に飲み出すのだった。

「一つ、聞いて良いかな？ 健二君」その声は穏やかで、

「ん〜？ あい。どうぞ〜」

「どうして、酒を楽しまないんだい？」

厳しかった。

背を向けたまま動きを止めた健二に構う事無く、頼彦はもう一口ビールを飲み

「ウチは昔から酒好きの家系でね。兄弟も親父も爺ちゃんも婆ちゃんも、皆酒が好きなんだ。だから、酒の飲み方は色々見てきた」

「……………」ソコに栄が居た事が、健二を少しだけ現実に引き戻した。

「俺が初めて現場で人の死に直面した時な？ ……まあ荒れたもんさ。いや、アレはもう暴れたかな？」

俺も若かったと笑いながらもう一口。

「でも……………なんでかなあ？ ……その時の俺……………今の健二君を見ると思い出すんだよ」

ビクン。と動く。何かが、動く。

「なあ健二君……………なんでかなあ」

「……………」

答えるでも無い。続けるでも無い。ただ静かに、頼彦は酒を口に運ぶ。

どれ位経ったのだろう。ボトンツ、と落としたビンもそのままに、健二はただ、空を見上げる。

「……………頼彦さん……………」
どうにか聞き取れた。

「ん？」

今はただ、聞けば良いのだろうと感じる。そして

「……………人間て……………酷い事しますねえ……………」

肩を震わせる後姿は、どこかそれ以上、頼彦が近付くのを拒絶している様に思う。だが、ソレを良しとしては駄目だと知る。

現実の非情に憤慨した嘗ての自分が居た。その自分に彼が重なるのなら

「……………健二君……………」

「ホント……………なんでかなあ……………」

そういう酒も時には必要だと云う事だ。

新しいビンを開け健二に渡す。「すいません」と言い酒を煽る健二を哀しく見詰めながら、きつと健二はこれ以上、語らない事を悟る。

こんな酒も有る。だが健二の年でこの酒を飲むのは

「しんどいな……………やつぱ……………」

まだ、早かった筈だと噛み締める。

縁側の影でソレを見る典子は数本のビールをその傍へ置き、頼彦と健二を残し部屋へと戻ったのだった。

そうして人の闇がもたらした悪夢と混沌は

「 現時刻を持って、本件をレベル5に認定つ。特機全捜査員は拳銃を所持。その限定を解除する」加速する。

最高レベルの危機認定。特機捜査官への限定解除は警告無しでの発砲を許可するものであり、犯人に対し生死を問わない超法規措置だ。

モニターにはその画像が大きく映し出されていた。菊田のユーザページに有る、その購入履歴

「内調に緊急連絡。政府による非常事態宣言の検討を要請」

「はい」

事態は風雲急を告げる。これはもう事件ではない。

「概要はなんと？」

念を押す柴田に本村は今一度モニターを睨みつける。

「そんなもの、決まってる」

菊田は百二十億を使っていた。競りでは無く、希望落札価格百二十億を一撃で落札し、ソレを購入する為に、金を使った。

【SADM】

通称、超小型核爆弾とも言われるアメリカ合衆国が開発した超小型の核兵器が、菊田の購入履歴には残されていた。
事態は

「核爆弾を所持していると見られる正体不明のテロリストが国内に潜伏している模様だと……伝える」

もう、戦争だった……

十の陣

『出来んよ、そんな事。認められる訳がなかるう』

『大体その情報、一体何処まで確かなのかね』

『核爆弾などと馬鹿馬鹿しい』

『それでは犯人も助からないだらう？』

『要求は？ 第一、ソレが本当に国内に持ち込まれたと言う証拠でも有るのかね』

「しかし」

特機本部の一室で、複数のモニターを前に拳を握る本村が居た。内閣調査室長の権の下で上層部との緊急会議が執り行なわれたが、ソコに本村の望んだ姿は無かった。

『非常事態宣言を発令する必要は無い。これは君達が処理すべき事件だらう』

ソレがこの場に姿を現した高官の一致した見解だった。敵は世界中にネットワークを持つ組織から核兵器を買った者達だ。成功の為には自殺も厭わない覚悟を持って事に臨んでいる。

「別に戒厳令を敷いて下さいと言っているのでは有りません。この国難に際し、国としての断固たる行動が必要だと申し上げているだけです」

情報や権限の分離統制を排し、今はこの事態を乗り切る為に全ての力を。ただソレを望む。でなければ

「既にテロリストは行動を始めているのです。我々は、なんとして

もこの戦いに勝利しなければなりません。これは戦争なのです。我々は『勝利しなければならぬのは君だよ、本村君』　長官！」
彼等の意思は変わる事は無い。ソレは彼らにとって真実ですら有る。何故なら

『コレは君が処理すべき事件だよ？　本村君』　コレは彼の事件であり、自分達の戦争では無いのだから……

『戦争などと仰々しい。コレは事件だよ本村君。しかも死亡者は犯人グループが一人ではないか』

『しかし爆弾が持ち込まれた場合も想定せねば成らんでしょう』

『第一、コレは公安の管轄でしょう？　ソチラでお願いしますよ』

『ウチの事件では有りませんよ。警視庁さんの管轄でしょう』

『困るよ。警察庁での一斉が妥当じゃないかな』

『冗談だろう？　事件も起きてないのに何故管轄を離れるのかね？』

『田辺さん確か東大でしたよね。ここらで点数、欲しいんじゃないんですか？　早大闊でしょ？　そちら』

『呑めませんよ、ウチは』

既に彼等には彼等の戦いが有り、本村はただ

「……捜査が有りますのでコレで……」

治安機構のトップ達との会合を後に部屋を出たのだった。ただ

「戦争はもう……始まっているんですよ……」

言葉を残して。

まだ朝も明け切っては居ない頃、吉田と相沢は深沢のマンション、その部屋の前に居た。

「遅せよ」と吉田は小声で文句を言うが

「時間考えてくださいよ。取り合えず管理人から……借りてきました」その手にはしっかりとドアの合鍵が見える。

音を立てない様にユツクリと鍵を開ければ、その横では既に吉田は銃を構えている。開け切り自分も銃を持てば 始まる。

「ソレはサイン。(三で開ける。お前は援護)そのサインに」 (了解。二・一……と応え)

スサツ！ と開ける。

「！」

抵抗に注意しながら部屋を進む。其々に、個別に部屋を進む……その緊張感のリビング迄辿り着いた吉田の耳に「先輩っ！！」相沢の声が大きく響く。

「っ良則！」駆け付けた吉田が見たモノは、ある部屋の開け放たれたドアと中の相沢。そして……一つの死体だった。深沢忠彦の姿をした

モノ言わぬ死体だった。

「……少なくとも二日以上ですね」深沢の首下に手を当てて言う相沢に「本部に連絡だ」と指示を飛ばし、自分は今一度死体を見る。

「背中から二発……オマケで頭を一発か」

現状分析に余念は無い。背後から椅子に座った桑田の背を撃った

のだろう。二発、胸元のと真ん中を貫通していた。うつ伏せに倒れている深沢の頭を最後に。死体を起こせばキーボードも貫通していた。

本部に報告を終えた相沢は

「プロですかね？」感想を言う。自分はそう思うと言うだけだ。彼は吉田の眼力を尊敬している。コレは彼にとっての答え合わせなのだ。

「どうかな……だが銃の扱いは慣れてそうだ。背後から心臓に二発、確実に殺してる。なのに死体をこのままっるのがどうにもな」

「詰めが甘いと？」

「もしくはわざとか……どっちにしろ」

吉田の視線はもう深沢だったモノには無く、その先にはパソコンが在った。

「ソイツはコッチの方に用が有ったみてえだな」

数発の銃撃を浴び大破したパソコンがソコには在ったのだった。

朝、健二は激しい頭痛と共に目を覚ます事に成った。

「うおっ！……つか、健二？ お前昨日って酒飲んだっけ？」

佐久間の疑問も尤もだ。健二が酒を飲んでいたのはずっと後の時間で、吞まれ眠りについたのは空が明るくなる少し前の話だ。佐久間がソレを知る由も無い。だが健二もまた

「~~~~ あれ？ なんて僕こんなに~~~~ 頭が割れる~~~~」

夜の記憶は殆んど無かった。典子が予め二日酔いの薬を用意していたから、なんとか復活する事は出来そうだった。

「はい。健二君」

「…… あ、すいませ？ 典子さん、なんで？」

自分の二日酔いを予期していたかの様な彼女の振る舞いに若干の不思議を覚える健二だったが「健二っ！ 二日酔いってどう言う事っ！」 …… 考える時間は無さそうだった。

「ちょよ！ 僕にもさっぱり……あれ？ でもなんか途中迄……あ」

飲んでからは分からない。呑まれてからは分からない。だが……飲んだ理由は

「ちよつと……顔、洗ってきますね」

「大体夜中に一人でお酒なん！ ……健二？」

どうかしたのだろうか？ と追いかけてよつとする夏希を万理子が止める。

「台所、手伝っておくれでないかい？ 夏希」

「万理子おばさん？ うん、良いけど」

家長の万理子の頼みでも有る。健二の事は自分の思い過ぎしも充分に考えられる以上、どちらを優先するかは明白だ。台所へ向う夏希の後姿を見詰め、健二の去った方に視線を移す。事情は知らない……だが状況は聞いた万理子は、今はただ、健二にエールを送るのだった。

「頑張りなさい、健二君……」

バシャ！ と庭で顔に冷たい水を掛ける。酒を飲んだ理由は思い出せた。

知らない世界と、知りたくも無い世界が在った。ただ知らなかつ

たと言っただけで、おそらく以前から在ったであろう世界の現実を昨夜は知った。

理不尽。

ソレを唱えて喚く事は簡単だろう。だが今はソレを押し殺しても進まなければならない事態が有る事を、健二は更に知っている。

「……………特殊核爆破資材、か……………」

知識は有った。だがソレを間近に感じる事は無かった。冷戦の終結と共に姿を消してから既に二十年を越えた今、忘れ去られた筈の悪夢の欠片が依然として世界に存在している事を改めて実感する。そして場合によっては、ソレを体感する可能性すら有る。

「きつと、まだ有る」

自分に出来る事はまだ有る筈だ、そう確信する。今は捜査の段階だろう。素人の高校生の自分の出る幕は無いだろう。ならば自分は備えるべきだ……………彼等から要請があつた時に、持てる全てで応える為に、心の構えを

「っヨシっ!」

気合を入れ、今は日常に戻る。やがて来る非日常を……………迎え撃つ為に。

特機では深沢の部屋から押収されたモノの分析が急ピッチで進められていた。

現状、ココが尤も真相に近い場所とも思える。

「どうだ？」本村の声も未明の会議を受けて張り詰められたモノを感じる。

彼が戻り「現状維持だそうだ。要するに我々が全力を尽くすしかない」と言えば、部下の反応は落胆と反骨の双方同時と言った所かだがどちらにしても意気は高い。

「犯行に使われた銃はベレッタM9ですね。9パラ弾が九発、前は有りません」

「壊されたパソコンの復旧は難しいみたい。今も鑑識が当たってます」

桑田・柴田両名の返事は可も無いが不可も無い。だが何も進展していないのも変化は無い。そこへ

「部長！」

「なんだ？」

吉井が持つて来たのは、また写真だった。

「こいつもか」

「ですね。ターゲットは同じでしょうか」

プリウスが写り込んだ写真。ソコにはやはり防犯カメラや非常口が共に写り込んでいる。流から察するにどちらを撮りたかったのかは明白だった。

「菊田、深沢……まだ居るって事だな」

「ですね。じゃなきゃ菊田が死ぬ意味が無い」

手掛かりが見付っては消えていく。そんな先の見えない捜査の中で、何時も自分達は後手を踏んでいる。どうすれば……そう考えると、ふ、と先手を打てた時を思い出す。

「あの、例えばコレで犯人の目的って分かっていたりしないんでしょうか？」

「ん？ コレってなに？」

桑田の言っている意味が分からない。

「だからこの写真ですよ。例えば深沢の家から行ける場所で、とか……写真の共通項とかって……ほら！ 健二君とかなら何か分かるんじゃないかと」

OZにウィルスを撒いた香坂を捕らえる為に健二は彼の所在地を予測した。今と状況は違うが、それでも自分達には分からなかった犯人を突き止めたのは彼の功が大きい事実だ。この現状を打破出来る可能性も、彼になら見出せるのでは無いか？ と考えてしまう。「いくらなんでもソコ迄便利じゃないだろう」

「でも」吉井の否定に確固たる反論は出来ないが、ならば「他に手掛かりが無いんですから、聞いてみるだけでも」試す価値は有るとも確信する。

「……陣内に連絡を」

「部長？」

使えるモノは使うと決めた。今は動く事を優先する。彼を使う事への悔恨は、後で幾らでも感じれば良いと自らに念押し。

「健二君に、意見を聞いて貰ってくれ」

「部長……はい。分かりました」

本村と共に、他の者達もまた砂を噛む。今はただ、進むしかないのだから。

朝食を済ませ明日の準備に慌しさを見せ始めた陣内家。とは言っても身内と親しい者達だけの法要だ。住職や食事の手配等で忙しい思いをするのは一部の者だろう。特に役に立つ事も無い男性陣や子

供達は、相も変わらず暇を持て余す。

ココに在る平和を、遠くに感じる健二が居る。あのデータに有った爆弾が何処かで爆発したならば、この日常は一変すると確信する。「どうしたんだ？ まだ二日酔いか？」

「佐久間……いや、もう大分良いよ」

「しっかし、先輩んちって何時もこんな盛り上がるのか？」

嬉しそうに話す佐久間にどこかホツとするモノを感じる。彼は随分とこの家族を気に入った様だ。

「ま、人数が多いから。正月とかも賑やかだったよ？」

「へへ。大変だな、お前も」

「佐久間……」

この賑やかな家族をまるで自分の家族の様に話す健二に、若干の憧れを抱いてしまうのは致し方無い話だろう。そんな感情すら、自分で理解してしまう事が恨めしくも思う。もっと素直に羨ましいと言えたら、自分は意外と不器用なのだ、と自嘲も漏れる。そんな佐久間に

「良かったら佐久間も今年はい」 pipipipipipi

と健二の言葉を遮ったのは「っ！ ……ゴメン」その場を後にする。

「健二？」

不思議な顔を見せる佐久間を残し、健二は独り

「健二です」

『……すまない。君に……見て欲しいモノが有るんだ』 理一からの電話を受けるのだった。

場所を健二にあてがわれた部屋に移しパソコンを起動する。そうして繋がった画面に見えるのは一枚の画像だった。

「コレが？」

『ああ。菊田の家、ソレに共犯者と見られる深沢の家に有った画像

だ」

「共犯者？」

自分の知らない事が増えていた。そうして健二は凡その話を理一から聞く事になった。自分が眠っている間に……

「……………その、深沢って人は……………」

『死後二日経ってたよ』

「……………そうですか……………」

また人が死んでいた。

『君が受け止める事じゃ無いよ。深沢の事も……………昨夜の事もね』

「……………はい」

今は立ち止まる時では無いと言う事だ。だからこそ先を促す。

『それで？ その画像から場所のヒントだけでも掴めないかな？

正直コッチは手詰まり状態だね。深沢のパソコンのデータが修復出来ればそれなりに手掛かりも掴めると思うんだが、どうにも期待薄だね』

「はい……………でも」

正直、この画像だけでは何も得られるモノは何も無いと思う。二枚目を見ても三枚目を見ても、確かに犯人の取りたい物は車では無く、その施設の画像なのだろう。進入経路や進入口の下調べと想像は付く。だが他に手掛かりと思えるモノは何も写り込んではいないあたり、犯人も万が一の事を考えて行動していると言う事だ。仮にソレが見付ったとしても偽装の疑いも消せはしない。

「これだけじゃあ」

そう健二が言いながら進めた四枚目は……………健二の指を止めた。

「あれ？ コレって」言いながら画面を戻せば「あ、同じだ」一枚目の画像と同じだった。ただし同じとは言ってもソレは車と場所だけで、角度は変わっていたが。

『ああ。どうやら色々な角度から撮ったみたいだね。一箇所に付き大体三枚位は撮ってあるみたいだな』

「うん……」数枚進める。小さくして並べてみれば、確かに何枚かづつ撮影されている。

「どうにか「いけるんじゃないか、健二」っ！ 佐久間」

背後に立った佐久間に気が付く。佐久間は既に『やあ佐久間君。

すまないがコレは内密に頼むよ』「ども！ 了解ですよ」と理一と話している。既に健二の要請で何度か関わっている佐久間だ。理一としても今は藁わらにも縋りたい心境と言う事だ。だが気になるのは佐久間の発言。

『ところで佐久間君。いけるってどう云う意味かな』

ソコにとっかかりを見た気がした。

「影ですよ。全部の写真に写ってますから」

『影？』

「はい。影ですけど？」

理一の顔に怪訝なモノが浮かぶ。佐久間の中では説明するまでも無い事なのだろう。理一の疑問が分からない佐久間に替わって健二が簡潔に答える事になる。

「え、っと。写真に写っている影から、その場所を調べる方法があるんです」

『影から？ 出来るのか、そんな事が』

「はい」

県警の中だろう。健二と佐久間の言葉に少なく無い声が混じってくるが、ソレに応える必要は感じない。

「球面天文学と言いまして、天体を利用して地上での位置を特定する方法なんです。代表的なところで言うと、日時計などに使われる数学を用いた天文学の一種です。この画像に有る時間は正確ですか？」

『あ！ ああ。押収したデジカメの時刻は合っていたから、写っている時刻も正確の筈だ』

「この車はなんて車ですか？」コレには佐久間が

「プリウスだろ？ メーカーのホームページにデータが有るからサイズは問題ないよ」

「そっか。後は……影の大きさか」

「この白線使えないか？ 大体太さは一緒だろ？ 殆んど全部に写ってるし」

「でもソレだとコンマ以下は厳し『健二君！』っと、はい？」

二人で話し出した健二と佐久間に割って入る。このままだと本当に置いていかれそうだ。

『すまないが俺には話が見えないんだけど』

「あ、すいません。え、っとですね。この計算に必要なのは、撮影した時間や写っている物の大きさ、それに影の大きさ。後はそう云った写真が何枚か有れば可能なんで、一通り必要なモノは揃ってますね。後は影の大きさと時刻を組み込んで方程式を組み立てるんです。そうすると撮影時の太陽の高度が出ます。そうして複数の写真から出た情報を数学的に重ね合わせると、その場所の経度と緯度が出るんです」

『凄いな……それで？ ソレは時間が掛かるのかい？』

今は時間が惜しい。その思いは健二にも充分に分かる。

「平気ですよ」

『！ 佐久間君』

その顔には自信が見える。

「この前部活で日時計を造りましたから。俺のパソコンにアルゴリズムは残ってます。まあ細かい計算は健二が居ますから問題無いですよ」

「ちょ！ 簡単に言わないでよ」

『そっか。すまんが頼むよ二人共』

「はい」

健二は言われるまでも無く。佐久間は今さっき耳にした情報では、既に誰かが死んでいる事態になっている事は分かった。ならば健二

に協力するのはやぶさかでは無い。ソレ位の正義感を持ち合わせている積りだ。

健二は早速ノートとパソコンを弄り出した。佐久間も自分のパソコンを起動させ……聞く。

「で？」

「ん？」

画面を見ながら、会話を進める。手は、止めては成らないのだから。

「全部言えとは言わないけどさ。俺が何をやってるのか？ って事は教えて貰って良いか？」

「」

何処まで話せば良いのだろう。理一が知ったと言う事は事件の事を隠す必要は無いのだろうと思う。それ位の信頼関係は有ると言う事だろう。だが……昨夜知ったあの現実を、知らせる必要は……分からない。

「ま、出来ればでいいよ」

「……多分、この場所に……爆弾が仕掛けられる可能性が高いって事だと思う」

「爆弾？」

「うん……爆弾」

ソレならば理解出来た。理一が動く訳も、健二が動く訳も。だとすれば自分も協力を惜しむ気は無い。一層、作業を進める。健二と佐久間で手分けして数枚の画像を解析していく。

「にしても、一体何を吹き飛ばす積りなんだかな」

判明すれば分かるが、気にも成る。そんな好奇心が……日常を凍らせる。

「……僕等の日常を……全部吹き飛ばす積りなんだよ、きっと」

「は？　おいおい、幾らなんでもソレは」

「爆弾は……特殊な爆弾だから」

「え？　ちよ、健二、お前特殊って……よせよ」思わず止まってしまふ。そんな佐久間敬の日常を、小磯健二の言葉は

「そっだよ……その特殊な爆弾……だよ、佐久間」

非日常へと塗り替えたのだった

十一の陣

「……………」
黙々と計算を続ける健二をどこか呆然と眺めてしまう。特殊な爆弾……その意図とする所は

核

「どうして……」そう聞かずには居られない。だがソレを聞いた所で答えてくれる人物など居はしないのも理解していた。ソレは只一人、犯人以外には在り得ないのだから。

「分からないよ、今はね。でも……だからこそ」

「健二……」顔も向けずに語る健二はその指を早める。この先に、解答を持つ者は居るのだから。

止まる自分を他所に動く健二を眺める。今、初めて体感する。

(コレが……健二の世界、か)

踏み入れない積りだった。その入り口で、立ち竦む自分が居る。思わず踵を返したくなる。そんな佐久間の耳に

「なにしてんの？ 二人して」

「っ！ 夏希さん」

夏希がひよっこり顔を出した。部屋中に散らばった紙と難解な英数記を映しているパソコン。コレでは疑問を持たない方が不思議だ。

「あああ、とですね。これはその、え」と

「ん？ どうしたの健二」

「いいええ。僕は別に」

「そう？　で？　で？　コレ何？」

「だからこではだすね「雑誌の懸賞ですよ」！　佐久間」

「？　懸賞？」

いつの間にか、笑顔で割って入る佐久間が居た。

「部活の課題です。この写真から場所を割り出せって問題が専門誌に出てましたから、皆で解いて応募しておく事に。正解者には抽選で賞金も出ますから」

「へ〜」

感心する夏希を他所に自分もパソコンへと向う。その計算を再開する為に。

「じゃあ邪魔しちゃ悪いわね。皆で近所の畑にスイカでも貰いに行こうかと思っただけ」

外では「夏希姉ちゃんまだ〜」と叫ぶ子供達の声が聞こえる。

「すいません。コレ、今日が締め切りなんで」

「ああ、いいよ。うん。二人共頑張ってるね」

笑顔で言い去る夏希に「「はい」」と答え再び計算に。佐久間はただ

「……………わりい……………ガチでビビった……………」思いを吐き出す。

「ゴメン」

今はただ巻き込んでしまった事への罪の意識が有る。だが「でもだからこそ、今頑張らなきゃ」「健二の目には迷いは無い。今成すべき事を誤る事は出来ない。ソレこそが最悪の事態へと繋がるのだから。」

「ああ。そうだな」

二人は黙々と、その作業を続けるのだった。

車の中で電話を掛けているのは

「ええ。コチラの問題は解決したと思って良いでしょう。はい。プログラムを組んだ犯人は死亡したと聞きましたが。はい」
OZの磯貝だった。

昨日に有った事件の顛末を今朝報告していた。彼らにとっての懸案事項の解決を。

「例のウイルスが出回る事はもう無いでしょう。え？ それ
が過去のデータから犯人の勤め先を割り出した様で。はい。それで検挙に。いえ、違います。警察では無くて例のラブマシーンや九月の。ええそうです。その小磯健二君が。私にはよく分かりませんが、なんでもブラックホールを測定する時に使う数式を応用したとか。え？ いや、しかし。はい。そういう事でしたら。分かりました。それでは、失礼致します」

pi！ と電話を切つては「はあ。まったく急なんだからなあ。少しは都合ってモノを考えて欲しいもんだよ。コレだから偉い人って奴は」ブツブツを文句を言いながら、車のハンドルを切ったのだ。

今しがた変更された、目的地へ向けて……

「っと！ 出来た。そっちは？」

自分の計算を終えた健二が振り返れば

「コッチもOKだ。そんじゃ……いくぞ」
カタン。とEnterを押す。

「ッ出るぞ！」

計算を終えたその画面には

*****36.58*****
*****137.65*****

その数字が打ち出されていた。

「何処だろう」

「ちよつと待てよ……って、コレって何も無いじゃないか」

「そんな筈は」

健二と佐久間は自分達が算出した場所を地図で表すが、ソコは何も無い山中だった。富山県の中に在る奥深い山。

「こんな何も無い所で爆発起こしたってたかが知れてるんじゃないか？」

佐久間の意見も尤もだ。

計算に使った影の大きさは写真に写り込んだ白線を基準に考えた。その白線がもし他の線よりも細ければまた違った計測結果が出るという物だ。だが健二もソレは把握していたし、小数点以下、ソレもコンマ2以下での誤差程度を想定していた。だが今日の前に有る画面はその想定をも上回る。

「でも、こんな筈無いのに……」

自分の計算にソコまでの誤差は有っただろうか？

「影だけじゃ無いかも知れないだろう？ 例えば時間をもつと変えてみれば」

佐久間は既に切り替える。ココで立ち止まる必要は無い。答えが出るまで何度でも試そうと決めた。彼もまた決意を持ってココに向う。

「……でも、こんな筈は……間違つてなんか無いのに……」

「健二っ。良いからもう一度やろうぜ」

「でも」

「時間が無いかも知れない無いだろうっ！」
「……………」
佐久間にも焦りは有る。

核爆弾が何時に使用されるかは分からない。

もし今既に設置場所に向われていたら？　もしかしたら既に犯人は圏外へと退避を始めているかも知れない。
そう思うと、今は一分一秒が惜しかった。

「おい！　健二ー！！」
いい加減、無理やりにも動かそうか？　と佐久間が健二の肩を掴んだ時

「…………っ！　そうかつ！」　健二は弾かれた様に動いた。

「健二？」

佐久間の言葉を無視するかの様にパソコンの画面を詳細な地図に替え佐久間を振り返れば

「そんなに大きくズレて無いよ！　犯人の狙いはココだったんだっ
！」

「え？」

言われて見た佐久間の視線の先には

「…………おい…………　ココだったのか？」

「間違いないよ。誤差は予想の範囲内だし」

「…………与える被害は予想以上…………か」
「ああ」

二人の視線の先に、ソレははっきりと

「間違いないよ佐久間。犯人の狙いは…………黒部ダムだよ」

日本最大級の水力発電ダム、黒部ダムの場所が映し出されてきたのだった。

長野に居る理一から特機へ緊急連絡が入ったのは、健二達が結論に辿り着いた十分後だった。

「確証は有るのか陣内」

本村を始めとした特機の面々も困惑を隠しきれない。が、ソレも無理は無い事だろう。イキナリ通信を入れてきたかと思えば、健二が写真に写った影から場所を探り当てたという。そしてその先は、都市部を予想していた自分達とは異なる場所。

『今は他に手掛かりが有りません。ですが信じるに足ると私は思います』

「しかしそんな場所で核を使うなど」

『部長！今は最悪の事態を考えて動くべきです』

「それは分かるが」

黒部ダム。最大貯水量二億立方メートルを誇る日本屈指の巨大ダムだ。ソコを核で破壊される。

「一体、何万世帯が呑み込まれるんだ」

「ただ呑み込まれるだけじゃありませんよ。放射能に汚染された水に、です」

「電力も水源だって……どこまで」

「最悪の場合、今後数十年に亘わたってって黒部一帯の環境汚染は深刻なレベルに達します。そんな事に成ったら」

爆発に巻き込まれる数は少ないだろう。だがそれ以上の被害を出

す事は十分に可能な場所だった。電力源として、そして水源として、黒部ダムを始めとする一帯のダムは大きな役割を果たしていた。その全てが瓦解する事態に成ってしまう。そうなった時の混乱は、予想する事すら難しい。

『ココからの方が黒部には近い。私はこのままへりで黒部に向かいます』

「しかし陣内。一人では」

この犯人が素手とはとても思えない。

『富山県警には応援を要請しています。機動隊の強襲班と合流して当たります。部長……許可を願います』

「……」

既に手配は整っている。後は本村のGOサインだけだ。そして

「分かった。直ぐに急行しろ。バックアップの手配はコチラで進めておく」

賽は投げられたのだった。

『了解しました。陣内、富山へ向かいます！』言って直ぐに通信は切れた。

一転、慌しさを増す本部は

「柴田、富山県警とホットラインを形成！ 吉井、三人連れて黒部に向かえ」

「了解！」

一気に慌しさを増す。そして徐に桑田に近付き

「お前は長野へ飛べ」

「長野に、ですか？」

その意図が見えないが

「もしかしたらまだ健二君の力が必要に成るかも知れん。彼とのラインは確保して置きたい」

「！ 分かりました。直ぐに向います」

「へりを出す。急げよ」

駆け出す桑田を見送りながら本村はその視線をモニターに向ける。画面に映し出された新たな戦場となった、巨大なダムに……

「間に合うかな」

「どうだろうな」

自分達に出来る事はした。後はただ待つだけだ。このまま逃げ出すと云う選択肢も無論ある。ココ長野は富山県とは近い場所だ。仮に爆発が起きた時、その影響を受けないとも言い切れない。逃げても良いんだよ？ と言う健二に

「なんて言つて？ 核爆弾が爆発するから、なんて言えないだろ？ それに……」

思わず隣に座る親友を見る。

「お前も逃げないのか？」

「……佐久間」健二には、ソレは強さに見えた。佐久間が健二に思う様に、健二もまた、佐久間を強いと思う。互いに互いが眩しい二人だった。

「ま、理一さんなら何とかしてくれるさ」

「そうだね」

今は信じよう。そして、待とうと決める。

そんな二人の下へ「健二君、お客様がいらしてるけど」と奈々が姿を見せたのだった。

「客？ 僕に？」

「ええ」

「誰だろ？」

訝しげに、それでも立ち上がり健二が向った先では

「やあ、小磯君。突然申し訳ないね」

「え、磯貝さん。どうして」

〇Zの磯貝が玄関に立っていた。

「ちよつと付き合つて欲しいんだけど、良いかな」

「どこか遠慮気味だが、それでもその目は強い。」

「良いですけど……如何したんですか？」

「うん。それなんだけど……」そして彼は

「君に会つて欲しい人が居るんだよ」

健二を連れ出したのだった。その、健二に会いたがっている人物の下へと

磯貝の運転する車で健二が連れて来られたのは、市街に在る高級ホテルのラウンジだった。

「コッチだよ、小磯君」

「あ、はい」

磯貝が先導する先にはVIPルームが在った。

「ココ、ですか？」

「ああ」

車中、何度尋ねても「会つてからの楽しみ」と言つてコレから会う人物の事を教えなかつた磯貝だったが、ココに来て、健二にも話す氣に成つた様だ。

「ラブマシーンや九月の件もそうだけど、今回のウィルス騒動にも君の貢献が有つたと聞いて、是非君に会いたいと頼まれてね……じ

「やあ、いいかい？」

「……はい」

ドアノブを回しながら、少しだけ仰々しく口を開く。磯貝にしてみれば滅多に会う事の出来ない人物への招待だ。少しだけ、健二への演出を兼ねたと言った所。そしてドアを開け、磯貝は言う

「此方がOZの極東マネージャー。まあ、OZのアジア全般を統括す」！ どうして貴方がココに」？ 健二君？」

磯貝の言葉を遮り一步を踏み出す健二の、その困惑の視線の先に

「Is it brag? I saw again

（ほら？ また会えた」

豪華な椅子に座り……ウィリー・マクレガーは優美な笑みを湛え^{たたえ}て居たのだった。

「見えましたっ！」

「っ！！」

ヘッドホンから聞えるパイロットの声に、ヘリの窓から外を見る。そこには巨大な湖を遮り圧倒的な存在感で存在する、黒部ダム^{の姿}が在った。

「このまま降下地点へ。富山県警からは？」

「後五分程で集合地点へ到着だそうです……降りますよ！」

「頼む」

理一は今一度、そのダムを睨む。絶対に

「やらせるものかよ」

防いでみせると云う決意と共に……

十二の陣

「間違いないな」

写真から視線を外せば、ソコには写真と同じドアが在った。朝の点検での施錠は確認された。そして今、強襲班の一人が確認すると

「！……」銃を構える。

ソレが合図の様に皆に緊張が走り、事態は実戦へと姿を変える。鍵は開けられていたのだった。

サインは走る。

「（開けます。確認を。次いで一人入ります）」

「（三で）」

「（いつでも行けます）」

ガチャリ！ とドアを開けると理一は見える範囲を銃口で見渡す。即座に班の一人はドア入り口に突入し

「！……」作業員と見られる一人の遺体を確認した。首下に手を当てるもソレは手遅れを確認するだけ。だが必要なのは

「……経って十分」
間に合わなかった。だが、まだ取り返せるだけの遅れと判断出来る。

「手分けして搜索を。二人貸してくれ」

「了解。浦と海原は捜査官に」

「了解」

「すまないな」

強襲班も三方向に別れ、理一もまた強襲班二人と行動を共にする。他にも各班にダムの警備員も同行する事に。立体的で複雑なダム内

で、彼等の助けは不可欠だ。それは犯人にとってもそうであり、その分、自分達は追い付ける筈だと確信を持つ。

「急ごう！」

「……はい！」「……」

コンクリートの迷路の中で、理一の戦いは静に、だが激しくその幕を開けたのだった。

ホテルのラウンジ、そのVIPルームでは「少しハズシてくれな
いカ」と言い磯貝を退席させ、健二とウィリーは二人、豪華なテ
ブルに座り向かい合っていた。

「どうしたんだイ？ ワタシがココに居る事が、そんなに意外だっ
タのかな？ Mr・コイソ」

手を眼前で組み、健二の反応を楽しんでいる素振りを見せるウイ
リーだったが、確かに、健二はその驚きを隠せなかった。確かに磯
貝は言ったのだ。此方が

「貴方が……OZの？ でもレッドフォードで有る貴方が、そんな
健二にとって、それは繋がらない筈だった。

「H a h a h a h a。別におかしな事デハ無いでシヨウ。人間の ^{肩書き}
i t l e は一つじゃ無いだろう？ ワタシはレッドフォードのウイ
リー・マクレガーで有り、OZのウィリー・マクレガーでも有ル。
そう云う事デス」

「それじゃあ、OZも」

ソレが健二の、言う迄も無い結論。

「そう。グラバーズのOne ^{一本の枝} b r a n c h に過ぎナイよ」

「そんな」

「昨日も言った筈ダヨ？ Mr・コイソ。君が嫌うグラバーズなど、

ホンの一部に過ぎナイと。ワタシは君に嘘は吐かない。これは真実だヨ」

「ウィリーさん」

健二にはウィリー・マクレガーと云う人物、その真意が、掴めな
いで居たのだった。

食事はまだだろう？ と言い二人分のランチを手配するウィリー
を止める間も無く、健二達の前には豪勢なランチが持ち込まれ「遠
慮する事はナイよ」とウィリーは笑顔を見せる。

「あの」

「ン？」

食事の合間、何とか切り出した。自分はまだ、何も聞いては居な
い。

「どうして僕を、ココに呼んだんですか」ソレが本題だ。まさか食
事の為とも思えない。

「ああ。そうだね」

あらかたの食事は済ませた。後は食後のコーヒーを飲むだけだ。

そろそろ本題へ入ろうとウィリーも考えていた頃。

「先ずはお礼を言わなきゃと思つてネ」

「礼？ ですか？」

健二には今一つ分からない。

「OZを代表して、とイツタ所かな。去年と云い今回と云い、Mr・
コイソには色々と助けテ貰った。極東マネージャーとして、君には
感謝してイル。アリガトウ。Mr・コイソ」

「え、今回？」

去年は分かる、だが今回の言葉が指すのは

「磯貝さんの上……それじゃあ警察に圧力を掛けたのは」

ウィリーの仕業だった。

「その言い方は悪意がアリそうだね。我々は被害者だヨ？ Mr・
コイソ。コノ国から損害を受け、多くの被害者がイル。情報を提供

シ捜査を依頼した。何モやましい所はナイね」

「！ 一体貴方は……どこまで」知っているのだろうか。

ガタン！ と立ち上がり健二は思考を巡らせる。

彼は損害を受け多くの被害者と言った。害も無いウイルスと認定して居たのは何時の時点の誰の言葉か。解決に至る過程を警察から聞いた？ それは有るだろう。今の現状は？ 彼と彼等には関係無いだろう。でももし……

ソレを知っていたら？

悪意有るウイルスと多くの被害。金額と使い道。どうやって集め何処で何を買ったか……その思考の延長上にウィリー・マクレガーが絡むとすれば

「貴方は……知ってるんだ。事件の全てを、アノ悪夢のサイトも、貴方は」

OZの者が知らなくても不思議は無い。兵器産業の者全てが知る筈も無い。だが、OZとレッドフォード、その両方に深く関わるウィリーが、ソレを全く知らないとは思えない。そしてそこにビジネスが成り立つのならば

「あのサイトを……利用している」
「なるホド」

健二の視線に宿る敵意をどこか楽しむ。彼は何処までも真っ直ぐだと感心する。

「OK。君の言うサイトがどう云うモノか、確かにワタシは正確にリカイして居るヨ」

「貴方^{だが}つて人は」

「But」

視線を強める健二を制する。ウィリーの表情は至極穏やかなま
だ。

「ワタシはソコで、何一つ売っても居なければ、何一つ買っても居
ないヨ」

「え？」

一瞬意識が緩む。ウィリーは一口、コーヒーを飲み

「考えても見たマエ、Mr・コイソ。そんな事をして、一体ワタシ
にどんなメリットが有るンダイ？」

「！ それは」

健二も考えるが、並行してウィリーもまた健二に説く。

「Mr・コイソ。言い方はワルいかも知れないが、例のサイトは言
つてしまえば個人向けのオークションサイトだ。ワタシは常にCo
untry^国を相手にビジネスをしているんだヨ？ 申し訳ナイが、
あんな小さいビジネスに興じている時間はワタシにはナイのですヨ」
時間の無駄です。とコーヒーに手を伸ばすウィリーに健二はテー
ブルを叩く。アレは、小さいビジネスで片付けて良い話じゃ無い。
「貴方は、アレを知って、どうして平然とそんな事が言えるんです
かつ！」

健二には理解で出来ない。

「Why? と聞かれてもネ……ソレが事実だからだよ、Mr・コ
イソ。ソコに需要と供給が有るからこそ、例のサイトも存在してい
ル。小さなサイトに小さなビジネス、そして、売る者と買う者。ソ
レは事実でソレが全てだ。だが……そうだネ。君の問いに正確に答
えるなラバ、ワタシが平然と言えるのは『タニンゴト』だからだヨ、
Mr・コイソ。好きだろう？ 君達日本人は、この言葉が」

確かに、正しいのかも知れない。だが、だからこそ

「そう言う貴方達が武器をばら撒く。そう言う誰かがあのサイトを
作ったつ！ あのサイトは、あの……あの子達は、売られる為に生
まれて来たんじゃないっ！」

絶対に、そうで有ってはならない。それは決して間違いない真実の筈。

「そう思うヨ？　ワタシもね。真実、あの子供達は売られル為に生まれたんじゃナイ……生まれ育つ夕果てに売られる結果になつただけだヨ」

「っ！　なんでっ」

「買いたいと願う者がイルからサ」

健二の現実とウィリーの現実とは、何処までも食い違つた。呆然とする健二に

「ゴカイのナイ様に言つておくヨ。ワタシは決して終末思想の持ち主でもなければ無政府主義者でもナイ。この世界の未来に望む姿を夢見るならば、ワタシと君の理想は、実はそう違ひのナイ物だと確信するヨ」

「そんな」何もかも違ふ。二人の間には決定的で根本的な、違ふモノが有る筈だ。そうでなければ、健二は自分が分からなくなる。

「我々の違ひハ、君は未だ夢をミテ、ワタシはもう夢からサメたと云う事ダ、Mr・コイソ」

ウィリーの表情に微かに疲れが見えた。

「もし今この瞬間カラ、世界で最も儲かるモノがトウモロコシに成るのなら、レッドフォードは総力を挙げてトウモロコシを育てるだロウ。小麦がその穂に黄金を実らせルなら、ワタシは今からでも農具を持つて畑をタガヤそう」

健二は彼の目と言葉に嘘は無いと感じる。

「だが現実とはソウじゃナイし、ソウならナイ。大国は大量ノ兵器を保有し更なる開発の手ヲ緩めナイ。争ひの絶えない国々は餓えた国民を尻目に国家予算ノ八割を軍事費にアてる。富める者はナンでも買い、貧しい者はナンでも売る……Mr・コイソ……ワタシの夢見る時間は終わつタ。ワタシと君の違ひは、それだけだヨ」

「　　」
すとん、と椅子に座る。納得した訳でも理解出来た訳でも無い。

だが、彼の現実を否定するだけの言葉は、今の健二は持ち合わせては居なかった。

「だが、だからこそ」

ウィリーは言つて一通の封筒を健二の前に差し出す。

「ワタシは君にファーベライトへ来て欲しい」

「え？」

封筒を開けると、ソコにはニューヨーク行き航空チケットが入っている。顔を上げ見たウィリーの目は真剣だった。

「ワタシには出来なかつたが、君になら、この現実にナにか出来るカモ知れない。ワタシはソレを見届けてミタイんだヨ、Mr・コイソ」

「僕は……」

俯く健二にウィリーの声は穏やかだ。

「ワタシは明日の夜には日本を発つ予定デス。出来ればソレ迄には結論を出して欲シイ」

「……昨日の今日で、急ですね」

否定では無い。が、肯定でも無い。

「そのチケットは三ヶ月後の席ダヨ。だがワタシとしても出来れば意思の確認位はスマセたい」

「……」

「Mr・コイソ？」

ソコでウィリーは不審を覚える。健二の目に力がこもつて来た。

彼は、こんなに強い目をしただろつか？

健二は一つの確信を覚えた。今までは漠然と、だが何故かソレが確信に変わる。

「確かに、ウィリーさんは嘘は吐かない」

「？ もちろんだヨ。ソレはワタシの美学に反するからネ」

「そう。貴方は何時も、何時だって、嘘は吐かなかつた」全て知っている訳では無い。だがウィリーの背景には真実と現実が有り、そ

それは彼の嘘を必要とほしない世界。それは健二の確信であり、もう一つ

「でも貴方は 決して全ては語らない 「ソレもまた健二の確信だった。」

理一達はダムの中を懸命に搜索していた。爆弾を仕掛ける迄時間は有る筈だ。警備員は怪しい場所をくまなく指示する。既に一人殺されている。その捜査も慎重だ。そんな中ある班の前に異変があった。

「あれ？」

「如何しました？」

警備員の声に強襲班のリーダーが聞けば

「ココは閉まつてる筈なんですけど」ドアは開いている。「下がってください」

ココから先は自分達の領分だ。

一人が警戒する中次いだ者が中へ……三つ、角を曲がれば「！」「と手で制される。」

ソコには大きなトランクケースを開けて何かをしている男が一人

「（スタングレードを）」

「（左から行きます）」

「（三でGO）」

簡単なサインをやり取りし、一人はソレを転がした。

「っ！ え？」と声を上げた瞬間に激しい爆音と閃光が辺りを支配した。

何が起こったのか？ 彼は頭では分かっている。だが人間の身体は、ソレに対応する事は出来ない。閃光が収まった時には既に

「確保っ」

「隊長に連絡っ」

「爆弾、異常ありませんっ！！」

作戦は終了していた。

理一の下に「犯人、確保しました。爆弾も無事です」との報が入ったのはその一分後。彼は直ぐにその場へと向った。着いた時には他の強襲班も到着し、事態は収束に向っていた。

理一は犯人が連れ出されるのを横目に隊長班の下へ。コレから富山県警へと共に赴き、今回のテロの背後関係など、犯人に聞きたい事は山程あった。

「陣内さん。ご苦労様でした」

「此方こそ。ご協力、感謝します」

二人は握手を交わし作戦の成功を労う。今はただ、ホツとする。

「それにしても間一発でしたね。あと数分で爆弾のセットも終わる所でしたよ」

「本当に、間に合ってよかった」

「ココの位置を特定するのがもう少し遅れていたらどうなっていた事か」

「そうですね」

今はただ、健二と佐久間に感謝するしかない。時間的に、自分達ではココ迄辿り着けなかったのは事実だ。本当に「全く、大したモノだな」と呟く。

「陣内さん？」

「いえ、コッチの話です」

言って、本部に報告が有るからとその場を後にしようとした理一が、ふ、と爆弾を見た。

時間が、凍った。

「こ、コレは何ですかっ！！」

思わず駆け寄り理一に

「？ ですから犯人が仕掛けようとした爆弾で」

「馬鹿なっ！！」

県警本部には伝えた筈だった。だが理一の言葉には確証も無く証拠も無い。事態の大きさと混乱を嫌って、強襲班には【爆弾】としか伝えられては居なかった。その事を、知るのが遅すぎた。

「高性能爆弾ですね。しかもこのクラスを四つだと充分にダムに重大なダメージをあ「こんな馬鹿なっ！！」？ 陣内さん？」

話す隊員を遮って辺りを見渡せば、自分の大声に何事か？ と此方に向く者達と、隊員に挟まれた犯人。

確かに目が合い、彼は笑った。

「貴様っ」

理一が犯人に一步を踏み出した時、ソレは出遅れた。

「あっ！ 貴様」

「おいっ！！」

隊員の腕を強引にすり抜け、犯人は飛んだ。

日本で最高峰を誇るダム内の階段に……下の方が霞んで見える程

の長いコンクリートの階段に、犯人は迷わず頭から転げ落ち

「！がつ　　！！ぎ　　！！」

遙か下で止まった。

「おい」

「嘘だろ」

呆然とする隊員を押し退け理一は犯人に駆け寄るが

「おいっ！　爆弾は何処だっ！！　おいっ！！」

既に事切れていたのだった……

「おい……頼むよ……」

モノ言わぬ骸と成った犯人から手を離そうとしない理一。その肩に手を掛ける隊長にソレは恐怖を誘う。それほど迄に陣内理一の形相は

「何処なんだよ……答えるーっ！っ！！」

鬼が宿って見えた。

とある地下室。その一室で男は大きなスーツケースを開く。そこには、全ての者達が懸命にその行方を追っている

超小型核爆弾が在った。

男は装置を捜査し始め、やがて

ピッ！ と何かを押す。

【24：00：00】はやがて

【23：59：59】と……………時を刻み出したのだった。

今、カウントダウンは始まった。誰も知らない所で

pipipipipiと電話が鳴り、ピッ「なんだ？」と出た男はスーツケースを閉めロッカーへと。

『陣内さんから連絡です。どうやら、問題発生です』

「分かった。直ぐ行く」

『お願いします、部長』

「ああ」

テロ対策特殊機捜隊、本部長・本村広志の手によって、最後の時が、定められたのだった……

十三の陣

「では核では無かったと言うのか？」

『はい。奴の車も確認しましたが痕跡はありませんでした』

本部内にもたらされた理一からの通信は特機に影を落とした。後手後手に回っていた事件でようやく自分達の一手が追いついたと思つた矢先、ソレは空振りになったのだから。だがあくまでも核に關しては、だ。

「取り合えずダム爆破は防げたんです。切り替えて行きましょうよ」「うむ。そうだな」

柴田の言葉に本村も頷き、特機も気持ち切り替える。

「犯人の身元、車から判明しました」

菊間が映し出した画面には【大塚良治】のプロフィール。だが

「ま、何処までホントか分かりませんけどね」

今までの例から言つて、菊田・深沢の仲間と思われる大塚と云う人物が、真つ当な経歴で有るとは思えない。

「言つても始まらないな。吉田！ 相沢を連れて大塚の家を当たれ。何か掴めるかも知れん」

「了解。行くぞ、良則！」

「はいっ！」

駆け出す二人を尻目に

「もう直ぐソツチに吉井が到着する筈だ。ソツチは県警に任せてお前と吉井は一度本部に戻れ」

『了解しました』

理一との通信を終え柴田の下へと近付き小さく話す。

「桑田に連絡を」

「美也子に、ですか？」意味が分からないが

「桑田を健二君の所へ向わせて有る。状況を伝えて、もう一度デー
タの洗い直しを彼にも、と」

「しかしそれでは」

健二を使い過ぎでは無いか？ と疑問を覚える。彼は高校生であ
ってココの人間ではない。

「今は使える者は誰でも使う。我々に道徳を振りかざす余裕は無い。
分かったな」

「……はい……」

「……頼むよ」

ぼん。と肩を叩き、本村は再び自分の席に座り、眼前で手を組み
合わせ画面を見詰める。その薄く浮かぶ笑みは

「……もう少し……あと、少しですよ……」

どこか自嘲気味な笑みだった。

ホテルのラウンジ、その一室では、健二とウィリーがその視線を
交えていた。

「貴方は関与している筈です。あのサイトに」

それは健二の確信だった。彼が知っている事に関しては疑問は無
い。だがソレを何故あっさりと認めた？

確かにウィリーの言う通り、あのサイトを利用する必然性がウイ
リー・マクレガーと云う人物に有るとは思えない。闇の市場で売買
する事は彼にとってはリスクばかりが大きくプラスと成るモノは少
ない。

「ふう。ワタシは嘘は言わないと言った筈デスよ？ 第一、正規ル

ートで十分なビジネスが出来た私が、何故ブラックマーケットなどに手をダサなければイケないんだい？」

ソレが道理なのは健二にも分かるし、確かに健二もそう思う。思い、それでも尚考える。ソコに矛盾を感じたなら、ソレはとことんまで考えるべきだ。そう教えてくれたのは嘗ての恩師。罪を犯して尚、健二にとって背中を追うべき対象が言った言葉を噛み締める。

(……そう…… 国を相手の彼が身元不明の相手と取引するのはリスクが大きいだけで得は無い……得？ 誰が得をする？) 考え込む健二を興味深げにウィリーは眺める。健二が出す結論に興味が沸く。

(さて。Mr・コイソ。君は何処まで私を楽しませてくれるのかな？) コーヒーを手に、今は健二を待つ事にする。

(……足跡……ソコを隠す必要性なんか……)

そして、

「……あるか」 辿り着いた。

(ほう?)

再び自分を見詰める健二の目に、一層の鋭さが宿っているのを感じる。とても強い、自分を楽しませてくれる目だった。

「やはり貴方は全てを話したりはしない人です」

その言葉には確信があった。

「だが、事実だヨ？ ワタシは一度も「売買はしていないでしょう」……それで？」

遮られた事に拘りは無い。寧ろ楽しいと感じる。

「だってそうでしょう？ そんな必要は無い。あのサイトは……貴

方が創ったモノだ。ウィリー・マクレガーさん」

「っ！……これワこれワ。まさかソウ来るとはネ」

思わず、笑みが漏れてしまう。自分の先行投資は間違いでは無いらしい。

「一応、根拠を聞かせて貰ってもイイかな？ Mr・コイツ」

コーヒを一口、健二の言葉を促す。

「確かに貴方がサイトで売買をする事は無い。貴方はただ、売買の場を提供するだけです。OZのネットワークと高いセキュリティのノウハウが有れば、ソレはそう難しい事じゃない」

特にウィリーの様な人物で有れば尚の事だろうと確信する。

「確かにね。でも、それでワタシにどういったメリットが有るんだイ？ Mr・コイツ。マージンを取ったとしても僅かバカリの利益だと思いませんが？」

「僕もそう思います。いや、或いはマージン等も取ってはいないのかも知れませんね。その方が利用者はグッと増えますから」

「では無償だと？……Mr・コイツ。何度も言ウが、ワタシはソリに乗って世界に銃をプレゼン^{ガン}トして回るサンタクロースではアリマセンよ？ そんな悪趣味は持ち合わせてナド居ません」

利益の無い事などに興味は無い。と笑うウィリーに

「貴方があのサイトで利益等得る必要は無いからですよ、ウィリーさん。あのサイトは、言わばテストケースですから」

「……What do you say？」

（……何を言ってる？）

ウィリーの視線が強さを見せ出す。ソレは健二の確信を強める事にも繋がる。

「あのサイトを利用して得る最大の利点は、その匿名性です」

「……」

「直接会う必要も話す必要も無い、もしかしたら相手の本名すらも知らないでしょうね。領収書など存在せず、足跡も指紋も何も無い」

「So what?」
だから何したって

「貴方には、貴方達にはソレは必要ないでしょう。確かに貴方達は公明正大に兵器を販売し、領収証でも保証書でも平気で発行するでしょう」

「A demand is a that spring

(要望が有ればね」

「でも中にはソレでは困る人達も居る」

ソレが健二の答え。

「貴方の言った通り、世界中の兵器の、その大多数を占めるのは大
国と呼ばれている国々の手によるモノでしょう。多分、一番はアメ
リカ、ですか?」

「Yes」

「確かにソレは現実で、事実なんだと思います。でも彼等だつて何
処までも無作為に売り捌く事が出来る訳じゃ無いでしょう。多分…
…足跡も指紋も、残せない場合も有る」

でなければレッドフォードや他の武器商人が暗躍出来はしないだ
ろう。

「アメリカの敵……その敵の敵はアメリカの友人になれるかも知れ
ません。でも国際社会の友人とは呼べない場合も有ると思います。

そんな時は?」

「I see……Mr・イソガイの言う通りデスね。君は時に……
キケンだ」

それほどに、穿った。

「本来、その隙間は貴方達の領分だった筈です。でもソコにはリス
クも付き纏う。本来は正規ルートでの販売が主な貴方達にとって、
実はソレはそんな美味しい話じゃ無い筈です。だから貴方はあのサ
イトを立ち上げた」

「ソレがテストケースだと?」

ウィリーはもう頭を切り替えていた。

「ネットワークを使用した兵器売買の、です。OZとレッドフォード、この二つの巨大企業であればソレが可能です。そしてソレを国家間で更なる秘匿性と機密性を持たせる事で、匿名での国家間の売買が可能になります」

「我々の利が薄れるのデハ無いかな？」

「真実、世界に兵器をばら撒くサンタクロースは貴方達では無く大國なのかも知れません。ではサンタクロースは誰からプレゼントを渡されるんです？ 貴方にとって、販売元がレッドフォードで在る必要性なんか無いんです。製造元がレッドフォードでさえあれば、誰が何処にどうやって売ろうと……構いはしないですよ」

ソレは断言し断罪する。そんな敵意とも取れる意思のこもった視線だった。健二にはどんな理屈や理由を並べても、あのサイトとソレに関わる者を許す事等出来なかった。

「……OK。降参ダ、Mr・コイソ。確かにあのサイトは我が社のプロジェクトの一環であり、その産物だ」

「貴方は」

何処までも彼は一貫している。自分の足跡に、後悔など微塵も感じさせない自信が、ウィリーには有った。

「だったら今起こっている事態も把握している筈です」

「ふむ……それはSADMの事かい？」

「ソコまで分かって」

彼は事の深刻さが分かっていないのだろうか？ と一瞬有りもしない考えも浮かぶ。

「どうしてそんな冷静で居られるんですか？ 貴方だって危険なんですよっ」

彼が犯人で無い限り、爆発に自分も巻き込まれる可能性は有る。爆弾の規模を考えれば、その確立は決して低くは無い筈だ。

「Mr・コイソ。ワタシは人を殺す事の出来るモノを扱ってイルん

デスよ？ その銃口が何時の日かワタシに向けられる事は覚悟して
イマス」

「でもコレは貴方だけの問題じゃ無い。もし何か知っている事が有
るなら協力を「ソレは出来ナイ」ウイリーさんっ！」

即断即答の拒絶だった。

「この業界に在って、その信用を失うコトは死に等しい。ソレはソ
コに関わった者に対してダケで無く、世界の市場そのモノに対する
背信ダ。仮にワタシが君達に対して有益な情報ヲ持って居たとして
モ、ソレはサイトに関わった者達の情報漏洩じょうほうろうえいに他ならない」

「しかし犯罪ですっ！」

「この世界に、君達の常識をひっくり返す事の出来る秘密がイクツ
有ると思ひマス？ ソレ等を深く知るワタシが、自分の良心ダケで
秘密ヲ話す？ ソンナ事は有り得ないし、有ってはナラナイんです
ヨ」

「ウイリーさんっ」

健二には理解出来ない。彼はソコまで金の亡者だとも云うのだ
ろうか？ だが、ウイリーにもまた、守るモノが有るに過ぎない。

「Mr・コイソ。確かに君はJusti正義ceで、ワタシはEvi悪l
なのかも知れナイ。デスガ、ワタシの後ろには、レッドフォードに
従事する数千人を超す社員が居、ソレに数倍スル家族が居マス」

「え？」

ウイリーだけを見ていた。だが、彼の後ろにも、人々は居た。

「弾丸を製造シタ者達は、君に唾を吐き掛けられなければ成らナイ
のカイ？ キッチンで働く者の手は血で染まっているノカナ？ M
r・コイソ……君は正しいヨ。だが、ワタシにだって守りたいモノ
が有り、レッドフォードの社員全員にもソレは有るんだよ」

「でも……だからって……」

今ソコに危機は在るのだ。自分は間違っただけだ……はずだ。
「コノ国の人々は如何なっても良いノカ？ 君はそう言うかナ？
でもソレは」

そう思う。

「その為なら、レッドフォードなど如何なってもイイ……ワタシにはそう聞えるヨ、Mr・コイツ」

「そんな……事は」

「そうは、思っていない……と思う。」

「申し訳無いガ、ワタシがコノ件で君達に協力出来る事はナイだろ
う」

「ウイリーさん」

その視線は決意が見えた。多分、自分にはソレを覆せない。

「正義の者が居て悪の者が居る。ヒトの行いは正しい行いと悪しき
行いに二分サレ、戦争にすら正しい国と間違つた国が在る。そんな
単純な二元論で説明が付く程、この世界はワカリ易くは出来てはイ
ナイんだよ、Mr・コイツ」

それがウイリー・マクレガーの結論なのだろう。だからこそ、な
ればこそ、健二はウイリーに背を向け歩き出す。

「Mr・コイツ？」

扉の前で一瞬立ち止まり

「だったら……僕は僕の正義で戦います……僕にだって、守りたい
人が居るんです」

その視線は向けないが、背中が語る意思を感じる。だが

「ソレが答えだよ、Mr・コイツ。そうやって……我々人類ハ永遠
に争い続けるんだ」

「……失礼します」

扉を閉め健二の居なくなった部屋に残されたウイリーは窓辺に立
ち

「I deny the justice of another
person for one's justice……It
is a story stupid forever……」

（自分の正義の為に他人の正義を否定する……どこまでも愚かな話

さ……」

独り、窓から街を眺めるのだった。

健二がホテルを出た所でp i p i p iとコールが鳴り「？はい」出ると

「あ、健二君？」

「え？ 桑田さん？」

意外な人物からの電話に一瞬驚くが、彼女が自分に電話を掛けてくるなど、理由は一つしかない。

「陣内さんから連絡が。ごめんなさい、電話ではチョット……これから時間有る？」

「え？ いや、時間はありますけど」桑田は東京だろう。流石に東京まで足を伸ばす時間は無い。だが

「じゃあ長野県警までタクシーで来てくれる？ お金はコッチで払うから」桑田の言っている意味が分からない。

「でもコッチって」

「私ももう直ぐ県警に着くから、話はコッチで、お願いね、健二君」「はい？ って、分かりましたっ！」

理一の代わり、と云う事なのだろう。ならば事態は

「っ！ お願いします！」

素早くタクシーを止め「長野県警まで大至急お願いしますっ」

急変したのだろうと確信したのだった。

「……そうか。で？ お前はコレからどうすんだ？」

『うん。まだ分からないけど、取り合えずは県警に向ってる。何か進展有ったら知らせるから、悪いけどソツチは』

「ああ、上手くやつとくよ」

『ゴメン、佐久間』

「あんま無理すんなよ？ じゃな」

pi。と電話を切った佐久間は山に沈もうとしている太陽を眩しく見詰める。事件はまだ終わっては居ないらしい。コレから健二は何処まで刺さり、自分は何処まで踏み込むのだろうか？ 先の見えない状況が、今はもどかしい。そこへ

「あれ？ 健二は？」

流石にそろそろ健二分が足りなくなってきた様だ。夏希は暫く健二を捜していたが

「ああ、今さっき電話してまして、なんかコツチの親戚でトラブル有ったみたいで、急いで向かいました。慌ててたんで皆に何も言っていないからって」自分が今さっき頼まれたところだ。咄嗟に出た言い訳にしては苦しいが、前日に親戚の嘘は使っている。全く繋がらない訳でも無い。

「ふ〜ん……佐久間君」

「な、なんですか？」

その目がジトツと覗き込む。

「何か、隠してない？」

「なっ！ 別に何も」

「本当〜？」

流石にココ迄健二の不在が多いと疑念も湧いてくる。明日にはもう栄の一周忌法要が控えてる。夏希としても不安を感じるのは無理も無い。

(なんで俺が〜)との理不尽を飲み込んで何とかしようと考えを巡

らせていると「あ、居た居た」と太助が現れた。

「太助おじさん？」

彼の言葉が分からない夏希を他所に

「佐久間君、万理子伯母さんが君に話が有るって」

不意に佐久間へ話が振られた。

「へ？ 俺に、ですか？ 何でしょう？」

「さあ？ 僕には。じゃ、伝えたからね」

「あ、はい。すみません」

意図せずして、夏希からの追及は一先ず先延ばしに出来た様だ。

万理子の話は予想も出来ないが、佐久間は「そ、それじゃ俺行きま
すんで！」と立ち上がり「あ、佐久間君！」との夏希の声は振り切
る事にしたのだった。

佐久間が万理子の居る座敷に着けば、彼女は静に本を読んでいる
様だった。

「あの、佐久間です」

小さく声を掛けると

「！ ああ、ごめんなさいね。呼び付けちゃって」

「いえ」

「さ、どうぞ」

「はあ」

万理子の前の座布団に座ると、万理子はゆっくりと茶の用意をし、
佐久間の前に湯呑みを差し出す。

「どうぞ」

「あ、すみません」

取り合えず、茶を飲む。

「健二君」

「え？」

徐に口を開けば、その言葉は佐久間の警戒を呼び起こすが、その様子に万理子は微笑む。

「理一が随分と迷惑を掛けているみたいね。きっと佐久間君にもじやない？」

「あ、と。あれ？」

健二からは特機の事は皆には言っていないと聞かされていた。自分と侘助は流石に知っているが、協力している立場の佳主馬にも詳しい事は話していないらしい。だが万理子の言葉はソレを否定するモノだった。

「あんまり詳しくは知りませんよ。でも……子供の事ですからね。大まかな所は把握している積りですよ」

「え？ それじゃあ」

彼女は大体の事は知っていた。事件の事ではない。理一の仕事や、ソレに健二を巻き込んでいる事を。

「息子が、迷惑をお掛けしています」

と、深々と頭を下げる万理子に、佐久間も思わず

「ちよ！ 迷惑なんてそんなつ。俺、僕も健二も自分の意思で理一さんに協力してるんですから」

ソレは強制では無い。健二は分からない。もしかしたら彼には手を引く選択肢が狭い場合も有ったかも知れない。でも少なくとも自分は自分で選んで行動した自負は有る。

「それでも。貴方達の様な若い人を巻き込むのは避けるべきだと思います。本当に、申し訳ない」

「や、止めて下さい。ホントに何とも思っていないんですから、お願いしますよ」

佐久間にとつては今の状況の方が余程辛い。何なら自分から土下座して頭を上げて貰おうか？ などと本気で考えたが

「そうかい？　なら、私はこの事は気にしない。それでいいのね？」
「へ？」

笑顔で頭を上げた万理子に思わず呆けた声を出したが、

「は……はははは」

「ふふふふ」

思わず笑ってしまった二人だった。

笑い終えては既にいつも通りの万理子に戻り

「それで健二君は今夜は？」

必要な話に戻るのだった。

「はい。どうやら今夜はコッチには戻って来れないみたいで」

「そう」

「あ、でも明日の法要には絶対間に合わせるからって言っていました」

「ふふ。そうね。母さんも喜ぶわ」

ふ、と視線を向わせた先には栄の写真があった。その穏やかな笑みの写真を、思わず佐久間も見詰める。

「で？　さっき夏希に詰め寄られてみたいけど、夏希にはなんて？」

「はは。一応親戚の家でトラブルがって事にしたんですけど……どうにも信じては居ないみたいで」

もう少し上手い事を言えば良かったと反省。だがソレならばと

「それじゃあ、私から言っとくわね。その親戚から健二君を借りるとお詫びの電話でも有ったと言えば納得もするでしょ。健二君、電話は？」

「それが少し難しい状況で、今は緊急の秘匿回線を使用してるんで特定の番号しか繋がらないんですよ。僕の携帯はその中に含まれてるんで」

特機が高レベルの事件を扱う時に、外の人間が関わる時は特別な回線を使用する事になる。盗聴を防ぐ事や居場所を特定出来る事、

回線が混乱時でも特機本部や隊員には優先的に繋がる措置が施されている為である。現在の健二の携帯はまさにその状態であり、陣内家から健二の電話に繋がるのは、何度か捜査に協力している佐久間と侘助しか居ないのが現状だった。まあその電波の届かない状況と言うのが、夏希の疑心を一層に煽った結果に繋がるのだが。

「そう……ま、電波の悪い所って事で言いでしょう。あの子もそんなに機械に強い子じゃないしね」

「なんか、すいません」

「いいのよ。迷惑掛けるのはウチの理一なんだから。せめてコレ位はさせて頂戴」

「ありがとうございます」

言って立ち上がる万理子に佐久間も続く。どうやらコレで陣内家側の問題は解決出来そうだと胸を撫で下ろす。そんな佐久間の電話が pipipipipi と呼び出せば

「あ、先に行つて下さい」

「ええ」

万理子を先に歩ませ電話を繋ぐ。

既に相手の名前は見た。

「……はい いえ、大丈夫です。 ! ……そう

ですか。やっぱり健二は…… ちよっ! 待って下さいよ。

今は流石に 時間が無いのは分かってます ええ 俺も

その積りです 「

佐久間の目には強い光が宿る。が、ソレが何を意味するのか、今はまだ佐久間自身も分かってはいない。そして佐久間は

「はい。失礼します、ウィリーさん　じゃ」「p.e.、とウィリー・マクレガーとの電話を切り、「くそっ！　どうしろってんだよっ！」

今は壁を叩くだけだった。

ソコには悪夢が在った。
ソコには現実が在った。

だが、ソコには必ず

「絶対有る筈なんだ……手掛かりは、ココに　」　健二の求める答えが有ると確信していた。

ダム爆弾が核では無く、犯人もまた自ら命を絶つたと聞かされた。手掛かりが何も無くなった今の状況で、それでも確かに残る手掛かりはこのサイトだと確信する。長野県警の一室に設けられた対策本部で、健二はモニターを睨み付ける。あの悪夢のサイトを、小磯健二は真正面から睨み付けていたのだった。

「絶対有る」と。

十四の陣

県警に設けられた仮設本部。慌しく動き回る捜査官の中にあつて、健二はモニターを見詰めていた。ソコへ桑田が現れ

「健二君」

「！ はい？」

何か？ と思えば桑田は数枚の資料を健二に見せ

「大塚の家のPCに例のサイトの履歴が有ったわ。今、特機で解析に回してるって」

「そうですね……じゃあ高性能爆弾は」

「おそらく大塚が入手したんじゃないかしら」

「じゃあ、やつぱり……」核爆弾の手掛かりはソコには無い可能性が有る。健二は再びモニターに視線を戻す。

「でも、健二君？」

そんな健二に桑田は一つの疑問を持った。いわゆる

「なんで今更菊田のユーザー画面を？」 に尽きた。健二はダム

の爆弾が核では無かった事。大塚と言う犯人が死んだ事を聞いて、暫く考えてからはずっと菊田の画面から目を離そうとしない。そのサイトのアチコチをクリックしてはその手を止める。その繰り返しだった。

「ココに爆弾の手掛かりが有るのかな？ このサイトはICPCインターネットにもデータは渡して有るし、本部でも調べは進めてると思うんだけど」

健二が今このサイトに拘る理由が見えないのだった。そんな疑問をぶつけられた健二は、モニターを見詰めたまま

「……………菊田って人は……………どうやって爆弾を買ったんでしょうか？」静かに話し出す。

「だから例のエンジェルさんで金集めて、だろ？」

「大塚もココで買ったんだろうしな」

「しつつかし、コレだけのサイト、一体何時から存在してたんだか」
周囲に居る捜査官が口々に答えるが、ソレは健二の疑問の解消には成らない。ソレは少しだけ、ズレていた。

「お金の受け渡しは？」との声には桑田が

「ソレは複数の銀行に別けて何段階にも振り分けて、ね。おそらく犯罪の金だと分かってる銀行も多いんでしょうね。誰に金が渡ったかなんて、結局は追えないんじゃないかって先輩が」

世界の全ての事柄に、証明書が必要な訳じゃ無く、記名が必要な訳じゃない。存在しない巨大な金が動く……そういう世界も在ると云う事だろう。

「でも……じゃあ菊田って人は、ソレをどうやって知ったんでしょうか？」

「え？」

健二が振り向き合わせた視線には、強い力が見えた。

桑田美也子は何度か見た事が在る。コレはそう云う時の小磯健二だ。

「送金先の口座は？ 商品の受け取り方法は？ 自分の所在は？

受け渡しの日時は？」

「そう云うのは普通、出品者と連絡を取って」行くものだろう。自分もネットで買い物をした事は有る。

「ソレが見えないんですよ、このサイトは」

そう云って健二はまたモニターに視線を戻す。

「普通はメールです。口頭では聞き間違いや言い間違いの可能性も有りますから。でも……菊田って人のハードディスクを視る限りそんな形跡はありません。他のサーバーを利用している痕跡も無い」
「でももつと調べれば」

メールのサーバーなど沢山在るだろう。確かに健二の言う事も分

かる。今すぐにも本部にソレを要請しようと思つ桑田に先んじて「第一、セキュリティの問題が有ります。こんな非法法のサイトのやり取りを、一般のサーバーを介して行うとは思えません。事の露見はサイトの存在の露見と同義ですからね。今回の様に」

「そう、ね」

一人がばれる事で、その全てが台無しになる。ココはそう云うサイトだった。

「だからこそ、そのやり取りは嚴重なセキュリティの下で行われる事を前提としてる筈なんです」

「じゃあ、ソレが」

「はい。多分……出品者と落札者のやり取りは、このサイト内に限定されている筈です」

ソレが健二の予想だった。

ウィリーがこのサイトを創ったと言った以上、このサイトのセキュリティの強度はOZのソレと同義か、もしくはそれ以上の筈で有る。現状において、最も秘匿性を持ったやり取りが可能な場所だろう。その非合法性から見てもOZと同じサーバーを使用しているとも思えないし、そんな施設など幾らでも用意出来る資金力と組織力ハードにおいてもソフトにおいても、このサイトの情報を得る事は難しいと言わざるを得ない。実際、特機もICPOも、サイトのプロテクト解除には至って居ないし、おそらくもう直ぐこのサイトも消えてしまつだろう。何時までもウィリーが放置しておくとも思えない。

「きつと何処かに掲示板の入り口が在る筈なんです」

「掲示板？」

「はい。サイト内で連絡が取り合える場所……それが最も安全で確実な情報のやり取りでしょうから」

「じゃあソレを見つければ」

「どんな情報が有るのかは分かりませんが……少なくとも、爆弾の受け取り方法や場所は分かる筈です」でなければ、菊田も爆弾を所持しようが無い。必ず、受け取りはする。

「ダムに有ったのが違う爆弾だった時点で、僕達には根本的な事柄の検証が必要に成りました」

「根本的？」

また、健二の話が見えなくなりかけるが「つまり、核爆弾の存在って事か」捜査官の一人がソレに答えた。

「はい。買った履歴は見付かりましたし、おそらく現状では買ったと云うのは事実として捕らえても良いと思います。でも、ソレが日本に有ると言うのは推測に過ぎませんよね？ 買った人間が日本に居て、ソレらしい場所の写真が有ったっただけです。誰一人、核爆弾をその目で見た人なんて居ません」

「確かに、そうね」

結果、確かに写真の場所で爆弾を発見したが、ソレは核では無かった。

「何時何処で誰が受け取ったのか、まずはソレをハッキリさせないと……このままじゃ爆弾に届かない」

「その情報がココに……でも」

「はい……ソレが見付らないですよね」

一同はもう隅々まで見尽くしたサイトに、もう何度目に成るかも分からない溜息を洩らした。

捜査官の誰かが「やっぱあのプロテクトを破って、サイトを解体ばいばいしかないんじゃないすかね」と洩らす。そうすれば、サイトに登録した者達の情報も、健二の言う掲示板の様な情報も、全てが見る事が出来る。不法な兵器売買も人身売買も、その全てを捕らえる事も可能だ。そして可能だからこそ

「それが出来れば苦労しないですよ」 桑田の言葉にも疲れが見えると言うモノだ。

プロテクト解除に協力を依頼したOZのエンジニアですら「コレはウチのプロテクトよりも強力ですよ」と苦笑していた。世界一を自負するOZが、である。健二から見てもソレは事実であり、上の事情など知る由も無い現場のエンジニアが嘘を言っても思えない。彼等はOZとサイトの関係性など知る筈も無いし、ウィリーにとってもソレは不必要な事だろう。コインの表と裏は、互いに互いを知る必要は無いのだから。

周囲では色々は意見を出し合うが、誰に協力を頼んでも、どう云う組織がソレに強くても、事態が進展するとは思えない。

健二は独り、モニターを眺めながら、自問を繰り返す。

「……………スパコンを並列させて計算をさせれば……………多分やってる、ソレでもダメって事なんだ……………もう一度ウィリーさんに……………いや、無理か」

彼の信念は、きっと変わらない。

健二の脳裏に浮かぶウィリー・マクレガーは自分のやっている事を正しく認識している。そして認識していて尚、その自らの行為に絶対の確信を持っているだろう。仮にまた話をした所で、彼の気が変わる事は無いと断言出来る。

「OZに依頼して……………いや、サーバーは別だろうから……………今から計算、は無理か……………このプロテクトは……………サーバーが別なら……………っ！」

ガタン。と席を立った健二に室内の一同が一瞬注目する。

徐に健二は携帯を取り出し、電話を掛ける。

そして健二は、再び始めるのだった

『はい』

「もしもし佐久間？ ちょっと協力して欲しいんだ」

* log in… *

そこはとあるOZの空間。ソコにケンジとサクマ、ソレにワビスケとリイチが顔を揃えていた。

「サイトから情報を抜き取る？ ガチで言ってるのか？」

「そんな事が出来るのかい？」

ケンジが三人に提案したのは、サイトから必要な情報をダウンロードしてしまう事だ。そうすれば確かに菊田と出品者のやり取りは分かるだろう。だが

「プロテクトを如何するんだ？ 解読の手段でも思いついたのか？」
ワビスケもそのプロテクトは見た。ハッキングも試みだし突破も試した。だが、ソレは強固でとても破れはしなかった。ソレをなんとかしない限り、ケンジの案など不可能だ。

ケンジであればその事は重々承知の筈。であれば、何か方法でも思い付いたのかと思うが

「いいえ。アレの解読は多分無理だと思います」

「おいおい」

だったらそもそもその話が成り立たない。だがケンジは言葉を繋げる。自分は元々、解読などする積りは無いのだから。

「解読は出来ません、ですから、あのサイトのセキュリティサーバーをダウンさせます」

「……ダウン？」

「はい」

プロテクトを破るのではなく、セキュリティの機能を麻痺させると言った。

「きつとあんなサイトで有れば大容量のサーバーをセキュリティ専用で使用してると思えます」

「しかしそんなに簡単に」

「簡単じゃ有りませんけど不可能じゃない」

「てか、どうやってだよ」

物理的に破壊でもするならば話は分かるが、そんな事は出来はしない。場所だって分かっては居ないのだから。

そんなサクマにケンジは

「DDoS攻撃を仕掛ける」と言い放った。

DDoS攻撃とは複数のネットワークに分散する大量のコンピュータが一斉に特定のサーバへパケットを送出し、通信路をあふれさせて機能を停止させてしまう攻撃だ。

サーバーをダウンさせ、復旧するまでの間にワビスケが侵入し情報を抜き取る。ソレがケンジの提案だ。確かに不可能では無い。無いが、

「一体どれだけの規模が必要か分かってんのか？」

「関係各所に協力を手配しても、実際に可能かどうかは」

「アチラさんのサーバー、ちょっと手強そうだけどな」

問題は山積だ。確かに向こうのサーバーを落すだけの攻撃を可能にするには戦力が足りない。だからこそ、ケンジは使うと決めた。使えるモノはなんでも使う。ウィリーの言う通りだと呆れてしまう。自分の正義の為に、誰かが非とする行動を行うと決めた。

「確かサクマ捕まえたって言ってたろ？」

「はあ？ 何を」

「エンジェルさんさ」

「？ そりゃあ」

確かに捕まえた。そもそもソレをワビスケが解析した事で、事件にココ迄辿り着く事が出来ていると言って良い。だが何故今の段階

で？ と思った時、気が付く。

「つて！ ケンジお前」

「ああ。エンジェルさんの送金プログラムをサーバー攻撃用に組み替えてOZにバラ撒く」

「ケンジ君。君は」

「シシシシ。感染者全員からの一斉アタックか。確かに脈は有りそうだが……無茶苦茶だな」

用途はどうあれコンピュータウイルスには違いない。ソレを意図的にバラ撒くと言い切ったケンジに、三人はまた思ってしまう。時にケンジは激しい判断を下してしまう事が有る、と。犯罪を止める為に、犯罪を犯す事を厭わない。彼は時に激し過ぎると思わざるを得ない。

だが問題も在る。

「でもエンジェルさんを使ったとしても攻撃に必要な数のアカウンアタックトに感染させるとなると時間が掛かるぞ」

「感染速度を速める事とか出来ないのか？」

「ソコまでプログラムをいじるだけでも時間が掛かるさ」

エンジェルさんと二十四時間で全アバターに感染出来た訳じゃない。しかも現状、何時爆弾が作動するかは不明なのだ。菊田、深沢、大塚が何らかの線で結ばれている以上、ダム爆破が失敗に終わった事は現時点で明白だろう。核を持っている更なる人物が居たとして、その者が行動を起こさないとはいえない。事態は急を告げていると確信する。

だからこそケンジは、ココで戦いを始める決意をしたのだ。

「速度は変えられない。だったら感染の起点を多く設けるだけさ」

「起点？」

「つまり、大元の感染者つて事かい？」

エンジェルさんは一人から始まった。だったら二人から生まれれば？ 五人、十人、或いはもっと大勢の起点から開始すれば、短時間

で相当数の感染を可能に出来る筈だ。だが
「でもどうやってそんなに大勢にウイルスを？」
ワビスケの疑問はサクマもリイチも持っている。そんな三人にケ
ンジは

「つて！ ガチで？」

「ケンジ君」

「シシシ。そりゃあ見モノだな」

策を言った。

「じゃ……いいですね」

「」「ああ！」「」

一斉に消えた三人を見届けて独り「僕にだって……出来るさ」
呟きケンジも消えた。

* log out… *

OZから出た佐久間の下に侘助が姿を見せ

「さて、やるか」

「はい」

侘助は早速エンジェルさんのプログラム改造に着手した。ソレを
見た佐久間もまた、その場を後に自分のすべき事を目指す。戦いは、
もう始まっていた。

足早に歩いた先に有る襖をバツ！ と開ける。

「ん？ なんだ？ お前か」

「どしたんだ？ そんな恐い顔して、か有ったのか？ 佐久間」

自分に話し掛けて来る翔太と了平。だが佐久間の目当ては

「ちょっと協力して欲しいんだ。佳主馬君」

「え？ 何を？」

キョトン？ と此方を見る佳主馬だった。

佐久間はその目を見詰めてハッキリと。自分の中の不安をも打ち消す為に強く、言い放つのだった。

「決闘だよ」

* l o g i n . . . *

仮想都市OZの中央タワー前。

ソコに一枚のメッセージが大きく張り出された。

世界中のAvatarが行き交う、その最も人目を惹くその場所に、あの一年前と同様に……今、OZを通して世界中の目が、ソコに向けられる

”果たし状 本日、日本時間十九時、OZ格闘場にて待つ。
キング・カズマ”

あの夏の日の様に……

十四の陣（後書き）

連休・祝日とありまして先週一週間、お休みを頂きました。居てくれると嬉しい更新を待っていてくれた方。申し訳ないです。

また更新続けます。でも週2回くらいの亀ですがw
これからもヨロシクデス。

十五の陣

OZの中ではキング・カズマの話題で持ち切りだった。

「相手は誰だ？」「果たし状ってマジ？」「キングからか？」「またラブマ？」「ねえって」「この前の大会の奴？」「無いわw」

様々な噂が飛び交う。それもそうだろう。キング・カズマはチャンピオンでありチャレンジャーでは無いのだから。

彼から対戦を申し込むなど、あの一年前のラブマシーン以来の事だった。それ程に強く、高く在ったのがキング・カズマなのだから、そのカズマからの挑戦状となると話題に上がらない方がおかしいと言うモノだ。

- - - 18 : 55 : 04 - - -

既にOZ格闘場の閲覧数は八十万を越えた。今もまだ上がり続けているカウンターを見ながら

「どうやらコッチは間に合いそうだけど、侘助さん。ソッチはどうですか？」「佐久間は視線を隣に向ける。そこでは侘助がプログラムと格闘していたが、カタン。とキーを叩いて手を休めると

「シシシ。コイツでOKだ。後はどれだけの数が集まるかな」

「はい」

侘助の作業終了を健二にもメールをして、これでコチラ側の準備は全て整ったと言えた。

「後は……」二人の視線が向けられた先で、「……（こくん）」と頷き画面に視線を戻す、そんな佳主馬がキーを叩いた時

「キターーーーーー」と言うフキダシで画面が埋まる。

時、18:59:00。キング・カズマがOZ格闘場に姿を現したのだった。

野次馬は湧き上がる　キング・カズマはこれからどんな戦いをするのか？と。

強者は息を呑む　自分達の目標の戦いが見せるであろう勇姿を想像して。

強敵は視線を強める　自分では無い誰との戦いを彼が望んだのか？と。

無言で佇むカズマがただソコに在り　時。

19:00:00

アクセス数、百万を越えた。

周囲の空気がピン！と張り詰める中、それでも何も起こらない格闘場に緊張が走る。一瞬、「相手は？」と誰かが言った刹那「ッ！！」とカズマが頭上を見上げ素早くその場を跳び去ると　ドンッ！　と何かが飛来し格闘場に轟音と煙が舞い上がる。ソレは嘗てのラブマシーンとの決戦を彷彿とさせる光景。そんな光景に一同が静まる中

「それじゃあ……征こうかあ！　ケンジさんっ！！」　構え吼えるカズマ目掛け煙を飛び出したケンジもまた

「雄雄雄雄おおああつ！！」声高らかに吼えたのだった。

「誰だ？ アレ」初めて見るけど？ 「OMCに居た？」

観戦者はそんな話題でざわついた。

突然に上空からキングに襲い掛かってきたあの鳥人間。アバターの名前は【ケンジ】となっているのが分かるが、そんな名前もアバターも、OMCのランキングでは見た事は無かった。

チャンピオンのキングと見知らぬケンジの戦いに一瞬、一同は果然としたがやがて気が付く。それは周囲の反応だった。

「おい「アイツ結構強くなね？」「おおおお！」「やるやる！」と言った言葉が飛び交う様になって行った。

ケンジはカズマの手解きをずっと受けていたのだから上達が早いのは分かる。だがケンジとしては、実際にカズマやリヨウヘイとしか手合わせをしていない事もあり、自分の実力がどの程度まで上がって来たのかは自分でも把握しては居なかった。

最近のリヨウヘイとも手合わせはしていない。もはやリヨウヘイは高みに行ったのか？とも思っていたが、実際にはケンジがリヨウヘイを越えた為にカズマがリヨウヘイとの手合わせを止めさせたに過ぎない。

カズマの目から見てケンジはもう、十番代クラスの力は持っていると言えた。あともう少しすれば、ケンジをOMCの手頃な大会に出場させて皆をアツ！と驚かせようなどと考えていた所に今日のコノ話が舞い込んで来たただけだ。少し早いが、今日がケンジのOMCデビュー戦と成る。

ガシィツつとカズマの拳を防いで回し蹴りで返すが、ソレは空振りになる。既にソコにカズマの姿は無い。と、刹那、ケンジは軸

足一本で後方に宙返りをすると、今まで自分の居た所に轟音を立てたカズマの蹴りが通り過ぎていった。

おおおおおっ！

歓声が咲き乱れる。ケンジがかわしたのはキング・カズマ十八番のサマーソルトキックであり、攻防の隙間に繰り出すソレは今まで多くのチャレンジャーを粉碎してきた。ソレを見事にかわして見せたケンジに、周囲は賞賛の声を上げていた。

ケンジとしても今の動きは殆んどマグレに近いモノだった。ただ幾度も喰らった攻撃に頭では無く指先が勝手に反応したに過ぎない。それでも何時も喰らってしまう攻撃をかわせた事に自身の高揚が感じられる。そしてカズマもまた、高揚を感じていた。

「凄いね、ケンジさん。アレをかわすなんて思わなかったよ」
本当に、かわされるとは思わなかった。

「偶然だと思うよ？ でも……まだイケるさ。まだ、終わらせる訳にはいかないからね」

決意も新たに、ケンジは時刻を確認し、その意気を一層高めるのだった。

時刻は - - - 19:04:17 - - - 自分達はまだ、終わる訳にはいかない。少なくともあと六分は戦い続けなければいけないのだから。

* l o g o u t : : *

佳主馬の様子を横目に「どうだ？ 状況は」と佐久間に聞いた侘助は佐久間のモニターに視線を移すと

「現在二億八千万突破……でもOZクラスを墮とすにはまだ足りな

いですね。やっぱりもう少し時間を」

「駄目だな。これは完全に悪意を持ったウイルスだ。OZの監視システムに引っ掛かるのも時間の問題さ。ソレの駆除と発信元の追跡…… エンジェルさんの件では向こうも肝を冷やしただろうしな。ソレにコイツは元々がエンジェルさんだから、ワクチンなんて直ぐに出来ちまうさ」

「やっぱり」

「ああ…… 攻撃開始は十九時十分だ。それ以上は待てねえな」

「ソレまでにどれだけ数を増やせるか……」

この作戦の開始時間は十分になっていた。それ以上はOZからの攻撃を逆にうける形になってしまおうし、エンジェルさんをばら撒いた香坂と同様にコチラの所在も知られてしまおう。如何に理由を並べても、コレが間違い無くサイバー犯罪である事は変わらない。無制限に時間は取れないし捕まる事もゴメンだ。

ウイルスに感染させ、ウイルスを使って攻撃を仕掛ける。セキユリティシステムがダウンした隙にハッキングし内部情報を奪取する。自分達がOZに捕捉される迄にソレ等を完遂する為に出せる時間は、ほんの十五〜二十分だろうと踏まざるを得なかった。

カズマがログインすると同時に闘技場にアクセスした者全てに感染する様に仕掛けた。そして十九時十分、攻撃はアカウントの持ち主も知らない所で自動的に行われる。

ソレまでカズマとケンジの決闘をより多くの者達に見せる必要が有る。その人数が多ければ多いほど、更なる二次感染、三次感染の数を増やす事が出来るのだ。

佳主馬にはある爆弾事件解決の為の作戦だと伝えて在る。全てを話す事は無く、また中学生の彼が、全てを知る必要も無いと思う。

佳主馬には核の存在など知って欲しくは無いと願い、あの悪夢のサイトを知って欲しくは無いと願う。

だが、佳主馬は自身の高揚を抑える事が出来ない。出来なく成っ

てしまう程、健二は強くなってしまった。本当は出来るだけ接戦を演じ、ケンジと共に時間を稼ぐ予定だった。予定だったのだ……だが

「……ゴメン、佐久間さん。おじさん」

「？ 佳主馬君？」

「佳主馬？」

暗い声に不審に思う二人は、思わず息を呑む。その視線の先の佳主馬は

「俺……止まれないわ」

笑っていた。

カタタタタタタタタつ！！ と一気にキーを叩き出した佳主馬を「ちよっ！ 佳主馬く」「おいっ！ 佳主馬っ！」「二人は止め切れなかった。

* l o g i n *

周囲の喧騒を他所に、ランキング上位の者達は既に違和感を覚えていた。ソレは彼の対戦相手ではなく、自分達の目標でありライバルでもあるキング・カズマに対してだった。

「どういう積りだ？」

ソレが何位かは分からない。だがソウ洩らした彼の言葉は、そのまま上位の思い。

どうしてキング・カズマは本気を出さないのだろうか？

確かに動きは良い。それほど手を抜いている訳でも無いだろう。だが、ソレは言ってみれば手加減無しで練習をしている様なモノで、真剣勝負の動きのソレでは無いと感じてしまう。

おかしい。

そう思い始めたその時 「っ！」キング・カズマの間合いの取り方が 変わった。

「いよいよか「遅いつ。さっさとケリと付けろ、キング「ほう？」」上位の者達が、一層の注目を浴びせる。刹那、一気に間合いが詰まる。

「なっ！」

ドガン！ と蹴られ、一瞬でケンジは吹き飛ばされた。

咄嗟のガードで致命的なダメージは免れたが、それは本当に偶然の防御であり、ケンジにはカズマの動くタイミングが全く掴めなかった。

スピードが増した訳じゃない。ただ動くタイミングが掴めなかっただけだ。たったそれだけの事で、気が付いたら拳が飛んで来ていた。ゆっくりと起き上がり

「……カズマ、君」

コメントは発する事が出来ない。だが、コレは些か話が違った。健二はOMCで名を上げる積りも無ければキング・カズマを倒す目標を持っている訳でもない。今はただ、この事件の解決に必要で有効な手段としてOZを使っただけだ。その手段の中には時間稼ぎとしてカズマと演じる道化芝居も含まれる。その事に、健二は何の疑問も違和感も無い。

だが、佳主馬は違った。

彼にとってO M Cは誇りであり自分の居場所でもある。そして、彼には佐久間の持つ危機感も、健二の持つ焦燥感も伝わっては来なかった。佐久間と健二は、もしかしたら全てを話すべきだったのかも知れない。だが、ソレはもう今となつては遅きに過ぎる。既に百五十万に迫る観戦者が居る。ソレを前に、今の動きを見せた以上、ソレはもう覆す事は出来ないだろう。

「ほんとはこのまま、とも思ったんだけど……駄目だなあ、やっぱ
り」

「カズマ君。君は」

油断無く構えを取る。ココに来てようやく実感する。コレがキング・カズマなのだ。

「ケンジさんは強くなり過ぎたよ……俺が」

「くっ！」

「倒したいと思う程にねえっ！」

「このっ！」

交錯する二人。だが、ケンジの拳が空を切った。一瞬で蹴りを想像した、が自分の見る景色が回る。

「え？」

気が付けば、ケンジは投げ飛ばされていた。壁に叩き付けられて視界が定まった瞬間には、もうカズマの拳は目の前に迫っていた。

自ら投げた相手に同時に追撃の拳を放つ。この流れる様な連携がキングの得意とする攻撃だった。ギリギリでかわせたケンジは僥倖を言えよう。

大きく距離を取ったケンジを、ガラガラと壊れる壁から手を抜いてカズマはゆっくりと振り返る。

「どうしようケンジさん。なんか……楽しいな、俺」

「カズマ君」

もう、彼は止まれないと悟る。彼は現役のチャンピオンで、教える子とも言えるケンジにも見せない姿と力が有る。

「コレが……キング・カズマだっ！」
ソコには、OMCで絶対の力を持つ王者の気迫が在った。

ソレは見る者の心を縛り離さない、圧倒的な武だった。

誰よりも速く。

誰よりも鋭く。

誰よりも重く。

誰よりも強い王者の攻撃だった。

健二は必死にかわしていたが徐々にダメージは蓄積していった。
だが

「まだ、終わる訳には……いけない」
「だったら拳を振るいなよ？」
「っしま！」

刹那に眼前に現れたカズマに思い切り吹き飛ばされた。

ケンジの身体はステージ上の障害物を突き破り地面に落下する。

が、その時、ソレは起こった。

「あっ！ やばいぞ」
早く避け「オワタ」逃げ

そんなフキダシの多くを見る暇もなく、ステージの障害物が衝撃に耐えられずに崩壊していく。その瓦礫の多くがケンジの頭上へと飛来する中

キターーーーーーー！

カズマの登場時よりも遙かに多くの歓声が上がった。
見ればケンジには瓦礫の破片一つ降り注いでは居ない。ただのもつても、である。

ソレは異様な光景だった。ケンジが呆然と周囲を眺めると辺りは一面に瓦礫が散らばっている。ただ、ケンジの周りだけが偶然にも、幸運にも、その被害を免れたに過ぎない。

そう、本当に凄い、幸運に。

「あ……どうして……」

「全く。リョウヘイから聞いて見に来て見れば……しっかりしてよね、ケンジ」

ケンジの頭上には

「ナツキさんっ！」
黄金の羽根を広げた吉祥ナツキが、笑顔で立っていたのだった。

そのアクセス数、実に三百万に跳ね上がった瞬間だった。

ケンジはナツキの手を借りて立ち上がるが、もう既に視界の向こうではカズマが準備を整えている。

「私も一緒に戦うわよ。ケンジ」

言って薙刀を構えるナツキに観衆のボルテージも一気に上がる。今や【キング・カズマ】と【吉祥ナツキ】はどっちがOZで最も有名なアバターかを争う程の存在だ。その二人が会するなど、実際、あのラブマシーン事件以来では初の話になる。この二人の存在は瞬く間に世界を巡る事は必至だった。そのナツキが謎のチャレンジャーと共にキングに対して武器を取る。これで盛り上がらない訳はない。だが

「いいえ。コレは僕とカズマ君の戦いですから。ナツキさんは下が

「つてて下さい」

ケンジはナツキを制して一歩踏み出し構える。

「へえ。いいんだね？ 本当に……」カズマもまた構えをとる。

「でも！」

ナツキがそれでも並ぼうとするを遮り 叫ぶ。

「フィールド変更っ！ モードB・ナンバーG！」

「え？」

ケンジの発する言葉に思わずカズマも驚くが、次の瞬間には格闘場が変化する。ソコは無数の障害物が縦横無尽に飛び交う宇宙空間を模したバトルフィールドだった。

「確か、フィールド変更の権限は挑まれた方にあるんだったよね？ カズマ君」

「ケンジさん。まさか始めから」

「さあ？ どうか……でも、ココからが僕の」

そうしてケンジは一気に飛び出し、再び戦闘の火蓋を切って落とした。呼応するかの様に飛び出したカズマと共に、二つのアバター漆黒の空間で

「本気だー！ー！ーっ！」

「やああつてみるおーっ！」

激突したのだった。

時 19:09:55

ソレはもう、ソコまで来ていた。

* log out…

*

「佐久間君どうだっ」

既に侘助は自分のパソコンの前で準備を終えていた。そして……

「……っ！ 感染数……っ 約六億五千万っ！！ イケますっ」

それはナツキの登場を経て爆発的に増大していた。

「始まるぞっ！」

「はいっ！」

時 19:10:00

世界中に広まったコンピューターウイルスによる、ブラックマーケット闇市場へのDOS攻撃が開始された瞬間だった。

十五の陣（後書き）

投稿の間隔が空いてしまつて申し訳ないです。

いやいや、中々に忙しくて、て、言い訳になりました。すいません。頑張つて続けますんで、どうか見捨てないでやってください。それでは、また〜。

十六の陣

「行け行け行け行け行け」

「もう少しだ」

それはOZの空間。サクマとワビスケの前に聳え立つ漆黒の塔。目標のサイトを模した塔を見詰める二人の前では、塔の周辺で幾つものノイズが発生し始めていた。

ソレは攻撃の効果と言える現象。不正なアクセスに対するセキュリティの発動。それ単体では蟻を払い除ける程度の事象でしかない。だがソレが塔中に蔓延し始めているのが見て取れる。六億を越える不正アクセス。その膨大な攻撃は、明らかにセキュリティのサーバーへの負担を増大して行った。

そのノイズが現れ消える迄の間隔が、徐々に徐々に長く、その数を増し……

塔の外周に張り付いた全てのノイズが弾けた。

「ワビスケさんっ」

「ああっ！」

ワビスケの鴨は飛び立ち、ノイズと共に弾け飛び、その漆黒の空間への道を開いた穴へと飛び込み、その姿を塔に消した。

「復旧まで時間がありません。急いでください」

その消えた姿に声を掛け、ふ、と目と向ける。その先に在る……親友の戦いへと。

「……ケンジ」

祈る様に見守るナツキの前で、縦横に飛び交う障害物の中で、ド
ンッ！ とまた二つのアバターがぶつかり合った。

「おい」

「アイツ」

「凄え」

観客にざわめきが起きる。その中には上位のランカーも含まれて
いるのだから、事態の異常さは測るべくも無い。それほど迄に、事
態は予想外の展開を見せ始めていた。

「ちっ！」

カズマは無数に飛び交う障害物を高速で交わしながら一気にケン
ジへと間合いを詰める。周囲から歓声も上がるがソレも頷ける。

あのラブマシーンとの戦いの中でも見せた動き。様々な障害物を
かわし肉薄するキング。その早く正確なキータッチを持つてしての
み可能な動きだ。その動きを持って君臨しているキング・カズマに
過去、このステージで彼に追隨出来た者は居ない。

そのカズマがケンジに肉薄し、その姿に蹴りを叩き込む寸前、目
の前のケンジは姿を消す。

「ちい！」

カズマは追う。また追う。

だがその姿に追いつく事は出来ない。それほど迄に、ケンジは速
く、そして精確だった。

「アイツ……キングよりも速い」

「どうなってんだよ」

「自信が有ったんだ。多分……彼はココでなら」

上位ランカーは身を持ってキングのキータッチは知っている。その彼を、間違いなくあの鳥人間は越えている。

「あっ」

彼らの前で、追いつがるキングに反転肉薄するケンジが映る。

「くっ」

「遅いよっ」

ドカン！ と弾かれたカズマに再び障害物が襲い掛かり「このつと避ければ

「え？」

「ッシ！」

再び、蹴り飛ばされたキング・カズマ。

「~~~~~ ケンジさん」

「少し、フェアじゃないけどね」

対峙する二人は、その視線をぶつけていた。

健二は時折考えていた。自分と佳主馬が本気で戦ったのならば、自分は如何するのか？ と。

無論、力の差は歴然だ。佳主馬には経験と実績があり、反対に自分は格闘ゲームと云うモノはあまり得意では無い。これはセンスの問題だろうし、コレばかりはどうにも埋め様が無いとも思っていた。ならば、仮に戦ったとして、如何すればいいだろうか？

考える方向性として、自身の力量を上げると云うのは勿論有る。だが、自分にOMCを教えているのが他ならぬ佳主馬で有る以上、自分に出来る事は佳主馬も出来ると言う事になるだろう。しかも、その全てを自分よりも上手くに、だ。

では？ 自分が彼よりも上手く出来る事は何だろうか？ そのプラスの部分での影響を勝敗に対しより及ぼす事が可能であれば或いは。

その答えがこのフィールドであり、この戦いだつた。

PCのキーボードを速く、精確に打つ。その一点に関して、健二は佳主馬を越える。佳主馬のソレが早く正確なのは充分に知っている。知つた上で、自分はソレを越える事が出来ると確信する。この全ての方位からの障害物を避け、相手に迫り攻撃を加える。

避けながら、動きながら、そして攻撃。

格闘そのものの動きは大幅に自由度を減らす事になる。その枷を与えられた状況でならカズマと渡り合える。そして戦いの優劣の要素が、視野と操作に大幅に振り分けられるならば、自分にも充分に勝算は見込める。

「もう時間も頃合いだろうし……決めるよっ！ カズマ君」

一気に飛来するケンジに、一瞬身を沈めるカズマだったが

「っ！」

「キング」

カズマはその場で留まり、ただ静に構えを取った。

その重心は低く、明らかにケンジを迎え撃つ為の体勢だ。

「アイツ、キングの動きを封じたのか」

「こいつぁ、もしかしたら」

思わず周囲も息を呑む。

キング・カズマ。その十八番は彼のサマーソルトキックで有る事は広く知られている。だが、もっとも恐いのは彼がそのキックに迄繋げる流れそのものに有ると言っている。

いきなり蹴りを入れられてもかわす事は出来るだろう。だがキングのソレは一連の動作の中で相手の死角から跳ね上がってくるものだ。強力な蹴りが必殺では無い、かわせない蹴りをもって必殺とし

ている　それがキング・カズマ。
そのカズマの動きを止めて見せた。今、明らかに戦いの流れはケンジに大きく傾いていたのだった。

「カズママーっ！」

ケンジがそのスピードを乗せた拳を上空から繰り出した瞬間、狙いすましたかの様にカズマは拳をかわす動作と攻撃を連動させる。後方に身体をそらせながらサマーソルトキックを繰り出す　が

ソレは、ブンツと空を切る。予測が付いているのなら、避ける事は難しくは無い。

一回転し着地したカズマの背後から

「もおおらったぁー！」

ケンジはその拳を振るい

「ケエエンジイーっ！」

カズマもまた、その拳に拳で応える。

無数に飛び交う障害物の中で、二つのアバターは最後の激突をした。

「ケンジッ！　カズマッ！」

思わず飛び立ったナツキの眼前で、二人の戦いは幕を閉じたのだった。

ワビスケはプログラムの中に在った。サイトに侵入し、ソースを

解体し目当てのモノを捜す。

「さて、掲示板っぽいのは……？ コイツは？」

侘助には深くは知らされていなかった。あくまでも兵器をネットで売買しているサイトが有り、そこに爆弾の情報が有る。ソレを抜き出す為の今回の作戦だ。その事自体には違和感はない。だが、彼には知らされてはいなかった。そこに有る兵器以外の商品については、何も。

「……………ウイリー……………お前何やってんだよ……………」

怒りも憤りも無論感じる。だが、それ以上に、コレを創ったウイリー・マクレガーに、侘助は言葉を放つ。

彼と自分は道を別った。だが、確かに同じ道を進んだ時も存在していた。その彼が、どうしてココに至ってしまったのか。ソレだけが、侘助の口をつくだけだった。

もう一度、ウイリーと会って話をする。その決意を決め再び捜す。再び対峙する為にも、ココでこのサイトは潰さなければならぬと確信する。そして

ガシィィ！

ケンジとカズマ。その二つの拳が交錯し、互いを身体に突き刺さった。

ケンジはカズマの攻撃パターンを封じ、必殺の技を封じた。

だが、失念していた。

あのラブマシーンを粉碎したのは

あのピースメーカーを砕いたのは

キング・カズマの右拳だった事を。

最後にその場に立っていたのは、キング・カズマ。ただ独りだった。

カズマWIN

その文字が大きく表示され、

おおおおおおおおおおおお

歓声は空間を震わせていた。

「やはりキングが勝ったか」

「また、面白い奴も現れたしな。コレからが楽しみだ」

「いいさ。キングを倒すのは僕だからさ」

上位の者達も、目指す高みを確認し、新たな強敵に胸の高鳴りを感じる。そんな中で

「……………はあ……………やっぱり、負けちゃったか」

どこか、すっきりした。

「惜しかったね、ケンジ」

「ナツキさん……………でも、楽しかったです」

「うん」

ナツキの笑顔に応えて立ち上がろうとすると、スツとカズマの手が差し出される。

「カズマ君」

「なんか、ゴメン、ケンジさん。でも俺……」

本気になっていい場面では無かった。戦いに興じている場合では無かった。

戦いが終わった今なら、ソレは考えるまでも無く明らかだ。だが、止められなかった自分が居た事も事実。佳主馬の胸には後悔が押し寄せるが、ケンジはただ手を握り返し、立ち上がる。

「楽しかったよ、カズマ君」

「っ……ケンジさん」

ケンジの声に含むモノは無い。

「でも……今度は負けないからね」

「ケンジさん……はいっ！」

その二人に満足気味にナツキも微笑むが

「どうやら計画は順調みたいだし、僕はもう行くね」

「うん」

OZから出ようとするケンジに

「ケンジッ！」

「ッ！ ナツキさん」

ナツキはその目を真っ直ぐに見詰める。

「もしかしてまた何かに首突っ込んでるんでしょ」

「うっ、と。それは、その」

今は言う訳には行かない。そして、その悪夢は、一生言う積りも無い。

「別に聞かないわよ」

「へ？」

おもわず拍子抜けするが

「だから約束してよね。大婆ちゃんの法要には必ず間に合わせる事っ！ いいわね？ ケンジ」

笑う。今は笑顔で、彼を見送ろうと思う。きっと彼は今、何かに走っている。彼がそうする時は、誰かの為の筈だと感じるから。

「はいっ！ 必ず……行って来ます」

「はい。行ってらっしゃい」

消えたケンジを見送り、カズマとナツキも、その興奮冷めやらぬ会場から姿を消したのだった。そして

「コレか……うん。このBOXで間違いないな。後はコイツをDLして」

そのBOXに手を掛けた瞬間、「ワビスケさんっ！」佐久間の声が響く。

「サクマ君？」

既に作業は大詰め段階だ。何が？ との疑問は、だが直ぐに解消する事になった。

「ヤバイですっ！ システムの復旧が思ったより早い！ ちよっ！ 復旧しますっ！」

「何っ！」

セキュリティサーバーのシステムが、今立ち直ったのだった。

十六の陣（後書き）

ちよいと日常が忙しくなり果てしなく間が開いてしまった。
ホント、申し訳無いです。

うううう……ごめんなさいです。

十七の陣

「急いで下さいっ」

「分かってるっ！」

サクマの前にそびえたつ漆黒の塔。その外周に開いた無数の綻びは見る見る修復されていった。ソレとは別に、自分達のばら撒いたウイルスがどんどん消されて行く。やがてソレが自分達まで辿り着くのに、数分と掛からないだろう。

回線を切る準備はしている。だが、まだ駄目だ。まだ、ワビスケは終わってはいない。

「くそつたれっ」

BOXを掴んだワビスケは空間を跳び続けていた。

全ての出口が閉じきる前に、コレを抜き出さなければならぬ。

全てを抜き出すには時間が無いが、必要最低限のモノ 掲示板の記録だけはココに抜き出せた。

狭まり、減らし、閉ざされた数多の光の中で 最後に残された僅かな光を

「っのー！」

ワビスケがすり抜けた。

* l o g o u t . . .

*

「佐久間君っ！」

「はいっ！」

侘助と佐久間は一斉にキーボードを叩く。ダミーを流し痕跡を消し、DLしたデータを隔離した。

「佐久間さん！ おじさん！」

格闘場から出た佳主馬が二人に声を掛けた時「佳主馬君ソツチ抜いてっ！」佐久間は叫びながら自分のPCのケーブルを無理矢理引き抜いた。

侘助と佳主馬が各々のケーブルを引き抜いたのは殆んど同時だった。

しばし 静寂。

「間に合いましたか？」

「ああ。なんとか……な」

「ふう」

作戦は、今完了したのだった。

『それじゃ、俺達はココ迄って事だな』

「ああ、助かったよ侘助」

東京の特機本部で侘助と話すのは理一だ。家系図上は叔父にあたる侘助だったが、同じ年と言う事も有る。どちらかと言うと従兄弟

位の関係が二人には有る。

「今、健二君が県警でプロテクト解除に当たってくれてる。ソレが終われば爆弾の大まかな所在も分かるだろう」

『外側が強固だったからな。多分それほど堅くは無いだろう』

「健二君もそう言ってたよ。明日の朝までには何とかすると」

『そつだな……』

「？ 侘助？」

不意の沈黙に不審を覚えるが

『なあ、理一』

「ん？」

彼の声は真剣だった。

『健二の奴は……サイトの中身を？』

「……………」

『……知ってるんだな』

「……あのサイトを突き止めたのは……………健二君だ」

侘助の言いたい事は理一には充分に分かる。理解もできる、正しいとも思う。だがそれでも、自分達にはそれほど多くの選択肢は与えられはしない。危機はいつでもソコに在り、何処までも自分達は手遅れなのだから。その中で、使えるモノは使う 何であれ、誰であれ。

『別にお前に言う事じゃねえけどな。あんまり苛めるなよ？ ……』

まだ高校生だ。少し位は手加減してやれ……………それだけだ』

「ああ、肝に銘じておくよ」

『そんじやな』

「助かったよ、じゃ」

通信を切ると思わず机に手をついてしまう。

この一件で、少なからず健二に負荷が掛かった事は分かっている。事件の大きさと深刻さは自分達をして眠れぬ夜を過ごしているのだ

から、彼の心的負担も推して知れる。そして、その事に負い目を感じながらも、今も尚、県警でプロテクトと格闘している事だろっ健二に、自分達は成果を求めてしまう。

ポンツ。と肩に手を置かれ、振り返れば

「今は仕方有るまい」

「部長」

本村は理一と並び、忙しなく動き回る特機の面々を眺める。

「贖罪も後悔も、全ては事件が終わってからだ。今は、捜査に集中しよう。我々には、他に術はないんだからな」

「……そうですね」

もう一度、ポンツと叩き、本村は振り返り歩き出すと

「私はコレから本庁に行ってくる」

皆にも聞える様に声を上げる。

「コレからですか？」

柴田が、こんな時間に？ と声を掛けるが

「事件が事件だからな、流石に時間がどうのとは言わんよ。ダム的事件も有るし、色々と話を通さなきゃならん所も多い。全く、面倒の上ないがな」

「ふふ。ご苦労様です」

本村が「明日には戻る。それまで、頼むぞ」と振り返れば

はっ！

全員が敬礼し、彼は本部を後にした。

『 けになつた電話は、電波の届かない所に居られるか、電源が入っていない為、掛かり』ピッ！ と切る。

繋がらないと分かっているのに、それでも掛けてしまう。夏希の携帯は健二への発信履歴だけが回数を増やしていった。

「何してるのよ……ばか」

縁側に座り思わず膝に顔を埋めてしまう。

こんな筈では無かった。この一周忌法要は、もっと楽しくて、思い出に残る集まりの筈だった。

沢山の親戚と、健二と、佐久間と、皆で大好きだった大婆ちゃんを偲しのんで、送つて、温かく過ごす。その筈だった。

だが、現実はそのはならない。多分の合致と微妙な不一致。そしてその僅かな差異の中で、健二の不在がソコに当たる。端的に言つてしまえば、彼が居なくてつまらない！ と言う所なのだろう。

だが健二が何やら必死で動いているのは感じられた。話していた親戚が関係しているのか、もしくは別の何かなのか、それは夏希には分からないし、必要であれば健二は話してくれるだろう。ソレが無い以上、自分から健二に問い詰める事は躊躇ちゅうちゆわれる。

再び携帯を眺め、もう一度リダイヤルを押そうかと指を動かし止める。

「あら？ 押さないの？」

「っ！ 理香さんっ」

夏希の背後に何時の間にか理香が居た。夏希の携帯を覗き込むように眺めている。

「いいいいいい何時から」

「ん？ いや、のど渴いたな、って思って台所行こうとしたら。五分位だけど」

「こ、声掛けてくれても良いじゃない」

「な、んか、深刻そうだったしね」

にひつ。と笑って夏希の隣に座り庭を眺める。

どことなく気不味い空気を感じる夏希。先に口を開いたのは理香だった。

「で〜？ こんな時間に何してんの？ もう一時よ〜？ 健二君と喧嘩でもした？」

「え？ いや、喧嘩とかじゃないけど」

「ふ〜ん」

どこか口籠る。理香は暫く、何も言わずに外を眺めていると

「……………れないんだあ」

「ん？」

小さく、話し出す。

「だから、健二……………最近、って言うか、コッチに来てから何かやってるみたいで、でも教えてくれなくて……………なんか、ちょっと、遠いつて言うか……………」

自分の中に有った、不安な気持ちの流れてしまう。

見えない事への 不安。

「ふ〜ん。ま、教えてくれないって事は、教えなくても良いからじゃないの？」

「え！ でも、それっておかしいでしょ！」

隠し事を肯定されるのは納得出来ない。

「恋人に隠し事って、ソレってつまり私を信用していないって事じゃない！ そんなのって」

「でも夏希にも有るでしょ？ 健二君に秘密の一つや二つ」

「無いわよ、そんなの」

「あら？」

ふてくされる夏希と意外な顔の理香。理香にとっては、ソッチが意外だった。

「残念ね。女は少し位謎めいていた方が男の子にモテるのに！ きっと健二君の心も驚掴みに出来るのになあ」

「ちょ！ ソレってホント？」

陣内理香。確かに理一の姉である。

「ホントよ。それに…………… 健二君。なぐんか、理一に似てんのよね」

「？ 理一おじさん？」

「そ」

手をつき夜空を見上げた理香の表情は、どこか昔に視線を送っているようだった。

「何やってんだか知らないけどさ。なんか、会う度に眉間に皺が増えてったみたい。昔はそれでも無かったんだけど、最近は特にね」

「ふぐん。全然気がつかないけど」

夏希も理香に習って空を見上げる。今日も星空は一面に広がっていた。

「でも………… 良い男になって行ったわよ。どんどん」

「うん」

なんとなく、分かる気がする。

「最近思うのよね。健二君、なんか、会う度に空気が張り詰めて行ってる気がするのよ」

「そうかな？ …… わかんないや」

「で、やっぱり思う訳よ。なんか、だんだん良い男になっていくなくって」

「っ！ そ、そう？ ホントにそう思う？」

思わず身を乗り出す夏希に笑いも零れるが

「本当によ。だから、そんな男の秘密の一つや二つでオロオロしてたら、どっかの女に搔っ攫われるわよ」

「ちょー！」

健二が浮気するとは想定外だったのか、思い切り身を乗り出しては

「健二に限ってソレは無いから！」

「え〜？ 分かんないわよ〜？」

「無い無い！ 絶対無い！」

「へ〜？ 信じてるんだ」

「勿論じゃない！」

真つ直ぐに見詰める夏希の、その頭に手を置いて

「なら、信じて待ってなさい」

「え？ 理香さ」

「その時が来たら、話してくれるし戻ってくるわよ……アンタの彼は」

それで問題ないだろう？ そんな安易な答えで、今は充分なのかもしれない。

「うん。そうだね」

夏希の表情にも、ようやく余裕が生まれてきたのだった。

「あ、でもあんまり理一に似ると婚期を逃すわね」

「私が居るのにソレは無いでしょ」

「あら？ 強気ね」

「もちろん！」

「……………」

「……………」

「あははははは」

法要を明日に控えた陣内家の家屋に、二人の笑い声が吸い込まれていったのだった。

やがて全てが寝静まり、静寂が支配した陣内家とは離れた場所で

「出来たっ！」

健二がある回答を導き出したのは、陽が昇る少し前。午前四時頃の事だった。

長野県警の一室に飛び込んで来た健二は、すぐさま一つの画面の前に立ちキーボードを操作する。桑田や他の署員も駆け付け囲む中、健二が打ち込んだ先では

「出ました！」

サイト内での出品者と落札者のやり取りが記録された、掲示板の全貌が明らかになっていた。

「直ぐに本部に連絡、コレを転送します」

桑田がすぐさま本部に連絡を入れる傍で、健二は掲示板に目を通しはじめる。

「ココに有る筈だ。核のやり取りの履歴が……必ず何処かに」

ソレは膨大な量の送受信だった。名前もアドレスも不確かな中での搜索は、まるで木の葉を森の中で探す様な途方も無い作業だ。だが、時間が有限であり人手も有限だ。

「コチラでも探そう。人手は多い方が良い」

「よろしく願います」

県警の者が桑田に言い、すぐさま動き出す。事態は、今急速に進展を見せたのだった。

只ひたすらに、掲示板の情報が検索されていく。既にこの情報はICPOにも提示されている。買った者。売った者。その双方に捜査の手が及ぶのも時間の問題と言う所だろう。

「あ、コレ」

「ん？」

一人が声を上げ駆け寄ると

「高性能爆弾五個。例のダムの奴ですね、コレ」

「やっぱり深沢もココで」

だんだんと、真相が近付いて来たと感じるのだった。

特機本部でも同じく検証は続けられていた。オンラインで長野とも繋がっている。アチラが深沢の履歴に突き当たった事で、菊田への道も開けた感じがする。

そして朝を向かえ、社会が日常の時を回し始めた頃、それは吉田の目に留まった。

「……た……有りましたっ！」

ざわっ！ と一斉にどよめき、理一は駆け寄る。

「どうだ？」

「支払方法……っと！ 受け取り方法、コレですね」

「何処だ」

吉田の見る画面がメインモニターにも投影される。そこにある受け取り方法は

「ロッカーの中に？」

「新宿駅東口……おい、東京のど真ん中で」

ソレは代金受領確認後に、新宿駅のロッカーに入れておく方法だった。その暗証番号とロッカーのナンバーは、前金受領のメッセージと共に有った。

「駅該当の防犯カメラの映像をつ！」

「待って下さい……出ます」

既に関係各方面とは緊急体勢を強いている。受け取り方法としては想定外と言う訳でも無かった。ただ、当ても無く探すには広大過ぎるというだけだ。

「場所は……」

「あ、あれですねっ！」

一人が見つけたそのロッカー。メッセージにある番号の箇所だ。

「時間を代金受領日まで戻せ」

「はい」

皆が見詰める中、早回しで映像が進められ

「ストッププツ！」

止めた画面に、大きなトランクケースを入れる男の姿が映し出された。

「コイツが」

「ICPOに送ってやれ。もう少し綺麗に出来るか？」

吉田に代わり柴田が座り

「フィルターに掛けます」

次第に鮮明になり姿を見せる。どうやら外国人、白人男性なのが分かる。

「データバンク、該当有りません」

「コッチはICPON任せる。我々の急務は爆弾確保だ。時間を」

「はい」

やがて時間を進め

「止める」

カチツ。止めた先で、ロッカーからトランクケースを運び出した男が映し出された。

歩み寄り、開け、運び出し……振り向いた。

「解析を」

「はい……もう少しで……嘘」

「？ 柴田？」

呆然とする柴田の前を吉田が覗き込み

「なんだよコレ」

同じく、呆然としてしまう。

「どうした？」

理一の声に我を取り戻した吉田は、それには応えず、ただその画面をモニターに出した。

「おい」

「ば、かな」

一同が呆然と、見詰める中

「……居場所を確認しろ……直ぐにっ！」

激しく急かす理一の前に、ケースを引く本村の姿が、鮮明に映し出されていたのだった。

「携帯のGPS、探査します」

柴田がキーボードを叩く横では

「本庁に問い合わせしましたが、今日の会議なんて予定には組み入れ

てません。昨夜から、部長は本庁へは行ってません」

「どうなってるんだよ一体！」

相沢や吉田の戸惑いを他所に柴田は携帯の居場所を突き止める。が
位置捕捉、あれ？」

「どこだ」

吉井が画面を見るなり、素早く飛び出していった。

「吉井？ 柴田、一体」

「ココなんですっ！ 本部施設内、休憩室っ！」

「なっ！」

慌てて相沢も飛び出していく。

「吉井さんっ！」

相沢が到着した時、既に吉井はベンチの下などを覗き、搜索を開始していた。自分も探し始めようとした時に

「有ったっ！」

立ち上がった吉井の手には本村の携帯が握られていた。

「くそ。一体なにがどうなってるんだよ」

忌々しく携帯を握り締める吉井だったが

「あれ？ 先輩、ソレは？」

「あん？」

携帯に付けられたシールに気付く。何かの絶縁テープだろう。相
沢が携帯が隠されていた場所を見れば

「ちよ、これ」

「どうした？」

立ち上がった相沢の手には、もう一つの携帯が握られていた。

「これが？」

「はい」

本部でその電話を理一に渡す。調べたところは只のプリペイド携帯。たった一つの発信履歴以外には何の足跡も付いては居ない。その電話番号すらも、近くのコンビニで販売された携帯電話の番号だった。

「準備は」

「OKです」

「よし」

言つて理一はそのりダイヤルを押す。

何度かのコールが大きく鳴り響く。既にスピーカーに音声は通り、相手が出れば逆探知も可能だろう。特機の探知を逃れるには余程のプロテクトが必要だ。最も、ソレが本村であるなら、それも十分に可能な話では有るが。

そして、遂に

『私だ』

本村広志が、その電話に出たのだった。

十八の陣

『どつやら……コト迄辿り着いたようだな』

その声色は驚くほど冷静だった。まるでいつもの提示連絡かのように。思わず

「部長つ。何かの間違いですよねっ！」

「何かの作戦とか……ほら？ 潜入捜査とか」

柴田と相沢が思わず叫ぶのも頷ける。それほどに本村は彼らにとって、信頼と信用に値する上司だった。

だが

『認識が甘いな』

「え？」「ぶちよ……」

それは、一刀に斬り捨てられた。

『全ての事柄は主観を混じえず客観的に見るべきだ。感情は沈めておけ。そうすれば、自ずと今の自分が成すべき事が見えてくるものだ』

どこか指導する様な口調すら、今の現実を否定してしまいそうになる。

「その客観的に見たところ、私には貴方の行動が理解しかねるのですが……説明していただけますか？ テロ対策特殊機捜隊本部長、

本村広志殿」

理一の言葉は静かに、されど真つ直ぐに放たれた。

『それでいい。犯人との交渉はその互いの立場を明確に認識した上

で進めるべきだ。誰がどの立場で何を語るのか、その中でこそ矛盾も意図した裏も見えてくる……君は私の最も優秀な生徒だったよ』

その言葉には素直な称賛が含まれていた。

「光荣ですね。では……………何故」

ソレが、分からない。そしれ語る。本村は、自分の言葉を

「ふむ……………何故、か

……………私が思った事もまさに同じだったよ。何故、と」

「答えになっていると思えませんが」

本部の全員が首を傾げるしかない。

「何故、この国は、ソレを見ようとしなのか……………」

まるでコチラの声など聞えて居ないかの様だ。

理一は吉田に視線を向けるが「スクランブルが掛けられています。逆探無理です」とサインが送られる。

「ソレ、とは？」

取り合えず、今はココから何かを掴むしか無い様だ。意識を本村の言葉に集中する。

「既にココに危機は有り悲劇は有るのだ。だがこの国はソレを見ようとはしない』

「貴方は何を」

「私は……………しかしそれでも、悲劇を刻み、更らなる悲劇を生まぬ為に戦いを続ける事に疑問は持たなかった。ソレは今この時も変わる事は無い』

「悲劇？ ……それはテロ被害、と言う事ですか？」

本村の記録にテロとの接点は無かった筈だと頭を巡らせる。

「だが……………この国はどうだ？」

何時の間にか、皆は聞き入ってしまう。

「テロなど起きない。起きる悲劇は事件であり戦争などでは有り得無い。戦争はいつでもモニターの向こう側で繰り広げられ、その現状に興味を示す事すら極稀だ。すぐ傍で起こった悲劇に同情と憤り

を感じたその者は、翌月には隣町で起こった交通事故程度の認識しか持ち得ない。自らの境遇への不満を声高に唱え、崇高な理想も、あげく蒙昧な理想すらも持とうとせず、ただ有りもしない約束された安寧な未来を漠然と期待する……何故だ。何故、この国は、この国の人々は……今ココに有る現実を、その目で見ようとしなさい」

「貴方が自身の国家思想を展開されるのは大いに結構です。ですが、それに見合う回答を出さないからと言って、貴方がソレを吹き飛ばして言いと言う理屈は無い」

「その答えの無い世界があの子を忘れた」

「？ 何を」

「その答えの無い世界が彼女を消したっ！」

「貴方は……」

それは、本村が初めて見せる激情だった。

「悲劇は繰り返された、だがこの国は何も変わらない。何も見ないし誰も認識しようとしないうっ！ 私がどうしても許せないのわっ……」

ソレは、彼の慟哭に聞えた。

「この国の人々の……その暴力的な迄の無関心さだ」

そこに在ったのは、怒りと憤り、そしてどこか、哀しみも……在るかに感じられた。

「……だから貴方は……この国に戦争を仕掛けるのですか？」

「たった独りで、彼はこの国に敵対する。」

「私が？ ……違うな。陣内、戦争は既に始まっているのだ……彼等は現にココに在り、彼等の正義と我々の正義は相容れ無い。為のテロリズムであり争いなのだ。彼等が私の大切な者を奪った時から、いや、それ以前から、戦争は絶えずココに在り続けた」

「私怨です。貴方の情念にこの国を巻き込むのは筋違いだ。部長、それは貴方の戦争だ。我々のではない」

理一には、本村の言葉を認める訳には行かない。たとえ彼が如何なる悲劇に見舞われようと……それは報復の免罪符たり得ないのだから。

『ふ……だろうな。もしかしたらコレは、私独りの戦争なのだろう……だが……』
声に、黒い影が舞い降りる。

『この炎と共に私の戦争も終わる。そして……この国の戦争は始まる……もう無視は出来ない。させない……もう誰にも、な』
「部ちよ」プツ！ と切れた。

本村の声が途切れた特機本部を沈黙が支配する。それだけ、彼の存在は大きく、言葉は響いた。だが

はつきりとした事実が残った。

「本村広志を全国に手配っ！ 危険度の高い爆弾を所持してると通告しろっ！」

理一は頭を切り替える。

「陣内さん」

「しかし」

戸惑いの声も上がるが

「犯人の姿が浮かんだ。ソレが事実でありソレが全てだ。我々に必要なのは解決の二文字だけ、ソレ以外には気を回す必要は無い」

ソレを防ぐ事が、彼への否定を示す事だと認識する。

見れば特機の面々は一様に戸惑いを隠せない。理一にもソレは理解出来る。出来るが、今はソレを良しとは出来ない。

「聞けっ！ 犯人は本村広志。現在、小型核爆弾を持って国内の何処かに潜伏中。我々は総力を挙げて本村を捕らえ爆弾を確保する……失敗は許されない。良いか？」

皆が理一に視線を注ぐ。

「例え誰が肯定し称賛しても……世界中の指導者が褒め、聖人が祝福し、神が加護を与えたとしても、私は彼を認めない。彼の言い分を認めない。彼の行為を認めない……例え誰を敵に回しても、必ず止めてみせる。すまんが、皆の力を貸してくれ」

既に、一同の表情に迷いは見えない。ただ

はいっ！

と、一斉に、共に戦う決意と意思を漲らせるだけ……

今、最後の戦いが幕を開けたのだった。

「本村さんが……」

健二には、ソレは信じられない事実だった。

「今さつき、全国の警察署に部ちよっ……容疑者の手配が完了したわ。本部でも彼の足取りを追ってる。きつと……時間の問題だと思う」

「……そうですか……」

桑田の声にも覇気は無い。彼は大きく、優しかった。頭では理解している現実を、心が拒絶してしまう感覚を覚えてしまうのは、何も桑田だけでは無いだろう。健二もまた、同じ想いなのだから。

「バス停まで送るわ。車借りてくるから、待っててね」

「あ、でも」

今はそんな場合では無いだろう。既にここ長野県警でも、大規模な一斉検問が実施されようとしているのだ。桑田に自分を送る時間

など無いとは思うが

「いいのよ。ココは長野県警の管轄だし。情報分析官の私に出来る事なんてあまり無いもの。それに……………」

今はまだ、気持ちが切り替わらない。まだ自分は、他の仲間の様にプロに徹する事が出来ない。どこまで行っても半人前だと自嘲してしまふ。

桑田の空気を読んだのか。健二もまた笑顔を見せ

「それじゃあお願いしようかな」

「っ。健二君」

思わず見詰めてしまふ。

「ココって乗り継ぎとか有るし、やっぱ迷ったら不味いですしね。流石に法要に遅れるわけにはいかないんで」

それで気が紛れるのなら、今はそれでも良いと思う。

「大丈夫よ。必ず間に合わせるからっ。ほら？ 私と一緒になら検問もフリーパスだしね」

「ははは。ソレって職権乱用です」

「良いの良いの」

少し、明るくなれた。今は、理一達を信じようと思う。そして、きつと本村の事も信じたいと願う二人だった。

特機本部では本村の足跡を辿る作業に追われていた。そしてソレと並行する形で、彼の声明の裏付けを取る作業も行われる事となる。ソレが何かの糸口になる可能性も多分に有る。そして

「陣内さんっ！」

「出たか？」

菊間が駆け込んで来たのを切欠に皆が集まる。どうやら何かを掴んだ様子に、事態の進展を感じさせ、ソレは正しい認識へと変化する。

「きつとコレですね。部……すみません。本村容疑者の」

「いいさ、部長でも。我々のすべき事に変わりはない」

どこか彼を容疑者と呼ぶ事に抵抗を感じてしまう。理一とてソレは充分に感じているし、無理に統制を取ったとしてもモチベーションには大きく関わってしまう。今は、彼を追う事だけを優先する。他の些細な問題は一時棚上げと言った所だ。

「それで？」

先を促す。

「はい。二十年前の事件です。爆破事件……ココが部長とテロの接点です」

ソレは当時の捜査ファイルだった。

「また随分と古い」

「こんな事が」

相沢や柴田には初耳の事件だ。吉田や吉井、菊間にしてもその場に居た訳ではない。その時、皆はまだ子供だ。

「確か、デイズニールランド内のゴミ箱だったかな」

理一の記憶に僅かに残る事件の跡。自分もまだ学生だった。だがテレビや新聞ではその話で持ちきりだったのを覚えている。ファイルを見ている柴田は

「だけど、とくに死者は居なかったようですけど」

「だが怪我人は居た」

「え？」

怪我人は十四名。だが死者は記録されては居ない。

「相馬智子ちゃん。当時六歳の女の子だ」

「それが？」

見ると確かにその子の名前は怪我人の中にあった。

「部長の……姪だ」

ざわつ。とざわつく。だが

「でも、記録では部長には」

本村の記録には身内にテロ事件の被害者が居るとは記載されていない。徹底的には無いにしろ、有る程度の身元調査は特機隊員には行われる。その過程では彼にその痕跡は無い。

「智子ちゃんのお母さんは部長の妹さんです」

「だったら記録に」

「母親の名前は相馬博美。旧姓飯富博美」

「え、でも名前が」

本村でも無い。

「部長の両親は部長が小学生の時に離婚してる」

離婚で苗字が変わり、結婚でまた変わった。だが吉田が思い出すに

「でもソレで記録が抜けるって有るのか？」

確かに古い話では有るが、ソレで消える訳でも無い。だが理一にしてみれば

「別に線として追う必要は無いだろうからな。犯罪者との繋がりには厳に調べるが被害者との繋がりにはソコまで厳しくは見ないだろう。

だが問題は……」

そこが、重要であり

「二十年前と今の事件。ココのラインが見えない」

「ですよ。第一、犠牲者が出たとは有りませんし」

そのファイルでは、居ない。でも

「それが……死んでるんです」

「え？」

皆が止まる中で、菊間は重い口を開く。

「相馬智子ちゃんは一週間の入院の末に退院」

「じゃあ」

何処で死が出てくるのだろうか？

「でも完治はしていなかったんです」

「それって……」

暗い雰囲気、重く押し掛かってくる。

事件は夏休みでこった返していた東京デイズニールランド内で起こった。

ゴミ箱に仕込まれた爆発物が爆発し、周囲に居た十四人が怪我を負い、場内は騒然となった。その時、少女は怪我を負った。

少女の怪我は頭部からの出血と左腕の骨折だった。運ばれた救急病院では適切な処置を施されたと言って良いだろう。入院の間も、退院した後の二日間も、少女は笑顔で平穩に暮らしていた。だが、頭部に受けたダメージは密かにその影響を増し、少女は突然昏倒したのだった。

不意の爆発事件と大勢の怪我人。十四人以外の大勢の怪我人も押し寄せる中、医師達は奮迅に働き、誰が何をミスした訳では無かったのかも知れない。そんな状況で少女の頭の中の僅かな影は、事件から二週間の時を経て、その小さな命を奪っていったのだった。

「忘れて……消えた、か」

理一の呟きが、ひどく大きく聞える。

彼の姪の死は世界に知らされる事は無かった。それは何処かの街で、何処かの病院で、何処かの少女が死亡した。ただそれだけのどこにでも有る話だった。テロリストの起こした爆破事件での死者はゼロ。怪我人の少女は忘れられ、そして消えた。その事に誰も……気付こうともしなかった。

だが、見える事も有った。コレが始まりの事件で有るならば

「狙いは……東京デイズニールランド、か」

理一に呼応する様に

「へりで向かいますっ！」

「行くぞ良則っ」

「はい」

「千葉県警に応援要請ヨロシク」

吉井と吉田、相沢と菊間は飛び出していった。

「県警に連絡。デイズニールランドにも連絡入れますか」

柴田もまた、動きを早めていく。

「頼む。パニックは避けたい、核の事は県警にも伏せるしかないだろうな」

「了解」

理一は人気の少なくなった本部の中で、メインモニターを睨みながら

「止めて見せますよ……誰よりも、貴方の為に」

ソコには、東京デイズニールランドの雄大な姿が映し出されていた。

「はい……着いたわよ。もう少しでバスも来るから」

「……………」

「健二君？」

「っ！ あ、すみません。え、ありがとうございます」

陣内家へ向うバスの停留所まで桑田の運転する車で送って貰った健二。事の顛末は、車中で本部の柴田から聞かされた。

確かに、健二に本村の気持ちは分からないでもない。自分には弟や妹は居ない。だけど、例えば真悟や加奈がテロ事件に巻き込まれて死んでしまったとして、自分はその時、何を思うのだろうか？

その死をテロによるモノでは無いただの事件や事故として留められ、誰も何の違和感も持たずに、そんな話も有ったものだとして過去の記憶へと消し去られる。

顔も知らないアカの他人の主義だか主張だかの為に殺され、だがソレを見ない人々にとつては、何の意味も持たない行為に、ただ巻き込まれただけの運の悪い話。そんなツいて無い子供が居たらしいと云うだけの、話。

ソコに意図が無かったとしても　コレは悪意と呼べないのだから……結局は

「本村さんは……本村さんには……許せなかつたんですね」

「健二君……」

今は、ソレだけが哀しい健二だった。

「そうね……元々部長は母一人子一人で育つて来たんだもの。家族と云うモノには人一倍の想い入れが有つたのかもしれないわね」

「でも……こんな事したつて、報われる事なんて一つも無いのに」

「それでも……なのよ」

もう、彼に言葉を届かせる事は出来ない。今はただ、皆の首尾を祈るだけだ。

「それじゃ、色々ありがとね、健二君。また何か進展が有つたら知らせるから」

「はい。桑田さんも頑張ってくださいね」

「私に出来る事なんて知れてるけどね。でも……ありがとね」

「はい。それじゃ」

桑田の車を降りて停留所の列に並ぶ。

街には人が溢れ、きつとディスプレイランドもココと同様に、否、もっと大勢の人で賑わっているだろう。健二も知る特機の面々は優秀だと確信する。きつと彼らなら、本村を止めてくれると信じる。

本村の話の所為だろう。自然と小さな子供に視線が向いてしまう。この子供達と同じ位の女の子が、その子達が生まれる前に、健二すらも生まれる前に爆発に巻き込まれた事が原因でこの世を去った。そして今、その子の死を刻んだ男が、更なる悲劇を生み出そうとしている。その男の正義のままに。

脳裏にウィリーの言葉が浮かび上がる。互いの正義と無くならない争い。否定したい彼の現実の中に、今まさに自分は立っている実感してしまう。

「それでも僕は……」

ソレを認めたくは無い。諦めたくは無い。諦めたらソコで終わりだと、教えてくれた恩師の言葉を、今は信じたい。

そして 見詰める先の親子の姿に……

「…… え？」

思わず、呆然としてしまう。呆然と、呆然と…… 呆然と……

「…… おい…… 遅いんだよっ！ 僕わっ！」

桑田の前の信号が青に変わり、いざゆっくりとアクセルに置く足

に力を入れようとした時、パァー！と周囲から一斉にクラクションが鳴り出す。

思わず辺りを見渡そうかと思った瞬間

ドンッ！と何かが、ゆっくりと進み出した自分の車のボンネットの上で弾けた。

「きゃあああ！」

思わず振るブレーキを踏んだ。誰かが自分の車に飛び込んで来た事は分かったが、あまりの出来事に意識が追いつかない。だが、その飛び込んだ人物はすぐさま起き上がり桑田の車の助手席に飛び込んで来た。

「ちよっ！ え？ 健二君？」

「出して下さいっ！」

突然の事態に思考が追いつかない桑田は、それでも

「一体如何したのっ！」と健二を問い詰めるが、返って来たのはまるでソレを遮らんばかりの

「早くっ！」

鬼気迫る健二の怒声だった。

「ねえ、誰？ あれ」

「さあ？ なんか母さんの知り合いだっつて」

「ふん」

法要の用意も慌しい陣内家の廊下で、返事をして去る理香を横目に見ながら、直美は玄関先に何となく視線を飛ばす。ソコには万理

子の笑顔が有り、程なくして興味をなくした直美は居間へと足を向けた。

そして、万理子は

「本当に、お久しぶりねえ」

「中々に時間が取れないもので、申し訳ありませんでした」

「良いんですよ。こうして来てくれた……母さんも喜ぶわ。さ、ど
うぞ上がって下さいな」

彼に笑顔で応え

「広志さん」

「お邪魔します。万理子さん」

本村広志を、陣内家へと招き入れたのだった。

十九の陣

「……………くそっ。繋がらない」

理一は家の電話を何度もコールするが一向に繋がらなかった。そして無線の音声からも

『佐久間の携帯もずっと圏外のままですっ』

健二の声は切迫していた。だが理一には確信が持てない。

「しかし健二君。どうして陣内家なんだ？ 彼と陣内の接点など」
自分しか無いだろう。ソレが理一には分からない。

突然、健二から緊急連絡が入ったかと思えば

『本村さんの行先は陣内家ですっ！ 応援を手配して下さい、大至急っ！』

声の後ろで響くサイレン音は、健二達が家に向って車を走らせている事を伺わせた。まさかと思いきや理一が家に連絡を取ってみれば繋がらない。それが今の状況だった。

仮に本村が陣内家に居たとして、特機の装備の中には携帯や発信機の電波を妨害する装置もある。電話線は切断するだけで外部との通信を遮断できる。今の状況は、確かに本村の存在を肯定出来る状況とも言えた。だがソレすらも可能性に過ぎない。何らかの設備的なトラブルの線も充分に考えられる範囲だ。

『有ったんですよ』

「？ 有ったとは？」

健二の声は悔しさを多分に含んでいた。ソレは気が付けなかった事への後悔。

『接点です。本村さんと陣内ですっ』

「まさか」

理一には思い当たる節が無い。だが

『理一さん。本村さんは母子家庭で育った、で間違い無いですよね』
「ん？」

柴田を伺えば「確かに記録ではそうなってます」とモニターを見ながら返事が来る。

「そのようだが」

『だったら妹さんじゃ無い、本村さんの苗字が変わったんです』

「あ」

結婚して苗字が変わったのは確かに妹の方だ。だが、両親の離婚により苗字が変わったのは

「そうか。だがソレが何の関係が」

『妹さんの旧姓は飯富でしたよね？ だとしたら本村さんの旧姓も同じ筈です』

「それはそうだろうか」

『僕はその名前に心当たりがありません。と言うか、飯富と云う人に会ってます。去年、この街の、陣内の家で！』

「え？」

健二がこの街へ来る事など陣内家に用事が無ければ無いだろう。

しかも家で会ったとは 考える理一の耳に「嘘っ」と柴田の声が耳に入る。

「どうした？」と聞いたが、ソレが全ての答えに繋がった。

「あの、妹さんの父親、いえ、本村さんの親御さんなんですけど」

「だからソレがどうし「飯富警視総監なんです」た、なんだと？」

柴田のデスクの画面を覗き込めば確かにその情報が映し出されていた。

「……去年の、葬式か」

『そうです』

理一の呟きを健二は肯定した。

あのラブマシーンに対して栄は仮想世界ではなく現実世界からの、人と人との繋がりを持って対抗し退けた。その中に、確かに飯富総監の名前が有ったのを覚えていた。彼女の葬式のあと、未成年の健二に無礼講だと言って酒を飲ませてきた人物が警視総監だったのも記憶している。栄と飯富は、古い友人だった。

『有ったんですよ、接点が。本村さんと、栄おばあちゃんには』
「だが待て」

接点は分かった。だが

「だからと言って何故ソコを狙う」
それが繋がらない。

『本村さんが言う、忘れられたあの子は姪御さんでしょう。でもじやあ消された彼女は誰です？』

「それは」

それも姪だろう？とも思うが

『理一さん。本村さんは悲劇が繰り返されたと言ったんです。だとしたら、本村さんにとっての二度目の悲劇は誰です』

「まさか健二君は」

健二の考えている名前を思い浮かべるが、それは不確かに過ぎる。だが健二は確信を持つ。

『栄お婆ちゃんですよ』

何故か健二には確信が有るように聞える。

「馬鹿な。アレはテロとは」

無関係な死だと思う。ラブマシーンが起こしたOZのトラブル。確かに万作の端末に情報が送られなかった事はその理由の一つには数える事が出来るのだろう。だが彼自身が言う様に、栄は天寿を全うしたと言っても良い状況だ。だが

『解釈の違いです』

「健二君？」

『確かにアレはAIが引き起こしたOZのシステムトラブルですし、お婆ちゃんも寿命だったのかも知れません』

「だったら」

『でもソレは一般の考え方です。例えば僕や侘助さん、佐久間はきつと違う視点を持っています』

「どう言う事だい？」

自分達と彼等の認識の違い。それは分からない。

『僕等にとって、ラブマシンの只のソフトウェアや演算システムじゃないんですよ。高度な思考ルーティンを持った人工進化を遂げる人工知能。いえ、端的に言い換えれば、ラブマシンは電腦生命体とも言える存在だと言ってもいい』

「それは君達、コンピューターに詳しい者達から見て、と言う話しかい」

『そうです。そしてソレを一個の生命体と仮定するなら、意図して無差別にインフラを狂わせ、原発にあらわしを衝突させようと目論み制御システムに介入したあの事件は、ラブマシンと言うテロリストがサイバーテロを仕掛けたと見る事が出来ます』

それはそのまま、事故では無く事件で有ると見る事が出来ると言う意味を特機にもたらず。

『システムトラブルが一端を担った。でもそれをサイバーテロに置き換えてしまえば、栄お婆ちゃんの死に、テロが一端を担ったと考えられます』

「では婆ちゃんが……彼女、か」

『どうして今日なんですかつ。栄お婆ちゃんの一週忌と重なる日に事件が起きる。二人に接点がある以上、偶然だとは思えないっ！』

「だが仮にそうだとしても、コチラの可能性も否定は出来ない。与える被害としてはコチラの方が絶大だろう」

田舎で爆発させる事と都市で爆発させる事 被害の面で、その効果は比べるべくも無い。

『単純に被害を出そうと思えば東京のご真ん中でも良いじゃないで

すか。どこかのトイレに閉じ籠って様とロッカーに押し込めておこうと被害は変わりませんよ。爆発地点に大した意味を持たないでしょう、あの爆弾わっ。本村さんが姿を消す必要も無い。極端に言えば自殺してたつておかしくない』

「健二君」

『だけどソレは無い。爆弾を持ち出して、理一さん達に気付かれても話をした。本村さんにとって、この爆弾は自分の戦争を終わらせて、この国の意識を変革するために、意味を持たせたモノでなければ駄目なんです』

健二の言葉と自分の考えを合わせていく。確かに、一本の筋は通ったかにも思えるが、今はただ時間が無かった。

「長野県警に応援を頼む。桑田」

『っ……はい!』

無理な運転を続けているのだろう。どこか彼女には余裕が無い。

「連絡を忘れるな。状況を確認したら」

応援を待たせよう。そう言う矢先に、事態は理一を通り抜けた。

『見えましたっ!』

「健二君?」

ソレはもう、陣内家の目の前だった。

『桑田さんっ! アソコっ!』

『有ったっ! 車ですっ! 部長のくるっ! 健二君待つて!』

「桑田? 如何したっ!」

切迫した二人の音声に特機の皆は静まり返るが

『く ですよっ! こ ますっ!』

「桑田? おいつ! 聞えないぞ桑田っ!」

雑音が入り出し通信が出来ない。それは

「まさか部長のスクランブルのエリア内に」

「くそっ!」

佐久間や侘助の携帯に繋がらないのと同じ状況下に健二と桑田が

入った事を意味するものだ。

「長野県警に緊急！ 爆発物処理班を急行させろっ！」

「はいっ！」

柴田と共に一斉に動き出す仲間達を見ながら、思わず拳を握り締める。住み慣れた我が家が、ひどく遠くに感じられた理一だった。

「何かしら？」

突然聞えてきたサイレン。それが次第に大きくなる事に夏希が気が付くと、ソレは家の玄関先までは言っただけ。

「なにになに」

「パトカーがー！ー！」

「デカだデカー！ー！」

子供達が騒ぎ出し法要の為に着替えを済ませた一同が何か？ と玄関を見れば

「健二！」

健二が土足で上がりこみ駆け込んで来た。

「ちよっ！ 健二靴靴！」

「おいおい！ 何だよお前、て誰だよその人！」

夏希と翔太も、健二に靴を脱げと言いたいのかソレは誰だと聞きたいのか、訳が分からなくなるが、健二とソレに続く桑田はまるで二人を無視して走りすぎる。次々に言葉を放つ他の家族もかえりみず、健二は仏間へと繋がる襖を思い切り開け放つ。

そこには驚いた顔で「健二君？」と座る万理子と……

「もう……」

健二の声にも振り向かず霊前に手を合わせ瞑目する、本村広志の後姿が在った。

僅かに遅れた桑田は健二に並ぶや

「投降して下さいっ！ 部長！」

桑田はその手に銃を構え、本村の背中に銃口を向けるのだった。

「……もしかしたらとも思っていたが……まさか桑田がな。いや……君の入れ知恵かな？ 健二君」

合掌を終えた本村は静かに姿勢をただし、遺影を見詰めながら言葉放了た。

「もう止めて下さい、本村さん」

「部長。何かの間違いですよ？ きつとコレには訳が」

桑田にとって、本村は大きな存在だった。慣れない特機の任務と緊張の中、支えになってくれたのは他でもない彼である。だが桑田の思いとは別に、非常な現実が続いてゆく。

「桑田……お前も特機の一員なら、テロリストを前に銃を抜いたのなら」

ゆっくりと立ち上がり静かに振り向いた本村は

「躊躇わずに撃て」

バンっ。と言う音を響かせ、桑田の肩を撃ち抜いたのだった。

きゃあああ！ と辺りから悲鳴が聞える。

健二の様子に皆が集まれば、母の客が健二と共に来た女性を銃で

撃つたのだ。まるで意味が分からない非常事態だった。

救急隊員や消防の頼彦達にとつても、拳銃などは非日常のモノに過ぎない。アメリカで暮らす佐助は有る程度の耐性が有るとはいえ、それでも人が撃たれて平然と云う訳は無い。

ガチャン。と銃を落とし肩を抑える桑田の顔には脂汗が滲んでいた。

「捜査官の制限は解除してあつた筈だ。お前には私を撃つ義務が有つた」

「……部長」

自分を見下ろす本村の顔が歪んで見える。悔しいからか、それとも悲しいからなのか、それは自分にも分からなかった。

「どうせもう止められん。ならばいっそ」

トリガーに掛かる指に力を入れた時

「動かないで下さいっ！」

「……ほう」

健二は床に落ちた銃を拾い、その銃口を本村へと向けていたのだ。つた。

「健二っ！」

人を撃つた男に健二が銃を向けている。その光景は夏希にとってまさに絶望的な光景に映る。撃たれた桑田が健二に重なる。

逃げる様に言おうとした夏希を遮つたのは、逃げる様にと叫ぶ健二の声だった。

「みんな早く避難して下さいっ！出来るだけ遠くに！」

銃口と共に視線を逸らさずに、精一杯の怒声を響かせる。

「でもっ！」

「逃げてられっか！」

夏希を遮り万助は腕まくりをして一步でる。頼彦や侘助も真剣な表情で足に力を入れるが

「最悪、被爆の恐れがありますっ！ココから離れて下さいっ！」

健二の言葉は、今一つ現実感に欠けていた。

「被爆って」

「何行ってるの？ 健二君」

「一体」

聖美や雪子、和雄の言葉をもどかしく思うも、既に健二には余裕は無かった。だから言う。今、ココにある現実を……

「そのトランクに核爆弾が入ってますっ！放射能漏れの危険がありますから早く避難をっ！」

思わず、時が止まる。聞いた言葉が頭に入ってこない。だが

「子供達も被爆させる積りですかっ！急いで下さいっ！」
子供達。そのフレーズは止まった思考を動き出させるに充分だった。

「アンタ達早くコッチにっ！」

「真央、真悟っ！」

「出なさい佳主馬っ早く！」

一斉にその場を後にする。

「夏希も早く！」

言われ急かされるも

「でも、健二っ！ 健二が」

「いいから来いっ！」

「健二ー！ー！」

縋る夏希は和雄と翔太に連れ出された。

陣内家の血なのだろう。万作を始めとする陣内家の男達は、その場に留まり健二の背後に在った。

避難する様に言おうか？ とも思うが、思わず顔が綻んでしまう。

分かっていたことだ。この人達は……きっとこういう人達だと。

「何処に逃げても無駄だよ」

「本村さん？」

本村の笑顔はどこか澄んでいた。

「タイマーは作動中だ。もう時間は無いよ」

背後の一同が息を呑むのを感じる。

「だったら止めて下さい。貴方ならソレが可能な筈です」

「無理だよ。もう私にも止められない」

「そんなんっ！」

ソレが本当なら、全てが終わる。

いや……

「だったら、僕達が止めます」

なにも、終わってはいない。自分はまだココに居て、爆弾は今ココに有るのだから。諦めた時が終わった時なのだと、健二は知っている。そう教えてくれた人を、自分は知っている、

「その為には、私を撃たなければね」

「覚悟は出来てます」

銃を握る指に力が入る。

「ならば撃ちたまえ。でなければ……桑田君は死ぬよ」

本村は一度も、その銃口を桑田から逸らしてはいない。

健二の指は、僅かにトリガーに喰い込んでいくのだった。

一方、家の外では

「警察に連絡しないと」

「きつともうしてるわよ」

「早く車出して」

「でも父さん達まだ中だし」

皆が一樣に右往左往している。突然に核爆弾が有るから逃げると言われても無茶と言うものだ。そんな中、佳主馬は真剣に家を睨みつけている佐久間に近付く。

「佐久間さん？ 佐久間さんっ」

「！ ああ、佳主馬君か」

よほど考えに没頭していた様だ。

「どうしたの？」

「ああ、何か手は無いかと思ってさ」

「手って……」

言っている事は予想出来るが、これは確認が必要だ。それほどに危うい事を

「加勢する方法」

「やっぱり」

佐久間もまた健二の親友だと実感した。

「でも相手は拳銃持ってるし、コッチは」

銃は無い。それに殆んどが女子供だし、体力的に自信の有る者達は皆まだ家の中だ。流石に

「戦力不足だよ」

それが佳主馬の結論だ。

無論、佐久間もソレは承知しているし、だからこそその考え事だ。

やがてウロウロと歩き出した佐久間に皆が視線を投げると、不意に佐久間は立ち止まる。緊張の走る皆に

「すみません。手を貸して下さい」

佐久間の言葉に、反論は一つも上がらなかった。

万助達が動けば撃つと言い、その姿勢を崩さない本村。だが

「どうしてですか」

「ん？」

健二には、やはり聞かすにはいらなかった。

「こんな事したって、誰も喜びはしないのに」

それは確かな筈だ。本村の行為は、栄の最も嫌う行為の一つではない。

「そうだろうな」

それは本村にも分かっていた。だが、ソレを圧して尚、彼はこの穏やかな笑みを見せる事が出来た。全ては、覚悟の向こう側と言う事だ。

「私はな、健二君」

「はい」

「ただ我慢が出来なかつたんだ……出来ていた筈の我慢が、出来なくなっただけなんだ。だから、誰に喜んで貰おうとも思っていない

よ

「本村さん……」

本村は真つ直ぐに健二を見詰める。

「本村さんの世界観は聞きました。主張も、どこか分かる気がします」

「そうか」

互いの視線が、だが違うのだろうか？ と互いに言う。

「でも僕は賛同出来ません」

「君は若い。私も君の年の頃は同じだったよ……だが今はもう……いつまでも子供のままで居られないと言う事だ。そして、この国は何時まで経つても子供もまだまだ」

どこか憤りが伝わる。

「我々は飢えを知らない。我々は隣人を殺す事を知らない。我々はその手を血で染める事を知らない。我々は流れ出る血の涙を知らない。何時まで経つても、何時まで経つても」

「それは必要な事ですか？」

知らなくても良い事だろう。人間が人間らしくある為に……

「それは世界では起こっている日常だ」

知らなくても良いと何故言える？ 人間と云うものは、そういう生き物でも有るのだから……

「必要とは思えないかね？ 我々もまた世界の一員だろうに」

「この爆発が、ソレを教えるとしても言うんですか」

「どうだろうね」

それは本当に分からないと言った風だ。

「こんな爆発だって、いつかは、いや、そう遠く無い時間でこの国は忘れていくのかも知れないね。所詮、その程度の事だろう」

「だったら」

「だが痛みは知る事が出来るだろう」

その視線は強かった。

「人の痛みを理解出来るほど人間は想像力豊かには出来ては居ない。

だが自らの痛みは覚えているものだ。ソレが理不尽に受けたものであれば尚更だ」

「……………」

「自分自身の事にすら真剣に向き合えないこの国の人々に、私は痛みを思い出させようと言っただよ、健二君」

健二には、ソレは受け入れられない。

「違う。貴方はただ、自分の受けた痛みと悲しみを、皆にぶつけたいただけだっ！」

「……………違う。私はこの国の未来を憂う。今それ「嘘だっ！」……………本当だ」

本村の正当性を認めてはならないと自分に言い聞かせる。仮にそれが正しくて、宇宙の真理であつたとしても、ソレが大勢の人の命を消し去って言い理由にはならない。

「悔しくて苦しくて憎くて憎くて。でも我慢した。我慢したのに忘れられて繰り返した。貴方はただ、貴方の現実を否定したいだけだ。変えたいだけだ」

「今の現実こそが誤っているのだ。なぜソレが分からないっ！」

「歴史の果てに辿り着いた今日です。過去と今が違うなら、これから先の世界だつて違う筈です。仮に誤つてるとしたつて、絶望する必要なんで無いっ」

「それでは手遅れだっ！ 私わっ」

「急ぎ過ぎですよ」

「三十年後は君も同じ事を言っつ！」

「だとしたら誰かに止めて欲しいです。そんな僕を」

「ならば私を止めたまえっ！ 小磯健二君っ！」

本村が指に力を込め、桑田が思わず目を閉じる中……………

健二は引き金に掛かる指に力を込める……

が。その時

スツ！ と本村の横の襖が開けば、何かを持った佐久間が居た。

「え？」

「ん？」

健二と本村が一瞬気を奪われた後

「今ですっ！」

佐久間の声と共に手にしたホースから熱湯が本村に浴びせられたのだった。

「うおおお！」

温泉が噴出している陣内家専用源泉。その源泉のポンプから直接噴出す源泉の威力そのままに本村へ放水したのだった。

威力以上に温度は可也の高温と成っている。ソレを突然浴びせられては堪ったモノでは無い。思わず体勢を崩し銃を手放してしまった本村が、瞬間顔を上げ見た光景は、万助や頼彦、克彦に邦彦。それに侘助と翔太の六人が、一斉に飛び掛ってくる光景だった。

覆い被さり、本村を押さえつけている一同を走りぬけ、健二はトランクケースへと駆け寄り、その鍵を慎重に開け覗く。

「健二君？」

肩を抑えながら立ち上がる桑田に振り向き

「有りました……」

健二はとうとう、辿り着いたのだった。

「SADMです」

タイマーは

00:10:38

終幕へと近付いていたのだった。

十九の陣（後書き）

どうも、最近遅筆な駄目作家です。 ><
いや、すいません。なにぶん忙しくてクテクテです。

一つ、報告を。

作中で飯富さんを警視總監と致しました。

映画のサマーウォーズでは『小幡』と云う名前が警視總監でしたが、小説版では『飯富』さんとなっていました。

私のシリーズは小説版をベースにしていますので、總監には『飯富』さんを採用と致しました。

違和感を覚えた方、申し訳ないですがご理解下さい。

では……多分次で終幕となります。

最後までお付き合い頂く事を、切にお願い致します。

それでは、失礼^^ノシ

終章

「陣内さん……」

特機の本部、その重く静まった空気の中で口を開いた柴田の前で、机に膝をつき握り合わせた拳を額に付ける理一が居た。この場で決断を下す立場に居るのは自分であると理解している。その決断を下した筈の本村が、今はココには居ないのだから。

目を開いた時、既に迷いは振り切っていた。

「……桑田」

『はい』

音声の向こうで緊迫した声が返って来る。

「怪我はどうだ？」

『大丈夫です。問題有りません』

「そうか」

確かに銃で撃たれた。だが幸いかすり傷であり医師である万作が素早く処置した。多少の痛みは有るが大した事は無いと言える。

「現在、長野県警の爆発物処理班がそちらに急行している」

『早くお願いします。もう時間が、八分切ってます』

「現在、長野県は上田わっしょいの為に普段より多くの人流れ込んで来ている。その上、一斉検問の為に交通事情は麻痺状態に近いと言って良い。到着迄、おそらく十五分はかかるだろう」

『じゃあへりとか』

「今からへりに切り替える事はオプション的に不可能だ。現状の移動手段が最速だと判断する」

『でも時間が』

「……………」

「？ 陣内さん？」

思わず握り合わせた拳に力を込める。だが、もう他の選択肢は無い。

「お前が解体するんだ」

「っ！ 陣の「やるんだっ！ それとも健二君に替わって貰うかっ！」ちよっ！ そんなっ」

桑田が声を荒げるのも充分に理解出来る。彼女はまだ配属されて一年になるうかと云う情報分析官だ。現場も初めてだろうし、爆弾の処理などした事も無いだろう。だがもう、自分達に余裕は無かった。

「コールを聞いたのはお前だ。カードチェンジはもう無い」

「わ……たし……」

声から力が抜けていくのを感じる。今はソレは駄目だ。

「既に米軍からSADMの構造は提供されている。お前はコチラの指示に従うだけで良い」

「……………」

「大丈夫だ、難しい事じゃ無い。お前なら出来る……………桑田？」

沈黙を続ける彼女に不安を覚える。ココで折れられては全てが終わる。本当に陣内の家の者に託すしかなくなる。ココに至り、民間人にソレを背負わせる事はなんとしても避けたい。

「……………いつも通り……………指示通りに」

「そうだ。いつもお前がやってる事だ。お前の仕事が正確なのは皆知ってる」

「わかりました」

そうして、全ては桑田美也子に

『指示、お願いしますっ!』

委ねられたのだった。

陣内家は一斉に動き出していた。

桑田は理一からの電話を聞きながら

『蔵へ運ぶのを手伝って下さいっ! 揺らしても大丈夫ですけど強い衝撃は与えないで下さい』

「わかったっ! 邦っ! 克っ!」

「「おう!」」

頼彦の声に二人が答えトランクケースを慎重に運び始める。

『健二君』

「はい、出来てます」

健二と佐久間はノートパソコンを持って来た。既に映像回線で特機と繋がっている。これで目視しながら指示を仰げる。

『すみません。それじゃあ閉めて下さい』

桑田が中に入り、万助は蔵の扉を硬く閉めた。

「頑張ってくださいね」

伺う健二に「まかshといて」と笑顔で答え、桑田は独りになった。万が一、解体の際に放射能が漏れてしまいかもしれない。その為の処置だった。

「OKです。蔵の中です」

『よし……残り時間は?』

「はい……あと五分二十秒」

時間はすぐソコまで来ている。

『大丈夫だ。間に合うよ』

「はい」

『よし。それじゃあ先ず、トランクを開けてカメラのセットを』

「はい」

鞆を開け、爆弾がその姿を見せる。改めてみても複雑な装置に気が沈む。

『大丈夫だ。実際にはそれほどの部品には触らんよ。こけおどしと思つて良い』

「はい……セット、どうですか？」

『ん。チョット待て』

向こうで理一が誰かと話しているのが聞えるが

『OKだ。画質良好だ』

「はあ〜」

小さく、一歩進んだ。

『それじゃあ、タイマーの周りに有る六本のネジを左角から時計回りに外していけ。ネジも時計回しに』

「はい」

少しづつ、確実に 桑田は爆弾を解体していった。

『よし。次は左上のシリンダーから伸びてる黄色のコ、じゃない赤だ！ すまない赤だ』

「どっちですかっ！ 黄色？ あ」

『赤だ！ 『赤よ美也子』赤いコードだっ！』

「赤で良いんですね」

特機の者達が一斉に叫び出す。僅かな間違いが致命傷に成る。

『すまない、赤いコードだ。そのコードをバイパスケーブルで挟んで』

「ちょ、そんな物」

『ある。ほらその左の三番目の工具、そう、ソレだ………OK。出来るじゃないか。ソレを信管から伸びてる黄色のコードに繋げ』

「はい……あの、陣内さん」

『ん？』

「時間は？」

もう桑田にはソレを見る勇氣は無い。

『大丈夫だ。まだ……三分近くあるよ。余裕じゃないか、桑田』

「汗だけです。お風呂入りたいです」

『ウチの温泉に入ってきて来い。なかなか良い湯だぞ』

「是非お願いしますね……出来ました」

『よし』

実際には既に二分三十秒を切っている。

外では皆がひたすら結果を待っていた。万が一の被爆に備えて子供達は母親達と共に家屋の中から伺っている。男達も中には入らない。だが、せめて近く共に有りたいと願う。

「桑田さん……」

健二は、自分の不甲斐無さを噛み締めながらも、今はただ成功を祈るのみだった。

「よし。出来ました」

『……』

「陣内さん？」

『ああ、すまない……よし。次で最後だ。信管の先から右上の赤いボックスに出ている四本のコードの』

「はい」

『………』

「陣内さん？ どれですか？」

返らない言葉に不安を覚えるが

『四本の中の……………紫のコードを切れ』

「はいっ」

迷い無く

パチンツとコードを切った時

00:00:38

そのタイマーは、止まったのだった。

『止……………まった……………止まった！ 止まりましたっ！』

うおおおおおおおおお！

桑田の言葉が響いた時、特機本部は歓声に包まれたのだった。

肩を叩き合う者、抱き合う者、机の上の書類をばら撒く者。皆、
一様に喜びの歓声を上げていた。その中で

「良くやった、桑田。ご苦労さん」

『はい！ はいっ…』

「もうすぐ処理班も到着するだろう。通信はもう良いからお前も早

くソコから出る。放射能漏れは無いとは思うが、念の為だ」

『了解です。でわ』

「ああ」

通信を終えて、疲れきった様に椅子に深く沈む理一。

「お疲れ様でした」

柴田がコーヒーを差し出し労を労う。

「ああ、すまないな。君も、ご苦労だったな」

「いえ」

礼を言つてコーヒーに口を付ける理一に

「でも、陣内さん」

「ん？」

聞いておきたい事があつた。

「どうして紫だったんですか？」

あの最後の四本。アレは犯人にしか分からない。理一はその中で偶然当たりを引き当てたに過ぎないのだった。

「ああ。死んだ婆さんがアサガオが好きだった……なんとなくソレに似てる色だったから、かな」

「それだけですか？」

「そうだよ」

なんともあつさりとした理由だったが

「桑田は頑張ってくれたからな。ソレ位の重荷はコツチの担当かと思っただけだ」

「……そうですか」

「冷や汗かかせたか？」

どこか楽しそうに聞いてくる。理一にも少しは余裕が戻ってきたらしい。そうとなれば、柴田としても手加減は要らないようであり

「全くです。ハッキリ言つて死ぬかと思いましたが」

「はは。ソイツは悪かったな」

「駄目です。コレは埋め合わせしてもらいますから」

笑顔を見せれる。こんな大事件の後にこの笑顔を見せれるのなら、捜査は上々と言ったところなのだろうと思う。

「分かったよ。その内、皆に飯でも「今度飲みに連れてって下さいねっ。二人つきりでっ！」は？ おいおい」

まさかそう来るとは思わなかったが

「良いじゃないですか。ね？ 約束ですよっ！」

理一の返事を待たずに行ってしまった。

何とも固まってしまっ理一だったが

「はあ……最近の若者は分からね」

今は、深いことは考えないでおこうと、コーヒーをすすめるのだった。

やったああああああ

陣内家もまた歓声に包まれていた。

抱き合い喜ぶ家族にあつて「健二っ！」と飛びついてくる夏希を抱き締める。

「夏希さん」

「うん」

護りたい者を確かに護れた。そんな感慨を受ける。

「部長」

「もう、その呼称は無意味だよ」

桑田は本村の前に佇んでいた。その手に手錠を掛けた時、自分の方がうな垂れてしまった。ココに至らなければ成らなかった事が悔

しくて悲しかった。

気が付けば、陣内家の皆も桑田の背後に立っていた。

一步、万理子が前に出れば

「広志さん」

「……はい」

万理子も本村も、その目は穏やかだった。

「また、いらして下さいな」

笑顔で言う万理子に皆が驚くが

「いつでも、この家はココに在りますから………忘れないで下さいね」

「万理子さん」

本村はただ俯く。

(………なんだろう)

その光景に、健二は何か違和感を感じる。

光景に？ いや(違う………あれ?)どこか意識が散漫となる。本

村の表情はどこか穏やかで、どこか砂を噛む。

犯行が阻止されたからだろうか？ だが健二の目に、本村は敗者には映らなかった。では？

(何か………忘れてるの………あれ？ なにか………)

記憶を手繰る。

時間を遡る。

何処から何処まで繋がって………「あれ？」

「健二？」

呆然とし始めた健二に夏希が違和感を感じた。

健二の記憶に 言葉が浮かぶ

高性能爆弾五個。例のダムの奴ですね、コレ

確かにそう言った。そう出ていた。そしてダムには

「四つ……だ。じゃあ爆弾は」

その時、本村と視線が交わった瞬間にソレは確信に変わる。

素早く家の中を見回すと、本村の座っていた仏間の直ぐ脇にボストンバックが一つ在った。昨日までの誰の物とも違うと記憶する。

第一、家の者がアソコにバックを置きつ放しにする意味が無い。

駆け寄って開けば

00:00:10

既に全ての選択肢は無かった。

突然の健二の行動に不審な目を向けている一同に構う事無く、バックを掴んで駆け出す。ただ大声で

「爆弾ですっ！ 伏せて下さいっ！」

叫び走る健二を合図に、皆は女子供に覆い被さる様に伏せ

健二の背に手を伸ばす夏希を押さえ込んで

裏庭目掛けてバックを放り投げた健二に

「健二……っ！」

と叫ぶ。

瞬間、激しい閃光と大きな爆発音が巻き起こり、陣内家を爆風が襲ったのだった。

「うんしょ」

人の隙間から這い出た子供達が見た光景は

「何か出たー」

「温泉出たー」

温泉の小屋を吹き飛ばし、再び湯を吹き上げる光景。

やがて皆が起き上がり見詰める先で飛沫と煙の中から出てきたのは、こめかみから血を流し、それでも笑顔の、小磯健二だった。

事件は終わり、陣内家では法要もソコソコに、庭でバーベキューパーティーが開かれていた。

既に警察や近所の人達も訪れ結構大変な騒ぎになってはいるのだが、それでも気にしないのがこの家の凄いところなのかも知れない。

「絶対に、また来るんですよ」

この後に及んでその言葉を本村に言えるのであれば、万理子の言葉に逆らうものは居なかった。それで、きっと良いのだろうと思ってしまう。

本村に乗せたパトカーが去っていく光景を、どこか眺めてしまう健二だったが、その思考を p i p i p i p i と携帯のコールが終わらせる。

ピツと出て見れば

『ヤア、M r・コイソ』

それはウイリー・マクレガーだった。

『どうやら、一件落着ト云ったところ力な』

『いいえ、まだですよ。まだ、終わってません』

『ほう？ ソレは例のサイトの事かな』

勿論その通りだ。健二にとって、あのサイトが有る限りこの事件は終わっていないと断言出来る。だが

『だとシタラ、やはり一件落着ですヨ、M r・コイソ』

『？ どういう事ですか？』

意味は分からない。

『あのサイトはもう消えたと云う事デス』

『消………えた？』

ウイリーの声はどこか楽しそうだ。

『君達の活躍でサイトの中身がI C P Oインターネットに筒抜けデス。そんなサイトで面白い物をシヨウウなんて客はイマセンよ。必然、買い手がイナケレバ売り手も居なくなりませす。もうあのサイトはモヌケの空ですヨ』
笑うウイリーの真意は掴めない。ソレは彼にとって

『それで？ 僕達に恨み事でも有るんですか？』

それはビジネスの邪魔でしかないのだから。だがウイリーは否定する。

『W h yなぜ寧ろワタシは君達に感謝してイルヨ』

『そんな嘘を』

「No。あのサイトはもうrole役割を果たしたのデス。実際、一人歩きし始めてしまいマシタから、ソロソロなんとかしようと思っていたのデスヨ。まあ、まさかMr・コイソが絡んでクルとは思いませんデシタが」

「失望させましたか」

「フフフ。逆ですヨ。ワタシは一層、君に興味が沸きました。今回は……きっと君はOKとは言ってくれないでシヨウね。デスガ、また改めて君を口説きに来ますヨ」

そんな楽しげな言葉の後に、彼は言う。

「本当に、楽しカッタですヨ。Mr・コイソ」と。

多くの人が、全てを賭けて抗いもがいたこの事件を、彼はそう言った。

ギョツ。と携帯を握り締める。

「ウィリーさん……………」

「ん？」

「Mr・Willy McGregor」

「! What is it?

(なにかな?)

「As for you, I had a dream and said that you came out of a dream」

(貴方は、僕は夢を見ていて、貴方は夢から覚めたと言った

「It is true」

「それが真実だよ」

「No」

「違う」

「What is different」

「何が違う」

「You gave up the dream that did not come out of a dream」

「貴方は夢から覚めたんじゃない、夢を諦めただけだ」

「In that way the world moves. It is a world equation」

「(そうして世界は動いているんだよ。それが世界の方程式さ)」

「Then I finish disproving me」

「(だったら僕は反証してみせる)」

「Mr・koiiso……」

健二はただ、携帯を強く握り締め

「I show the equation that it moves the world in the negative by all means sometime……」

「(ソレが世界を動かす方程式なら、いつか必ず否定してみせます……)」

……

諦めて悟しい考えで世界を回す。それは賢い選択なのかも知れない。でも、人間は、それほど賢い生き物では無い筈だ……だったら、他の選択肢を考える事を諦める事はしては成らないと思う。

諦めたら終わりだ　　そう、彼は言った。

アンタなら出来る　　そう、彼女は言った。

だったら、自分は

「I show it in the negative……So
metime……By all means!

(僕は否定してみせる……いつか……必ずだつ! 「

』
Ha-ha……It is OK The day looks
forward to coming

(ははは……OKだ その日が来る事を楽しみにしているよ 』

bye。と言つて電話を切るウィリーを思い、健二もまた、携帯
をポケットにしまう。

「いいのか?」

振り向けば佐久間が。何故か、全てを知っていると理解出来た。
だが、それでも今は

「良いんだよ……夢と引き換えの未来なら無い方が良い。僕はまだ、
そう言っていたいから」

「そっか」

「うん」

気が付けば「健二ー」と呼ぶ夏希の音がする。

あの一年前のあの日の様に、皆で栄の写真を囲むその光景に、再
び健二は駆け出していくのだった。

この夏の終戦を

祝う為に

「あゝあ。やゝっぱ、こうなっちまうのかね」

どこか呆れるも、佐久間の顔には笑顔があった。

ふ、と懐から取り出すのは……あの日、ホテルで健二がウィリーから差し出されたモノを同じ封筒。

同じ便の、違うチケット。

佐久間敬もまた、ウィリー・マクレガーから誘いを受けていた。
だが……

手前の燃える炭の中に、そのチケットを入れてしまう。瞬く間に燃え出すチケットを眺めていれば

「何燃やしてるの？」

「ん？」

加奈が興味を持ったのか佐久間の見詰める先をジッと見詰める。

「ん……成功、と……退屈、かな」

「ん？ なに？ それ」

「美味しく無い物だよ」

「じゃいらな〜い」

一気に興味をなくしたのだろう。また真悟達の方へと駆けていった。

佐久間は走り去る加奈を目をやり、再び炎を一瞥するが

「チョット勿体無いかな？ ……でもまあ」

その顔は清々しかった。

「退屈するよりズツと良いか」

陣内家に囲まれて笑う健二を眺める。

あの自分の親友は、きつとまだまだ慌しく騒がしい日常に自分を巻き込んでくれるはずだ。今暫くは、ソレに付き合っていたいと思つた。

「佐久間ーっ！ 写真撮るから来いってさー」

「佐久間君早くおいでよー」

健二と夏希が自分を呼んでいる。その周りの皆も……

「ああ、今行く」

駆け出す佐久間の前には、陣内家の後方には大きな入道雲が浮かんでいた

あの夏の日の様に

終章（後書き）

長い連載、最後までお付き合いいただいた方々、本当にアリガトウ御座いました。

途中から少しリアルが忙しくなり間が開きましたが、なんとか完結しました。

楽しんで頂けたら幸いですw w

今回は【サマー】の部分は1年後とし【ウォーズ】の部分は現実世界の武器や戦争事情なんかを踏まえたいな〜と思って書きました。暗号解読と言う健二君のチート技を出来るだけ封印したくて、他の数学を引っ張り出すのがチョイト厳しかったですw

しかしサマウオを終了と言っというの復活。しかもダラダラと……いや、面目無いw

と、言う訳で、本当にコレが最後だと思いますので。流石に他のも書いてみたくありませんな。

一応、学園黙示録と禁書あたりが候補？

オリジナルだと学園とファンタジー？

まあチラホラと考え中ですので、もし上げた際にはお付き合い頂けると嬉しいです。

と、話が逸れましたが、サマウオーズ。久しぶりに好きなアニメ映画でしたので、思う存分書けて楽しかったです。

それでは、最後に

お読みくださって、本当に有難う御座いました。

大ちゃん

(最後の「大ちゃん」を書くのが一番デレるWWW)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0999n/>

SUMMER WARS THE NEXT YEAR

2010年11月25日02時55分発行